



アラン
思想と年齢
(下)

高村 昌憲 訳

第七部 仕事

第一章 黄金時代

低次のものが高次のものを支えるというのは強い観念であり、何時も鳴り響いています。ソクラテスが言った様に、次のことしか聞こえません。「死刑に処する」は、軍規の繰返し句で、それは私たちの全ての思想においても通知の如く蘇ります。ポール・ロアイヤルの隠者たちも日に何度か、ものを食べました。私は樹の下で主任司祭のド・サン氏が、くしゃみをするのを聞く様に思いますが、その時は突然に、やむを得ず、滑稽に最も崇高な思想からハンカチの思想へ立ち戻る様です。そこからパスカルは、くしゃみは魂全体を占領すると書きました。慰労のことは言うに及ばず、そして少なくとも軽蔑しようと試みると直ぐに祈ったり懇願したりしなければならぬ眠りのことも言うに及ばず、英雄が一日に食べるものや捨てる屑の山を量るのは良いことで、それはエリス王のアウゲイアス⁽¹⁾の牛舎が素朴に表しているものです。そこに居るのは決して殺されない怪物です。危険な怪物退治が心から怪物以上のものを同時に取り除くとするなら、レルナのヒュドラを最も高い意味に理解する時にはそれも可能ですが、汚物の山についての知識も力も知恵も勇気も諦めも無いのは明白ですし、又毎時の経験によって示されてもいることです。その様にしてお清めとか奉納酒の儀式は、全く一度も隠喩的なものはありません。洗ったり焼いたりする動作は、あらゆる信仰の中にあり、湧き上がる煙は、同時に全ての勝利を表しております。従って箒はヘラクレスの持ち物になるでしょう。

ところで、人間のこの立場と原初の粘土から成る両足は、全てが私たちにこれを教えますし思い出させます。しかし、私たちは注目に値するものを私たち自身で学ばなければなりません。高次のものから学ばなければなりません。この厳格な観念が私たちの観念の中に入ることが出来るのは、この条件においてです。私たちは先ずこの条件を忘れたのでなければなりません。これを実感し過ぎる幼年時代は、決して幼年時代ではありません。乳児が他人の実体によって喜んで生きているのは更に本当です。それ故に乳児の始めは神なのです。極度な弱さは、先ず極度な強さとして認識します。この観念は遊戯によって救済され、強化されます。ここでは情操と情熱、友情、怒り、感嘆、更に絶望でさえも、恰も事物の本質が私たちの忠実な女中であつたかの如く発展します。その様にして私たちは、最も間違つた観念によって全てを開始します。探求者たちは全てが一つの回り道とか、もう一つの回り道によって真実の観念は結局のところそれらの間違つた観念が立て直されたものである、と言うに至りました。ヘーゲルやアムランの様に、抽象的な弁証法によって一方の人々は、最も自然で最も単純で最も明瞭な最初の観念が、それ自体では不十分であり、本質的に不十分であることを指摘していて、そこから蓄積しながら乗り越えることに注意して、あるいはもしお望みなら、自分の最初の財布の中に全ての富を保持させることに注意して、思想がその不安定な流れを開始します。もう一方の人々は、第一人者はコントですが、大地により近く、私たちの思想の原初としてやはり抽象的な形式であり、不十分なものでもあ

る神話を認めました。しかし他の側面から言うと、その内容は世界とその富を先ず乗り越えていて、その多様性の中には秩序も又奇跡的で十分なものであり、十分以上のものなのです。このことから詩が最初の書物になりました。そして美はあらゆる知識の先生になっています。少なくともここでは全てが最初から一緒に与えられていますので、最早翼のある弁証法は無く、人間の富を発展させるのはゆっくりとした政治です。

大変に速く行くことと、何時までも待つこととの間で、子供は決して選択しません。人は子供を長く遊ばせて置き、楽しく間違っただけにさせて置くことから、子供は自分自身に、より一層近く又より一層慣れ親しんだ別のやり方で理解させられます。まさに星々の吊された大洋を前にして砂遊びをしているのであると私は言います。子供の仕事は全てが子供を騙します。子供が工夫するものでも同じです。巷間の格言に従って先ずは生活し、次に哲学しなければならないのは本当であり明白であって、子供がそのことに無知であるのも本当であり明白です。それ故に子供は哲学することしか出来ないのです。知恵というものは、この知恵の思い出なのかも知れません。あるいはもっと適切に言うなら、他のものではありません。人間は自分の後に最善の思想を常に探して来たのであり、自分の前ではありません。黄金時代は、諸観念が世界を支配し、人間の規範が全ての事物を自分に類似したものに従わせる最良状態の現実的で感じ易い思い出として全ての伝説の中にあります。私は、自分の欲求のためとは言いません。というのも、欲求は傷によってその抵抗の頂点で生じるからです。地上の樂園とは恐らく、この幼年時代の状態がこの時代の夢によって増加された、まさに夢とは別のものではありません。その時は最早、夢が夢である遊戯ではなくなる時です。その様にして私たち全ての背後には誰のものでもない広大な幼年時代が広がっています。その泉にはミルクが湧き、果実は摘まれるのを待ち、動物たちは馴らされて大人しく人懐っこくもあります。ところで、これは厳密に真実であり、黄金時代の経験は全ての始まりであるので、その経験は他の全てのものに形を与えるに違いなく、乞食が嘗て王であった時代を何時も覚えているに違いありません。しかし又、大変良く基礎を築いたこれらの全ての伝説は、私たちが友の世界から追放されている以上、何らかの間違いのために罰せられていると結論を下すことになり、私たちの最も古い思い出を空気により漬ける子供の無邪気さが何か更に真実の色彩を与えています。ここには私たちが破らなくてはならない何ものかがあり、そして大変に遠い幼年時代と黄金時代の二つの状態の中には、何時もの同一の必然性と同一の世界を認めなくてはなりません。私たちは幼年時代を通り過ぎます。そこに止まることは出来ません。しかしながら、止まりたいと願っているかも知れません。多くの人々が成功は好運次第であるという子供っぽい観念を自分の前に持っていますが、それは屢々青春時代を遙かに過ぎていても持って来ます。そして、一緒に成長した人々を判断するのは、幼年時代に帰ることによってであり、殆ど何時もそんな調子です。そこには羨望が示されていて、それは決して労働を考慮に入れていないのです。それは黄金時代に従って判断するのは別ものです。その時は鉄の時代に従って自分自身が生きているのです。私たちが顔色を考慮する術を知った前に、必然性が私たちを十分に捕らえているのです。青春時代は既にその思考の中で、重要性の無い可能性の前で選択し

、自分の計画を神の様なやり方で行っている間に、愛は一つの事実としてやって来て、知識も無く選択します。そして、自分の外部にあるもう一つの幼年時代を直ぐに見張ります。諸観念はこの時、地に足を着けます。そして自己を養う必要性が他人を養う必要性によって、仮面を付けずに現れます。その時、気に入るものではなく存在するものを思考するための催促によって、ロマネスクなものは速やかに消えます。現実には独りでいる限り、生きることは容易です。日向で眠る程のものを稼ぐことは遊びです。放浪者たちならそのことを良く知っています。しかし人は愛するや否や、それらの結果からもっと適切に言うなら、仕事は遊びでなくなり、寧ろ労働が仕事になり、絶えず選択するのを決して繰り返さない厳しい法則にも自分を従わせます。そして、好きなことを行うのではなくて、行うことが好きになるのです。そして、子供が早く大きくなる様に、大人も早く成熟しなければなりません。そこから態度を決めた速い歩き振りになるのです。今は全て大急ぎで行わなければなりませんし、最良に行う機会を何時も逃さなければなりません。今は知る前に成功しなければなりませんし、全てから道具を作り、全ての道具から観念を作る前に成功しなければなりません。今は観念を観念として守りながらも、観念を事実と一致させる時間が無いのです。間もなく観念を救済することが出来るかも知れない観念さえも無くなるでしょう。間もなく観念という観念さえもが無くなるでしょう。何故なら、この皮肉は最初の接触において、その対照よって又、侮辱によつてさえも、幼年時代の宝物を既に瞬間的に良く救済することが出来るからです。しかし、侮辱は決して腹の足しになりません。かくして、招待されることの無い仕事が粗野な仲間を入れて、全ての事物を一つの新しい順序に並び替えますが、それは外科医とか建具屋とか左官を入れるのを見る様なものです。

いずれにせよ幼年時代を守る女性を見出す対照は、女性が他の秩序を拒絶する処からやって来ますし、女性の思考を混乱させます。その対照は、良くご存知の様に父親と子供の間での対立が互いに侮辱するものであり、誕生と成熟の間の長くて遅い自然によって齎され、仕事が事例に富んでいて言葉を惜しんでいること以上に次のことによつて、より一層取り返しがつかないものになっているのです。要するに経験が決して教えられるものでないのは極めて明白です。そして、それはペリクレス(2)が自分の息子を自分自身のイメージや似た者に育てることは誰にも出来なかったことで、それは彼が実際の政治で逸速く育った理由です。ソクラテスは絶えずそのことに驚いています。当時の子供は乳母に任せられていましたし、幼年時代の観念も同じでした。神の子キリストは生まれていませんでした。(完)

(1) アウゲイアスは、ギリシア神話でヘラクレスに命じて、一日で牛舎を掃除させたが、報酬を与えなかったので、彼に殺された。

(2) ペリクレス(前四九五頃～前四二九)は、アテナイの政治家。アテナイをギリシア随一の強国とするとともに、学芸を振興し、「ペリクレス時代」という黄金期を築いた。

第二章 プロレタリア

〈葬儀係〉は、しるしの執行者です。行為や思考さえも停止している死を前にして、命じることしか行わず、命じることしか知らないこの人間は、陰鬱な同意によって全権を握っています。彼は責任をもって事物の面倒を見ませんし、人物の面倒も見ません。両方とも知りません。ところが彼は、しるし、葬列、自分の顔付、人々の顔付、自分の服装、人々の服装には面倒を見ます。服装 (costume) とは習慣 (coutume) です。彼は隠喩を用いて生き、そして彼の思考はそこに自分を抑えます。この極端なブルジョワジーのイメージは観念に価値があり、そして対立によって描くのは純粋なプロレタリアの呑気な歩行です。彼が箱を持ち運んでいなければ、誰がコック (栓) 売りの歩き方をするのでしょうか。そこには世論を嘲笑する一人の人間がおります。世論に話しかけるブルジョアが彼にも残っていますが、それは葦笛で自分の歌を聴かせる様に、間違ったことを人々が言っているのを進んで嘲笑している、と言うためです。正しく歌うことが既に礼儀正しいのは明らかです。しかし、侮辱的なこのしるしを支えているのが、考慮しない仕事でないとするなら、何でしょうか。コックというものは、決して美しい言葉を理解しません。

人々が物を売る時は、ブルジョワジーが少し残っています。それは説得することなのです。しかし、ある程度の熟練した手作業は説得することを不用にします。そのことは破廉恥にします。自分が気に入った時で、全てを無視した時に仕事をする巧みな木彫師や靴屋のことを誰もが知っています。その人間は、その実力によって再び野性的になります。芸術家も、大変に卓越していて用心する必要が無くなるや否や、そこに戻ります。バルザックのジョゼフ・ブリドーも、それの何らかのものを表しています。彼の服装も髪も顔付さえも全てがプロレタリアです。その反対にピエール・グラスーは、慎重さしかない彼の絵画までがブルジョアです。従って二つの秩序があります。二つの生活費を稼ぐ方法があります。事物による秩序は何も約束せず、何も欲せず、裏切らず、鼻屑もしません。人間的な秩序は反対に柔軟であったり、不実であったりします。そこからは二つの知恵、二種類の観念と意見、二つの服装、二つの顔付、二つの階級が生まれます。マルクスの思想もここに表れています。人間の意見と品行がそれに倣って生活費を稼ぐ方法に依存しています。力強い思想ですが、未だ十分に展開されていません。何故ならブルジョアのことでも説明して欲しいからです。

純粋なプロレタリアは尊敬しないことを試みようとする、決してあの野性的な人ではありません。何故なら、或る種の無作法には尊敬の気持もあるからです。彼は寧ろ自分が変形した事物にしか関心事が無い者であり、それらを売ることの配慮は他の人々に任せている者なのです。そして、もっと正確に言うなら、彼が決して雇い主を見ないとしても、彼が依存しているのは彼と同じプロレタリアですが、屢々彼よりも腕が良くない監督者しかおりません。更に、労働の力しか持っていない操作は、熟練工以上により多い人々に依存しているのです。いずれにしても双方とも、気に入られることに関心がある園芸家や、説得させる術も自分の技に数え必要とあれば騙す術も自分の技に数える村の建具屋とも、大いに相違しています。従って、そこには力強くて人

数が多いが孤立したあの社会階級があり、それは決して人間の顔に話しかけず、拒否によってしか説得しません。その社会階級には鉄や銅が配慮を求めないので、決して配慮が無いこともつけ加えて下さい。それは機械的な工場によって、非人間的に調整されていて、サイレンによつての招集で家庭は乱されるので、礼儀正しさは労働から引き離され、常に休息の変調に結合されていることもつけ加えて下さい。それ故にお祭には規則がありません。結局のところ思想は、剥き出しの必然性以外に規則を持たないのです。そのことは厳格さが無ければ進まないのであり、力強さが無くても進まないのです。しかし、近くから細かく見てみましょう。私はここに旅行中に見た外国の民衆を描写します。

民衆大学の講座時代に、私はプロレタリアの精鋭と親しくしていました。この種の友情は意志と人間性によって救われていたのであり、学説ではありません。注目に値することに、生きていても直ぐに忘れて仕舞うしるしである言葉は、質の高い信頼を生んでいて、その思い出は今日でも私にとっては大変に貴重です。私の最も健全な考察は、非妥協的なこれらの対話から生まれました。そして、私が思考の中に盲従的な気配を少しでも感じると、これらの清廉潔白な証人たちを今でも思い起こします。彼らの様に野性的でありたいと私は思います。彼らの様に頑固でありたいと私は思うでしょう。しかし結局のところ、私は彼らに話した様には少しも書きませんし、彼らも私のものを殆ど読まないだろうと思います。ここでは私が説明したかった事例を更に一つ示しますが、それは人間の思想がその人の仕事に関する思想であるということです。私が自然にあらゆる種類の手仕事を愛していて、力学の良き愛好者であっても、結局は人を説得して生きているのは本当です。このことだけでも私が反対意見を少し重んじ過ぎるのかも知れません。そして、それらの理由が一つの意見よりも変えるのに容易な事実の一状態しか他の理由として持っていない時、屢々幾つかの理由を恐らく探すかも知れません。文芸への信仰が、正義に何も引き起こさないのは明白ではありません。兎に角、人が神話を気に入り、神話に耽る習慣を受け入れるのは事実です。恐らく余りに回り道は多く、余りに神学も多いのですが、乗り越えられると私には思えますし、保存されてもいるのです。私の筆と共に全ての神々は走ります。神々が証拠立てないとしても、重さになり、少なくとも隠喩になることを私は望みます。プロレタリアはこれらの遊戯や、ゆっくりとした歩みを軽蔑します。私はその理由を理解しているつもりです。

コントは既に、プロレタリアの無宗教を新しい事実として指摘しました。産業や機械や事物を不変の対象と見做す思想は、単純化された唯物論へ傾いて行くに違いありません。このことは驚いてはなりません。しかるべき処にある人間の思想とは、その人の待遇であるとプルドンは言いました。これは大した言葉です。何故なら全ての礼儀を含んでいるからです。同様に、労働者の思想とは道具であり、測定された荒々しさを含んでいると私はまさに言うでしょう。そこから私は、機械的宿命論に対して、簡単ですけれども何度も些かでも教育された、どんな労働者によつても示されているあの偏愛を理解しています。この観念はプロレタリアの熟考にとっての緯糸の様なものです。ところが全ての人々にとって好都合なこの用心の方法は、二つの理由によって

ここでは大きな成果が与えられません。第一には、機械的偏見による熟考は、その時何時も数学的前置きに欠けています。道具を取扱う人は、ユークリッドの最初の思考過程にまで痕跡を留めているあの緻密な精神に根本的に無縁である様に私には思えます。私は、「頭脳に宿った天職」と呼んでいたものについて一貫性をもって推理したデカルト的な頭脳を持った或る機械工のことを思い出していますが、彼は直線や三角形についての第一定理を殆ど激しく拒絶していました。ところがデカルトが既に用心していたスコラ学の間違いに関しては全て保留していて、数学がどんな建設的な物理学にとっても道具であることを認めなければならないのです。第二の理由には、プロレタリアの偏見が人間の世界とその柔軟な関連に関しての深い無知を含みます。そして、もしもそこに注意するなら、この観念は他の観念も十分に説明しています。こうした体質は、不躰で頑固ですが、無力ではない道徳をまさに十分に説明しています。簡単に言うと、以上が革命的な精神の形式です。敢行して変化するこの能力に関しては大変容易に目覚め、そして宿命論者の偏見と矛盾を生みますが、それは道具の先端で次から次に生まれるに違いありません。道具が君臨して支配するのです。事物は絶えず攻撃されて変形されます。レールも忍耐強くのこぎりで挽かれます。家も建ちます。橋は金属のアーチを架けます。毎日のこの証拠に対しては、学説による如何なる偏見も持ち堪えられません。労働者は確かにあらゆる人間の中で、最も一貫性のある経験と、人間の能力で最も確実な認識を持つ人です。そこからこの巧妙な頭脳には二つの主要な観念が住んでいて、代わる代わる支配している様に私には思えます。一方は、熟考を制限するもので、それに従って存在するものが存在しなければならないのです。もう一方は、行動を起こさせるもので、それがお望みのものでなくなると直ぐに、それ以上は待つこと無く、人間的な秩序を変える様に仕向けます。用心は裏切りと見るこれらの気難しい友人たちが、どうして政治上の協定を直ぐに軽蔑するのか、それは理解するのが極めて容易です。けれども彼らの思想がどうして団結によって或る一つの方法で政治的になって、あらゆる方法で忠告されているのか、彼らの注意力がどうして生活の低次の状況に常に立ち戻されるのか、そしてそれは作られた幾つもの事物によって数えるにであり、一つの鉄則に従って数える彼らの業務の力量そのものによるのですが、それはお分かりのことです。彼らの好機は、奴隷の様に言いなりになる者全体の好機であり、全ての不正は先ず彼らの上に鳴り響き、そして直ぐに彼らの厳格な部分を強固にするのですが、それは賃金闘争においての彼らが私たちの用心であり、理性でさえあるからです。そしてこれは益々これから良く理解されて行くことでしょう。

それまでの間、良くご存知の様に、どんな身分の人々も、情熱によるかの如く観念によって労働者たちから遠く離れるのか接近するのかですが、それは仕事が一人ひとりに課する説得力とか礼儀とか配慮とか尊敬の割合によっているのです。その人間に話をして自己弁護する人は誰でも困難を感じますが、それと同時に気に入られる必要性も感じます。その様にしてどんな宗教にも少しは与することになり、料理人よりもそれが多いのが召使いであり、外科医よりも少し多いのが内科医であり、乾物屋よりも多いのがネクタイ商人であり、以下同様です。もしも私たちの最初の生まれつきの観念が神学的であり、従って不信の人が世論によって確立された体制や、言葉

でも同じく確立された体制や、まさに自分自身に対しても直接的に反応することが思い出されるなら、宗教が礼儀正しい精神と共に大変良く前進しても少しも驚くことではありません。従って皆が自然に信じていることを信じないのは、一般の信仰と最も縁の無い談判においてさえも悪い状態です。尊敬する気持ちを何も顔に出さないことは、何時も物を売る人を妨げるでしょう。仕事が課せられている限り、気に入らないことへの恐れはそれ故に常に同じ様な意見に傾きます。そして、服装は最初の礼儀ですから、馬子にも衣装と言わなければなりません。しかしながら衣装は仕事のしるしでしかなく、仕事とは別の衣服なのです。そして反対する勇気は、同意されたいという必要性から自然に出し惜しむ様になります。衣服を売る人は説得します。裁断したり塗ったりする人は、説得することを決して気にしません。それ故に反抗には、生産や交換に応じて軍団や重装歩兵や補充要員を持つでしょうし、どんな店にもショーウィンドーの様に自分の意見を持つでしょう。しかし、軍団でさえも脱走兵が幾人かおります。どんな芸術家や発明者も、実力がつくと同時に、気に入られ様とする心遣いが消えて無くなります。従って全ての實力ある精神は、些か革命的で、いや、最も慎重なあるが儘の秩序を守る人々が常に感じている様に、精神とは只それだけで革命的なのです。更に、大貴族も従って、現代の数学者や天文学者や化学者が私たちの裡で見せた様に、自分自身の特権を敵にすることが出来るのです。ヴォルテールは、保有したいが最早尊敬出来ない形にこの精神を変えました。この動きは今でも政治に適応させています。偉大な数学者が、その点でプロレタリアであるのを示すことは極めて容易です。そして、物理学者が証明の曖昧さによって恐らくそれ程プロレタリアでないが、その反対に労働の性質によって数学者以上にプロレタリアであるのを示すことも極めて容易です。理工科学校卒業生は、その職務がこの精神と対立している点で著しく、精神そのものの不安定性を別にしても、それは憂鬱を背景にして美しい多様性を見せています。(完)

第三章 農夫と水夫

プロレタリアと農夫の対立は、何時の時代にもあります。私たちは犁が弓よりも以前に発明されたかどうか、決して決められません。しかし、弓を作って矢を飛ばす者が、種子を大地に委ねたり、牛や馬や犬を従わせる者とは全く別な風に自分自身で学ぶのは明らかです。弓は機械であり、機械を作る様に教えます。経験は明らかであり、人間はそこで自分自身の間違いを再び発見します。壊れている道具に労働者は、罅とか割れ目を認めますが、それは見抜けたかも知れません。そして、もしも長柄の鎌が少しも切れなかったなら、それはあなたのやり方や研ぎ方が十分でなかったのです。もしもその人が、水を汲んだり石炭を採掘する時の様に、道具や機械で必要なものを全て手に入れたなら、宗教は違うものになり、同様に政治も違うものになるでしょう。土地、水、四季、植物、動物は別な風に教えます。それらの方法は隠されています。それらが如何にして作られるのかは人間には分かりません。それらを作ったのは人間ではありません。それらの物を使う人間が、それらと同じに秘密なのです。樹木は、果実や土地や空気と一体になっています。従って農夫も、土地の色をした家や畑や道と一体になっています。労働を縁取り視界を遮る森と一体になって、慎ましい奴隷である羊、牛、馬とも一体になっていて、敵の狼や味方の犬とも一体になっています。農夫の思考も又、決して別々ではありません。信仰は労働と区別されません。信仰 (culte) は耕作 (coultre) と同じ言葉です。ここでは試みは、待つことと忍耐を必要とすることです。もしも家畜が死ねば、何らかの変更と救済策を試みる前に、一季節を待たなければなりません。もっと明白なのは、収穫が太陽と雨に依存していることです。しかし、それらは人間には手が負えないものであり、準備すら出来ないものです。既に実った収穫物も恐らく、嵐に押し潰されて仕舞うかも知れません。これは種を蒔く人には決して知ることがありません。従って彼は年の平均に従って種を蒔き、決して先が見えませし、誰にも見えませんでした。彼を導くのは伝統です。つまり年々の相違が無くなる全経験の結果です。この慎重さはそれ故に明確な知覚で規制されません。農夫はそんな規則に従いますが、それに倣って正しかったと知るのは、何年も続く年月の後でしかありません。弓の射手は、新しい型の弓と矢を素早く判断出来ます。直ぐさま試みます。でも、農夫は先ず新しいものを拒否します。彼は試みる回数や証拠となる年数を定めることも出来ません。精神は閉ざされ、顔付も閉ざされています。

農夫の夫婦の周りに家族は自然と集まります。殆どあらゆる世代の人々が夫婦の仕事を行います。そして経験は只、年齢と共にやって来るので、手腕が家長の権力から離れて行く様なことは決して起こりません。人間は、最初は従うことで形成されますし、後には命令することで形成されます。そして示すべき理由は無く、素早く見せる証拠も無いからです。権力者は尊敬を望みます。年齢が経験そのものに対して有利なのは、時々幾つもの長く続く季節の後でしか果実が実らないこれらの労働において、一日の勝利は殆ど、ものの数ではないからです。従って尊敬は進歩から秩序へ早く戻ります。そして、物質的秩序から道徳的秩序へ戻ります。更に不幸に耐える力は、不幸を逸らせる大胆な一撃よりも自然に重視されます。

それ故に畑には政治が生まれ、保存されます。ここでは年齢が全てであり、ローマの様に首長は父親です。同様にローマ人たちも、這入り込めない森林の縁に沿って年毎に伐採して開墾して行った様に、殆どの古代世界を征服したのです。しかし、この主題に関して最も明白な部分に戻って言うことにしましょう。農夫の見る処では、全ての物事が上手く行かないのであるから、何時も行っていたことを少しでも変えるのは正しくないのです。農夫の精神は従って自分自身に対して武装されているのです。

情熱に関しては、なお言うべきことがあります。それは弓の射手の情熱よりも自然と激しいものでなく持続性においては長く続きますが、農夫の労働は長く続くものであるからですし、相互に繋がっているからです。畑という不思議な道具によって労働が忙しい儘になっているからです。農夫の吝嗇は恐らく、観想的になって孤独です。何故なら他の吝嗇家たちは性急に交換しますが、農夫は自分の畑を他の畑に変えようとする考えを持つことさえないからです。彼の労働は全てそこに閉じ込められています。所有地は農夫のもので、農業の労働という性質そのものによって、生産物についての権利は、それ自体が一つの生産物である土地に及んでいます。威厳や宗教のものである家長の権力は、現在そのものの中で長く続く労働や、際限の無い未来を喜んで瞑想するのを主要とする情熱で構成されているのです。それによって息子はその中で成長し、秘められた信仰と一種の尊敬の対象になっています。それによって母親は、お母さんと呼ばれ、太陽の名において命令する厳格な主人に感謝のしるしを見出します。この暴政は従って嫉妬深く、用心深く、情け深くもありますが、結局のところ全ての態度が緩慢です。しかし、動物たちを支配することは主人の性格を著しく変えること、そして部下たちの性格も変えることを認めなくてはなりません。調教には忍耐が必要ですが、鞭と無縁ではありません。最も激しい怒りも一つの方法になり得ます。利益が、馬の調教師の恐るべき情熱を鎮めるのは本当です。彼が人間と動物の間に一種の友情を形づくるのも本当です。しかし、人間性は制限されていて、その側面ではまさに険しいことに注意しなければなりません。鶏も羊も牛も、もしも手段としてあるこの状態があらゆる種類の思考を自然と消えなかったとするなら、何らかのを知るでしょう。人間も又、この状態では殆ど思考しません。分からないでしょう。いずれにせよ売ること、叩くこと、切ること、殺すことのためにあるこの力は、未来の無い一種の友情に結びついているので、全ての友情について、そして全てのものに厳しくなる何らかの方法で、幾らかは反応するに違いないのです。ここでは人間としての立場が直接的に私たちの心を捉えていて、しかも遠慮が無いことを認めなければなりません。多分、全くの都会的な生活は、抑えの効かない哀れみから生じている拡散する一種の恐れに導くに違いなく、このことは又、反作用によって如何なる敬意も無い残忍性を説明することが出来ます。私たちが各存在に対して、そして私たちに対しても負っている哀れみを慎むのを教えることが出来るのは、恐らく農夫の生活しかありません。

纏めなくてはなりません。一つの風景が精神に話しかけ、即座に私が企てとか情熱とは別のものを聞く力強い観念を探しているのを、誰もが良く感じています。しかし、畑の平和は一種の謎でもあります。私たちが恐らくその謎をもっと良く理解するのは、それとは反対のものであり、

海を動揺させている危険によってです。ここには最早季節の深い働きは無く、春のゆったりとした奇跡も無く、寧ろ絶えず混合された生活があるだけで、四季もありません。ここでの事業は一日のものであり、いや一時間のものでさえあり、屢々一瞬のものでもあります。通路を越えると、誰ももう通路のことを考えません。各々の突風も波も、出来事に正確に定められた迅速な運用を必要とします。しかし又、全ての力は明るみになっています。海洋や凸凹や水の正確な縁取りは、記憶の無いこれらの動揺の限界と法則を各瞬間に表しています。もう少し言うなら、海は何も出来ません。港はあらゆる冒険の終わりを示しています。それ故に人間は、この縁取りから緻密で困難であるが、終わりのある行動の中に投げ込まれます。人間は自分の獲物を確かな場所に置き、不安定な自然から退去します。寄港は準備と修理と熟考のための時間です。今日の嵐は明日の収穫に何も齎しません。それ故に人間は安全であると十分に豊かになります。以上によって、一種の労働と一種の大胆さが生まれますが又、一種の怠惰も生まれます。家族はある種の労働のための協力者になりますが、最も厳しいものではありません。でも、狭い船体は別の協力者を含んでいます。同等者の政治であり、敬意の無い政治で、最も巧妙な者の権威に基づいた政治です。いずれにせよ、海の人はいくつものことを熟し、自分自身を当てにして、事物の力を決して非難しません。常に習慣を破って、常に動く世界で見張っています。彼が穿つ水脈は、彼の背後で再び閉じます。海は常に若く、常に純潔で、全てが常に再開します。しかし人々も又、何時も再開出来るのです。常に人間にとって自然な悪運という観念は、危険が広がって大変に大きくなる鋸歯状の海岸線で消えるに違いなく、それは更に別の力を仮定するまでもないのです。人はここで自分の限界を知りますが、自分の能力も知ります。動く海水と常に正しい重力によって統一が示されます。この巨大な均衡は正しいのです。それは一瞬一瞬の船の重さを量ります。水夫の足は行動の中で恐ろしいのですが、決して裏切らない力を絶えず感じています。そして、この流体の広がり分割されて、それ自体の外にあるのを人は絶えず見るので、それを想像上の魂の中に決して集めません。波は遠くからやって来ますが、結局のところ小さな水脈の流れに、その外観は空になります。それらの原因の巨大さが、それでも人が効果を限定し、自分を守ることに変わりありません。同様に、あらゆる事物との関連と連続と均衡に基づいて勇敢に行い、そして創意工夫する精神は小さな湾や入江に接岸したのであると考えられます。広大でどっしりとしたアジアと、殆ど鋸歯状の島である小さなヨーロッパを比較したがる人は、多くのことを理解するでしょう。イオニアとシシリアのミューズたちは、陸地全体のために歌っているのです。

運動を理解することは、静止を理解することよりも容易です。不動は謎です。団体は型と形式を保存します。団体は全てが擦り切れるので、その点で私たちを騙します。しかし、この眼に見えない変化は、化学反応の様に知らないうちにびっくりします。物理学は海のものですが、化学は農民のもので、事物はその時、内部に準備された特性を表面に見せます。それらの特性は決して波の様に広がりません。全てが閉じ込められて分割されます。各々が小さな体系である堀、壁、丘、窪地は、それだけで独立している様です。これらの表面には大空からの溢れた光が掠めますが、人間の一生の間は殆ど変わりありません。大陸の各部分は他の部分を見えない様に

ますし、自己のために自己によって存在している様に見えます。どんな事物も他の事物を隠し、自己を隠しますが、森に見るが如くです。そこでの一步一步は新しい世界を発見しますし、保持されていたものを覆い隠します。人間は行く処を決して知りません。そこから人間的しるしの価値のある遺跡、小道、消えた燃えさし、骸骨、墓は文章の様なものです。ところが海上には何も書きません。人間は自分自身の観念に従って海へ向かって行かなければなりません。港へ帰る水夫は如何なる者でも鐘楼とか灯台によって、遠くを見定める両眼を持っていて、近くであればある程動くしるしを無視します。その反対に、陸地に住む人は何時も人間の足で歩き、他人の行動に従って思考します。一本の道には一種の法則があり、各時代を通してより一層敬うべきものになります。古さがここでは証拠になり、書かれたしるしは神なのです。しるしによって眼に見えないものが地上に住み、事物が見えたり隠れたりすることは、同時に全ての田園の神々を見せたり隠したりします。それは最早、巨大だが規則正しい海の神ネプチューンの力ではありません。寧ろそれらはまさに、分離されていて、眼に見えず、気紛れで、木霊の様に見せかけの神々であり、近づくと常に石や木々や泉の中に避難して閉ざされた顔をしているのです。（完）

第四章 ブルジョア

説得することで生きているのは何でもブルジョアです。この言葉は都市の中で緊密な社会を説明していますので、この意味が適しています。同様に、これらの接近した生活を支配しているのは、習慣と礼儀の諸法則です。その上、どんな家庭も内部にはブルジョア的なものがあり、私たちは説得することで生きている幼年時代の時には、全員がブルジョアでした。老人も同じ様に生きています。これらの二つの縁は、多少なりとも成人の生活にも侵入していて、司祭や弁護士や俳優の様に完全なブルジョアにおいては生活全体を覆っています。結局のところ家庭が殆ど何時も幼年時代よりも遙か後まで捉えているので、プロレタリアの生活を大胆さと能力と充足の瞬間として見做さなければなりません。どの様な仕事においても、一定度の力は私たちをそこへ運びます。説教師でさえも、計算も節度も無く自然力の様に働く瞬間に、そのプロレタリアに関係しているのはあり得ることです。勿論、彼は修道院とか司祭館の中ではブルジョアを取り戻しますし、説教そのものの時には更に屢々取り戻します。将軍や王や政治家がブルジョア的な方法を忘れることは時として、又は屢々あり得ます。最も高貴な貴族とか大富豪も又、多くのプロレタリアのものを許します。そこから殆ど全てのものが混淆されます。観察者は顔の動きや音声において、それらのニュアンスを把握するでしょう。何時も阿（おもね）る人などは決しておりません。だが、決して阿らない人もまず殆どおりません。

この状態はプロレタリアには驚きです。彼は協同して行う術を大変良く知っています。相互扶助は彼にとっては本職のものです。しかし共同作業でも、間違える者に何かを認めなければならぬことをそれは断じて意味しません。その反対に厳格な事物が、その観念を激しく拒みます。何故なら、労働は少しも遊びでは無く、間違った意見はまさにその結果が出る前に厳格に直されるからです。反論を加える動きは従ってその人間に対して、何の用心もしていないことです。それ故にプロレタリアにおいては、反論を加える最初の動きは、決して礼儀正しくありません。つまり過ちが人を傷つけます。そして如何なる隠喩も無いこれらの生活にあつて、何よりもの救いは誤った観念を素早く避けることです。正確に言うなら、それから自分を守ることであり、他人もそれから守ることです。友愛の効果はここではそれ故に寛容さが少しもありません。従ってこの別種の相互扶助は、意見に意見をぶつけないことに存在するものであり、結局のところは大胆に思考しないための用心に基づく一種の友情を築くことに存するものであり、自然とプロレタリアには理解出来ないものです。ある意味で協同は社会を拒絶します。

それはプロレタリアが社会を拒絶していると言おうとするものではありません。そんなことは言えるものではありません。しかし、社交的なこととは二つの意味に理解されます。人は正しい社会を望むことが出来ます。そのことは同類の人々を探すように導きますが、その様なことを望んでいる人々が決して見付からないとするなら、例えば自分では明白に判断しても、その様に決して他人が思っていないとすると、その様な社会は抽象的であり、何かにつけて碎かれますが又、容易に結び直されます。気分がそこに罫を仕掛けます。友情がそこで生きるのは困難です。正し

くても正しくなくても、人は社会を望むことが出来ます。それが好きであるからにしろ、そこで生きているからにしろ、殆ど何時もこれら二つの理由が一緒になっています。この時、人は最初の動きを恐れ、それらを裁くこと無く、それらの相違を受け入れます。取分け、それらに注意し、測り、満足します。口論する人は人間を少しも知らないのです。これらのことに注意することで、第一に人を決して立腹させない礼儀に関しての十分な観念を手に入れるでしょうが、直ぐに誰でも、あるが儘に理解して驚くことさえも見せないことです。礼儀正しさは洗練された人々に対してはより一層容易であるのは明白ですので、礼儀はそれ故に自分自身の相違を包み隠し、出来る限り他人と似ている様にして行くことです。不快感を決して与えないこと、髪型とかネクタイで驚かせたりしないことが礼儀正しさです。流行は礼儀正しい人間の避難所です。

ところが、精神は機械論から出発し、実践家にしろ理論家にしろ、ここでは尊敬することも理解することも出来ません。敬意のあるあの完全な方法とは、行為が言葉に遡り、結局のところ思想に遡るものであり、屁理屈家にとっては響きを買います。そして屁理屈家においては、情操が最小のしるしであっても、侮辱になります。礼儀正しさに欠けるのは未だ許せる誤りです。しかし、もしも礼儀正しさ無しで済ませるつもりであることに気付くと、その誤りは許せないのです。いわばそれは尊敬無しで済ますことを約束するものです。このことは臆病になってやがて苛立った期待の下に、相手の全ての思考を溺れさせます。ソクラテスは、教養ある礼儀正しい人々の前でこの危険な遊戯をしましたが、これらの人々から見ると、或る種の真剣さは如何なる礼儀正しさも無い一種の戦いであることを示していました。無礼な方法です。反駁するから無礼なのではなく、前もって尊敬を拒んでいるからなのです。衣服は武器であり、自分に対してもまさに武器である様な、あの信望のある人々のサークルにおいての裸の儘でのあの戦闘への招待は、厳密に言って下品なのです。更に、これらの人間たちのサークルにおいては、全ての人々が何らかの学者であり、政治的な議論によって形づくられていて討論という遊戯が非常に遠くまで行けるのです。しかし私たちのブルジョアのサークルにおいては、女性たちが座っていて、臆病者が尊敬と避難場所を見出していて、親戚と策謀と利益が眼に見えない糸を張り巡らせています。そこでの第一の法則は人々の気に入ることではなく、立腹させることでもなく、まさしく慎重さが全ての言葉の変わらぬ規則であり、冒険心は一人ひとりの心の奥にさえも、どんなに小さなしるしさえも決して示そうとしない心配りによって、ぎりぎりまで流し込まれていると一般に理解されています。それ故にスタンダールは、人の態度と言葉に注意して歌う様に話す臆病者たちの集まりのことを考えて、次の様な恐ろしい言葉を書くことが出来ました、「正しい推論はどんなものでも侮辱する」。推理することとは突き飛ばす様なものです。それ故に普通の人、それなりの教育を受けていても、直ぐに何気なく月並みな考えに至って、礼儀の奥にある人の気に入らないことへの恐れから、誰もが慣れている言葉を変え様ともしません。そして最も臆病で無知な者が、自分だけの個性だけで音頭を取っているのであると人は感じ取ります。でも、それ程人は彼のことを考えて訳ではありません。更に、彼の法則に忍従するように勧められていることありません。しかし、ここでは考えることなく発揮される勘が重要なのであり、盲人の様に衝撃の

前に障害を感じるのです。それ故に疑い深くて全ての馴染みの無い観念を前もって閉ざしているこれらの顔は、尊大さが直ぐに滑稽であるために、罰することとは全く別のものを齎します。一般の期待に反して、これらの顔は直ちに人々を支配します。これらが滑稽なのは、喜劇の舞台上だけです。これらのサークルの思想は直ぐに最も低次の水準に落下することになります。そこでの陰鬱な倦怠にはトランプ遊びが薬になります。組み合わせたり、即興的に作ったり、態度を決めたり、結局は自由に思考して敢行する欲求がそこに全てを投げ入れるのを見ることは、美しくもあります。もしもその人間の重さと慎重さの絆を感じたいなら、それらの風俗と性格と情熱についての何らかの会話によって、遊戯の開始を少し遅らせることで十分です。これらの題目はどんな人間も目覚めさせますけれども、より一層正確に言えば、まさしく目覚めさせることそのことによって、あなたは辛抱出来ないものを見るでしょうし、全員の眼がトランプやチップへ注がれるのを見るでしょう。

それにも拘わらず、誰もが知っていて、平凡なものは何も無く、結局は思想の美しい遊戯を期待することが出来るサークルを仮定してみるなら、彼らは如何にして精神という美しいこの言葉をダイヤモンドの様に限られていて、押しつけられ、磨かれるのかを容易に見抜きます。況して才人はもっと限られています。彼は前線で規則を掲げて、気に入らうとする意図を重々しく告げます。礼儀正しい社会は只、精神と言いますが、精神が示すことが出来るものをそこで明らかにするなら、言うこと、聞くこと、証明すること、自らを打ち明けること、結局のところ話しながらも発明することのための一つの方法も又、同様にもっと言います。それは禁止されているものではありませんが、不可能なものです。この判決には控訴がありません。それは非難しませんし、処罰もしませんが、排除します。踊り子の群の場合と同じ様に、或る動きは禁止されていませんが、不可能なのです。取分け活発で元気づける会談を規定する物理的な法則があり、これを軽視することは出来ません。演説者が対談で、自分が演説者であることを忘れないなら滑稽でしょう。しかし他方で、言葉が交差している処では、期待されず見抜くことも出来ない新しい観念が単に理解されることも不可能です。ここには少し耳の聞こえない者に話しかけると同じ困難があります。そこには逆説を殺すものがあります。苦い経験によってこれらのことが分かると、誰もがこれと折れ合い、何もかも重要に見ないという振りによって更にこれを確認しますが、そこには自惚れの種子が見出されます。以上は会話の憲章です。踊り子の名手の様に、最高の技術はこれらの拘束の中でも自由でいることであり、何も引き止めず、押し返すことも無い程です。というのも鋭敏さをその様に現すものには多分、それ以上に不安にさせるものがあるからです。決して言うてはならず、思考してもならないこの情操を、人は勘と呼んでいますが、それは思考の前に良く知らせてくれるものです。数々のやり方でその様に守られている精神のこの自由な歩みを人は優雅と呼んでいますが、それは自分に帰ることがありません。スタンダードが言った様に、或る種の精神が空間を必要とするならば、それは既に大したことです。絨毯を広げる奇術師と言われたいでしょうか。その精神は通り過ぎますが一瞬光輝き、思考の輪を直ぐに再び閉じて終了して仕舞いますので、熟考がそこに這入ることは出来ません。精神の輪郭はブレスレット

の様に閉じられています。出口は決して見えません。魅惑は、理解したという思い出の中にあります。精神の輪郭は自分自身の意味を消します。それは遠くまで行き、あなたをすっかり止めます。微笑は一つの思想にさよならを言うことを意味します。思想を持ったことへの喜びは、それを辿ることの苦しみによって決して甘やかされません。その技術が完成されれば、従って作品を決して人に委ねたりしません。そして、最も光輝く精神が会話において失われるのも、それによるからです。

これからは、一瞬に開かれても直ぐに閉じられる富裕に満ちた保守的な精神を知って下さい。全面的に守られていても監視兵さえも見えない世論という要塞を知って下さい。確かに利益は計り知れないものであり、精神は金庫の様に秘密の鍵を持っています。ですから愚か者にしか閉じられていないと思うのは間違いです。プラトンやデカルトから思考法を学び、一つの観念を辿る術をしっている者、詩人や歴史家や政治家たちも知っている者、その様な者は何者かの裡に一つの観念を入れるのがどれ程困難であるかを、そのことだけで知っています。そして、大変良く自分のものにしてはいますが、証明する術は、全ての人々に対して用心を必要としていますし、まさに殆ど全ての人々に対して用心以上のものを必要としています。それにつけ加えて言いますが、自分の経験そのものによって彼が真実を発見する困難は、証明された全ての真実を集合させた儘にする困難と比べれば、無い様なものであることを知っています。強力な情操が観念の前では決して屈しないことを別にしても、観念の中では寧ろ良く変わらなければなりません。それは保存することの希望にしろ、いや寧ろ希望以上のものによって反駁することを治します。そこから彼は、殆ど全ての証明を裁き、乗り越えて仕舞います。それはあらゆる証明、取分け新しい証明の前では、敵と見做されるであろう用心深い態度を取ることになると思います。一人の人間が学者であり思索家であるのに従って、認めなくてはならないことは、証拠の単なる提案だけでは無作法であり、強制する試みがどんなに小さくても、全く礼儀正しくはないのです。何の手心も加えない議論は、高級な人も低級な人も、思想を実現可能にする全ての条件に欠いていると最後には判断を下します。決して珍しいことでは無いのですが、私の冒険的な探求においても、岩の様な政治的な意見や宗教的な意見と幾つも出会いましたが、私は強力な頭脳においても驚いたものでした。しかし又、私は他人に対する礼儀正しさや無遠慮な人々に対しての用心がそれに関係していることは、決して数えられる程少なくはありませんでした。証拠を無視しないことですが、期待し過ぎることも愚かです。礼儀正しい人にネクタイをしなくて済ませることが出来ると、私は証明しようと試みるのでしょうか。（完）

第五章 商人

希望と危険に関する賢明な打算によってお互いに相手を平等に扱うということを認めていた、とプラトンに出て来るカリクレスの様に人々は時々言われたいのです。誰もが力の濫用に対して保護されるという条件で、自分の実力に従って征服し害を加えることを断念したのです。そのような協定によって、一人に許されたことは万人に許されていたのです。これは不平等に対する保証契約に過ぎませんでした。ところで、法律を理解しなければならないことは、まさにその様なものです。しかし法律が生まれたのはこの様なことではありません。寧ろ法律は、穏やかなざわめきに溢れた市場の中で生まれたのであり、売り手と買い手の双方の術策によってです。自然の事物も人間と同じ位に古いものであり、そしてそれはあの商業の守護神メルキュールによって偽物も本物も素晴らしく表されていて、このメルキュールによってニュースが運ばれて来るのです。何故なら、もしも少しも待ちたくないならば、誤報しかないからですが、忍耐があれば全てを知るからです。この様にして市場においては、売ることを急いで言わない商人たちと、買うことを急いで言わない主婦たちの、双方の嘘によってやがて全てが明白になります。全ての人々が何時か言おうと思いつつながら、誰も最後の言葉を言いたくないのですが、やっとな最後の言葉が言われることとなります。そして、それが公正な価格になります。流通が商人たちによって確立される時、彼らは一人ひとりが慎重に譲歩を制限する四方に広がる競り売りと同じで、それは恰も一人ひとりが全ての人々から忠告を受け、合理的な人なら誰からも前もって同意されることを確認するが如くです。軽薄な人々は、誰もが望む幸福な取引を、一種の窃盗と見做したがって常に譲ります。しかし、この安易な展開は何も把握しません。窃盗と泥棒は、知らないうちであろうと強引であろうと、本人が同意することも無くその人の財産を奪う行為であると完全に定義されます。その反対に市場を構成するのは同意です。知識と自由を含んでいる同意です。無知の時は市場のあのざわめきを、ラケットでテニスをする様に受けては返ししながら、売り手も買い手も待機します。しかし、少しでも強制的試みに基づくと、全ての商店は閉ざされます。その様にして市場では自由が先ず要求され、平等が探求され、そして長く人を欺かないあの商業のざわめきによって、やがてそれらが発見されます。このざわめきは耳に良く響きます。

想像力が、何処でも同じ様にここにも罫を仕掛けていない訳ではありません。どんな値段でも売ったり買ったりする様に、唆（そそのか）されるこの恐慌を誰もが知っています。この様な出来事は屢々描写されますが、価格の安定性と価格についての各人の安心を決して忘れさせてはなりません。それらは通常体制であり、お伽話に出てくるバグダットにおいてもまさしく同じです。市場は、人間集団における正しい意見の推敲にとって最も美しい例です。良く見ると、唯一の例でさえあります。それは決して嘘をつかない議会です。何故なら取引を対象と見做さない集団においても、一人ひとりの意見は明らかにされるよりも寧ろ確認されるものであり、情熱はその時、非人間的な要素の様働いているからです。討論者が三名以上になると、ソクラテスの用心は共同での探究の困難を良く理解させてくれます。各人は自分の先入観を武器として差し出

します。その代わりに感情の何らかの好みによって価格を学ぶかも知れない商人の例は決して見出さないでしょうし、その様な行いは拒絶するでしょう。私たち人類において、調査と懐疑と批判に関する共通した観念が何処から来たのかを説明したいなら、練兵場を眺めるよりも市場を眺める方が役に立ちますし、どんなピラト（1）でも、何時も両手を洗っている法廷では同じです。購買と販売は私たちの理性にとっての最初の師ですし、法廷は彫刻を施した秤を自慢しています。古代のこのイメージは、申し分なく私たちの思考を導いています。平和と正義と法律の規範は適切な交換の中にあります。極めて普通のことですが、注目されるのは極めて僅かですが、そこから売り手も買い手もお互いに満足して戻って来るのです。人間性全体の基礎は経済的なものです。法律的なものは、それらの諸規則をそこから手に入れました。

どの様な諸規則でしょうか。何よりも力とか単に力の誇示は、正義を消しているのです。価格が戦闘で定まる市場は笑われます。その反対に、交換は力の沈黙の中で完了します。しかし格式張っていて、各人が自由であることを確認する一種の後退の後で完了しますし、そのことを公に知らせています。農民の駆引きは何よりも最も長く、何も決して明確にされていませんが、少なくとも自由だけは明確にされています。そして、これらの独りよがりと偽りの破棄と復帰はお笑い種でしょうが、実のところは形式的なもので、自由な同意がより一層良く現れる様になります。一連の慎重な歩みや慎重な動作と、手を打って結論を下し決して誰も戻ろうとしない行動の間には、一つの美しい対照と沢山の意味がまさに認められます。最初は決して縛られる儘になろうとしないで、十分に注意する人間も、その時には自分を縛ります。これらの習慣が法律を規定します。強制された交換は全てが窃盗です。それ故にここでの商業社会においては、この不敗の観念の根が見出されますが、その後で最も大きな力は決して与えず、又最も小さな法律の始まりも与えることが出来ません。裁定者はこの点に関して決して躊躇しません。強制に見えるや否や、どんな契約も無効にします。以上が市場の内的な法律です。これには注目すべきことがあります。最も傲慢な力もここでは屈服します。強制は売るためにあった全ての物を消えさせましたが、力は直ぐに運搬と製造と生産を鈍らせることを素早く経験していたのです。最も勇敢な軍隊もそれ故に餓死するかも知れません。従って暴君も買ってお金を支払いますし、征服者も同じで、気楽な粉ひきの美しい寓話が意味していることでもあります。力は、最高の勇気を食べる必要性に従属させるあの不敗の関係に倣って、裁定者に任せます。それ故に、武装した人々が市場を取り巻いています。市場は彼らの胃であり腹と同じで、力には力で対抗しますが、それは全て価格を決定するためのものではなく、力が価格を決定したがっているのを防ぐためです。その様にして人々を保護するためであって、人々のために考慮することによるものではありません。それは力の習慣とは全く縁が無く、これらの人々が集めて、保存し、支払いと引き替えに提供する有益な事物への考慮によるものです。法律家においては常に法律が事物から人間へ遡るのを見て、時として驚かされます。それは生産や交換の安全が個人個人の権利を認めて、定式化して表す様に導いたのであると言うことに帰します。そして、以上が自然な順序です。低次のものが高次のものを支えるのであり、そしてまさにそれを規定しています。

そこにはそれ故に市場があります。それは骨の箱の中の様に、十分に保護されて共通した頭脳です。その内側では計算が適切な法則に従って発展します。力が決して這入って来なくなると、直ぐにでも精神が決定しなければなりません。全ては金銭の山の如く、明らかでなくてはなりません。騙すこととは、既に強制するための一つの方法です。それ故に欺瞞は隠蔽されますし、恥ずべきものなのです。トランプ遊びにおいても、知識の手段が双方共に平等であるか否かで騙すことが許されないのと同じ正直さがここでは認められますが、それでないとすれば、それはインチキをすることです。同様に、商人の世界においても、契約には事の不確実なことと、確実なことを知るための平等の立場が人間の間にあることだけに価値があります。価格とか品質について子供は騙されることがあり得ますが、そんなことは決して認められないでしょう。知る立場にない者の前で、もしも知ることで優位になることがあるとするなら、それは既に力の濫用です。その無知が、もしも怠惰とか無頓着とか、或る種の大っぴらな軽薄さから来るとするなら、良心の呵責を感じるのはより少なく済みます。子供よりも浪費家の方が容易に騙されます。しかし、浪費家は騙されることを意に介しません。その上、この種の取引は例外であり軽蔑されます。取引の主要な部分は専門家の間で、つまり平等な立場の間で取り決められます。絶対的に同じものなどはあり得ません。しかし、平等は市場の理想的な規則の如く、それでも尚、探求されているのです。そこから相手の立場に身を置くことが出来て、相手が知っていることを知っていて、更に市場が正しいと判断することが出来ることが金科玉条になります。この規則は適用されることよりも屢々引き合いに出されて援用される時、それでも尚、真実の社会の観念を含むことになります。「私の身にもなって下さい」。これは損をしている者の弁論でしかありません。「私はあなたの身になってみます」は、あらゆる平和の始まりです。この規則が他人の規則であったのを望む人々、そして決してこの規則を破らなかつたのを望む人々、この様な人々を越えて、少なくとも決して破らずに万人に評価される商人を一人は各都市において常に引き合いに出すことが出来ます。この格言はそれ故に高次の精神に宿っています。しかし、再び降下しなければなりません。

商人は、意見によって何時も規制されている家庭生活によりブルジョアです。それというのも私生活は秩序と利益と信用の指標であり、男性と女性の協力によって、又取引の格言に倣って子供たちを養う心配りによって、屢々締め直されているからです。商人は、商売上の礼儀正しさによってもブルジョアです。それは仕事上の関係が友情を築くことになるのも珍しくないのです、何時も渋顔でいないのです。同様に職業柄、世論に注意することによってもブルジョアです。それは個人の意見を尊重する以上の何ものかです。商人は相手が言っていることから考えていることまで絶えず遡りますが、それは大変に奥深い礼儀であり、それは何時も渋顔では無いものです。その様な人は決して逆上せず、忍耐強く、気分には流されません。見抜いた後に説得することへの希望によって、何時も言葉に理由を探します。この方法は、心ならずもソクラテス的でもあります。人間に関する或る種の認識は、商人の武器です。そこからどんなに驚くべき意見を前にしても、素晴らしい節度を示します。その点で彼は外交官です。しかしその半面で商人は、次の点

でプロレタリアに似ています。彼は事物を取り扱い、計算し、整理し、保存しますが、変えることはありません。更に、もしこう言って良ければ、同じ封筒の中に入れ直すのであり、それは位置や大きさや数量との関係を考えて減らしたりすることなのです。ラシャ地は、洋服の仕立屋と同じ方法では商人の組み合わせに入って来ません。香料の商人は別々に保持します。それらを調合するのは料理人です。そこからは如何なる発明も無い秩序の精神がありますが、更に事物と計算と金銭の中で何時も探し求められている対応によって刺激されています。この抽象的で融通の利かないこの秩序しか注意しない会計係は、恐らく商人の間では一番ブルジョアではありません。彼が話す時は、何時も厳格な必然性の名において話します。計算には決して手心がありません。どんなに雄弁な人々も、数には叶いません。しかしながら、この半ブルジョアには事物を考慮に入れはしますが、絶えず事物を変える物作り職人の大胆さは決してありません。一軒の大きな家は一般に三人の人間で建っています。一人は事物を製造したり選んだりすることに忙しく、外部の秩序に直接関係しています。頑丈なもの、抵抗するもの、重いもの、軽いもの、固いもの、脆いものが彼に仕事を与えています。その点で彼はプロレタリアです。彼は、服装や行動や話の調子でそれが分かります。彼が扱って抵抗を受ける人々も、正確に言えばそれだけプロレタリアです。反対に、ものを売る人は人間の世界を動き回り、何事が起ころうとも意見のために陳列します。この二人の間で会計係は、抽象的な秩序を知ります。何故なら、利益も損失も同じ計算によって数えられるからです。そして、どんな商人にもこの三人がいるので、この人種はその秩序の支えを次々に生み出しながら、あらゆる種類の知恵と共にいるのです。（完）

(1) ピラト（一世紀）は、ローマ総督で、ユダヤ人の抵抗運動を弾圧し、イエスの処刑を許した。

第六章 権力

もう一つの法、もう一つの正義は次のとおりです。ここには裸の力があり、ピンダロス（1））が言った様に、決して買ったのではない牛たちを先導するヘラクレスがいます。喝采される力、祝福される力があります。ヘラクレスのこの美しい神話は、純粹で素直であり、人間が強い手と、もう一つの強い手である強い顎で、絶えず行使している征服と破壊の力を思い出させたがっているのです。そこにはカリクレスがいて、赤面するのを恥じる野心があり、大変細心に報われる野心があり、与える以上のものを更に手に入れることで感謝される野心があります。正面には直ぐに黄金の塊であるソクラテスがいて、力そのもので反対者が現れて来るまで『ゴルギアス』の坩堝の中で溶かして再構成するのです。何故なら二人の人間は屢々一人よりも強く、そして千人の人間は常に一人よりも強いからです。以上のことから商人たちの規則は、ヘラクレスに反対して戻って来ます。しかし、これは一瞬でしかなく、〈唯一の反対者〉は蒼白い自明の事柄を長く照らしません。というのも、百回以上もローマの秩序は勝ったからです。それは百人隊長と、葡萄の木一株で速く植えた野営地の杭によるからでもあり、又、千の足を持つリバイアサンの頭であり、心臓である首領によるからです。その力は、水が斜面に従う様に服従に従います。そして、蓄積されたその力は、一部となり条件にもなるその人の中で勢い良く鳴り響きます。鉄則に従って他の活動と結び付く彼の活動は、無政府主義的な群衆を蹴散らします。そして、やがては凱旋道路の両側に、磁石によって引き付けられる如くに整列させるのです。そこからは別の契約が生まれますが、ジャン＝ジャック・ルソーは空しくも嘲笑して言いました、「私は、あなたが気に入ることを行うと約束する。それなのに、その代わりにあなたは、あなたが気に入ることを行うと約束する」。アレクサンドロス大王、カエサル、ナポレオンが現れて同意によって強く同意を強制するまでに至ります。アレクサンドロス大王とカエサルの中には瞑想するティベリウスがいて、何も要求しないで全てを手に入れます。もう一度十分に行われた経験は、多数は一人よりも強く、懇願された視線は首領へ向かって崇め、首領にあるのを同意することに感謝し、首領が決して行いもしない悪に、余りに幸福な思いになり過ぎるのです。ここに不気味な光の如くローマ軍団が現れ、たった一人の人間が十人の中から一人を選びます。そして十回以上も選びますが、それは残りの九人によって殺させるための軍隊です。そして、残りの九人は決して卑怯ではなく、弱くもなく、その反対に彼らの力によって現れる力にくっついて、言葉の無い必然性に従って彼ら自身の本質に身を任せているのです。この劇は絶えず演じられています。車に乗っている警官は、私たちの判断に従うのではなく、彼の判断に従って私たちを罰することから、私たちは彼を敬います。従って追従者たちが卑しいだけなのは、彼らが弱いからです。この力の契約に署名するのは、本当の処は力なのです。そして兵士は隊列にいて、より一層真っ直ぐになります。そこに見ることが出来るのは、命令することへの期待による服従への打算を見るかも知りません。いえ、そうではなくて、それは寧ろ無秩序が最も強い人間に嫌悪を催させるのです。それは暴動と私たち自身の情熱との間の深い類似性によるのであり、プラトンは『国家』において

、その点を決して倦むことなく熟考しています。そしてヘラクレス自身が行おうとしていることを最早知らないでいるのにびっくりする如く、監獄から出る群衆もかくして投獄されていた激しい怒りを、正しい活動によって私たちの裡で解放します。運命は、愛されていないとするなら、恐れられることもないでしょう。強い人間には恐らく、自分自身の怒り以外にこの世で怖いものはありません。この回り道によって、秩序は暴力の罪を許しますが、私たちは未だそれを学び終えていませんでした。

人が眠る時に見張られることは何事かです。そして空腹が大変に気が散って人を纏めることから非常に縁遠いことは別にしても、恐怖は空腹よりも鎮めることが困難です。経済的な機能が、少しも最初の機能にならないのはそんな訳です。先ずは決して恐れないことです。しかし人はやはり夢を恐れるかも知れませんが、自分自身の思考もやはり恐れるかも知れませんが。説得することは又、別の力です。最も古くから尊敬されている人が、もしも首長とか強い精神を持った人であったとしても、悪魔祓いの儀式とか呪いによって説得する魔法使いであったり司祭と命名されている人であったとは言えません。想像力は怖いことが信じさせ、そして見たと信じる処から思考する人間にとっては、恐らく最も恐るべき敵です。バルザックの『田舎医者』における納屋でのあの有名な夜の集いにおいて、ナポレオンの叙事詩がやって来るのは二の次でしかありません。最初にやって来るのは〈勇氣あるせむし女〉の話であり、これに倣っても信じられるのは最も本当らしいことではなく、最も怖いものであると理解することが出来ます。不在のものを現したいと思っている語り手は、原因と結果による一連の合理的なことよりも、恐怖による震えによって遙かに上手く成功を取めます。フライパンに煙突から落ちて来る人間の血だらけの手足は、非常に恐ろしいものであるから証拠には拘りません。現実の経験が不可能であるとか、決して事実でなくなるや否や、全ては強烈な印象によって想像力の中で結び付けられます。関心が無いことは、本当のことであっても決して信じられません。激しく心を動かすものは何時も信じられますし、不条理なものは不条理そのものが不安にさせるので、邪魔になるどころではありません。人間の世界を狂人たちに委ねたこの奇妙な方法に倣うなら、思想の最も古い機能は、説明することよりも寧ろ規制することにあります。そこから思想は証拠によるのではなくて、力によって常に支配しましたし、今も未だ支配しているのが分かります。そして最も好意的なサークルにおいても証拠ではなくて、精神力によって支配していることが分かります。最も良い忠告を受けた幼年時代も、恐らく千のうち一つも証拠がある訳でないに違いありません。兎に角、信じるものに一致するのは証拠によって理解しなければいけません。取分け強い精神を持ったプラトンは熟考が友情に負っていて、討論には決して終わりが無い様に、何よりも厳正さには証拠があることを独りで進んで認めて、痛い処を表しました。本当の処、自由による思想の発展は、平和による力の組織と同様に少なくとも困難です。人は待つことが出来ないのです、和合は正義が無くても行われる如く真実が無くても行われます。その様にして司祭と兵士が深く結ばれます。彼らは双方とも既存の秩序の擁護者です。同一の人間の中にも共存しています。何故なら司祭が強制したがる如く、兵士も説得したがることは何時も見られるからです。常に極めて迅速に再編される

戦争組織も同じく、理を説く力と強制する理性と何時も交互に見させてくれます。

この著作はどんなものも生理学的です。説明することを目的と見做し、全然咎めません。そして各人の裡に支配している性急さは殆ど満足しないとしても、そこから始めなければならないのは明白です。人間がその決心、その矛盾、その拒否において絶対的な謎であったなら、何かパスカルの活動によって、私たちが最も高次の力で最も異論の無い力のうちに隠れ家を求める様になるに違いないとしか理解しないのは誰でしょうか。パスカル以上に柔軟でないのは何かあるでしょうか。彼は聞くことすらしません。ところがエリートは誰もがパスカルのですし、必ずしもそのことを知らないとは限りません。これらの秘密の魂は最早最後には、秘密でなくなります。そこでは全てが監獄の様に明らかです。想像力の前では理解し難くても、監獄の前では大変良く終わっていて、一寸した門までそうなのです。それ故に彼らに尋ねることも頼むことも出来ません。精神はその時、門の上の一条の光の様に何ものも動かさない一種の冗談によって答えます。自分自身の思想に対して安全を見た人が、私たちの思想に対しても又安全を見ていないと考えるのは狂気の沙汰です。それ故に強者たちの友情は、どんなに小さくても常に何ものかを終わりにします。精神は常に思った以上に追従的です。それ故に距離を置いて後退し、極めてぴったりと合った調整であるが、最後までねじ釘を回し切らずに全て独りだけで模倣しながら、人間を離れて人間を再構成しなければなりません。服従することは決して困難ではなくて容易なものであるので、又信じることも決して困難ではなくて容易なものであるので、もしも私が望むなら、思想の辛い活動を一瞬の力によって終わらせることを理解します。そして更に体験することもあります。デカルトは、不決断が最大の悪であると書きながら人間の多くを解明しています。しかし政治というものを殆ど激しく拒否したこの人物においては、確乎たる懐疑が残されています。神に対する懐疑であるとさえ敢えて言えるでしょう。軽率な者には直ぐさま閉ざされる人間の秩序に対して、デカルトよりも疑わないコントは、厳格な格言が証明するが如くに、自分の肩に固い木材の規則を確かに感じたのです。「思想は決して支配するためのものではないが、奉仕するためのものである」とコントは書きました。「決定するためには力が必要である。理性は決して光しか持たない」とも書きました。これらの言葉は閃光を放っています。しかし恐れてはなりません。恐らく、保証はすするが麻痺させる甲冑の如く、自己の力を全て投げ出さなければなりません。ソクラテスとデカルトの二人の人間はこれを行う術を知っていました。

プラトンは、希望を残す神話に頼りました。信じ過ぎることから身を守るために、全てを信じることは見た目以上に恐らく最も深い策略です。正当にも神的と名付けられたこの知恵を手本と見做すなら、私は聖クリストフ又はクリストフォロス(2)の神話で、フランス名がポルト・クリスト(キリストを運ぶ者)の神話に注目しますが、その大きな主題において足るものが何も無いのに十分に豊かであるのです。何故なら彼が最も力強い主人を探しながら、神を探し求めているのを私は見るからです。しかし殆ど重くないが、彼にとっては大いに必要で、花の咲いている杖が保証する様に、神々の中の神である子供でないとしても、彼は最後に何を見出すのでしょうか。そのことが理解させてくれることは、力の中の力であり、エホヴァとか必然性と呼ばれている

至上の力に達しなければならないことです。そして、この力を愛した全ての人々はこの道に沿って行き、時々是非常に速く進みます。しかし力は完成によって自己自身を否定します。というのも神は運命に屈服させられるからです。全能の精神は最早全く精神のものではありません。そこから人間は世界で最も弱い主人に、万人を必要として、交換においても何も与えない主人に奉仕するに至ります。鞭で打たれた神、三度否認される神、一人ひとりの裡の精神の僅かな光又はこの神話には意味がありません。

それ故に私は、未だ指揮する杖には花が咲いていなかったが、私たちのクリストフォロスを信用します。少なくとも最も強い者を認めるのに注意深い思想は、あらゆる警視總監の属性でもある忠実と不忠実の双方を十分に説明しているものです。この種の間人は、弱い者しか裏切りません。そして私はここに、余りに無視されている偉大な思想を発見します。何故なら彼らの思想は、決して屈服しない何らかの秩序を元にして思考しようとするからです。この条件の下で彼らは良く思考します。良く思考すると人が言う時、一人の間人にとっては十分に言い尽くしてもいるのです。ここに、アリストテレスが配分的と呼び、力によって申し分無く、弱さによってのみ罪を犯すもう一つの正義が姿を現します。議論の余地が無い何らかの原則を適用する限りは、洞察力のある法律的な精神の中に見られるものですが、そこから外に出ると迷って流浪します。規則や前例に極めて注意深い行政的な精神の中に見られるものでも、規則や前例に注意深い限りは極めて器用です。しかしそれに反して、全てが有りの儘の公正さの前では自分自身が不安になるのです。監獄の看守は判事ではありません。判事でないことが彼の誇りです。今は服従するために考える間人の全ての規範に気付いて下さい。これはブルジョア以上の何ものかであり、ブルジョアを完全にするものです。この種の間人は所謂尊敬を勝ち取ります。そして、この言い方は最も高く、最も疑い深い精神は、そこではやはり屈しなければならないので、深い意味があります。ポンテオ・ピラト(3)の両手はきれいです。しかしながら私はここで、聞いてから未だ日が浅い自由な判事の言葉を引用しなければなりません。「戦争や野蛮な鎮圧の様に政治的秩序の大罪の共犯者になった者は、その後も余りに力を持ち過ぎる」。又銃の外では、革命の斧が光っているのを見て下さい。(完)

(1) ピンダロス(前五一八～前四三八頃)は、古代ギリシアの叙情詩人で、『競技祝勝歌』(全四巻)がほぼ完全に残っている。

(2) クリストフは、キリスト教の伝統的な伝説上の人物で、幼いキリストを肩に乗せて川を渡ったという。旅行者や車の運転手の守護神であり、先端に花を咲かせる杖を持つ。

(3) ポンテオ・ピラト(一世紀)は、ローマ総督で、ユダヤ人の抵抗運動を弾圧し、キリストの処刑を許した。

第七章 イソップ

人が言う処では誰もが皆、権力を夢見ている、最も高い権力を望んでいて、それを欲して推し進める機会しか期待していません。飽くことを知らない野心です。その点で野心には二つの段階があります。何故ならどんな人も、イソップさえも王様になることを夢見て、そこから自分を慰めることが出来ますが、彼が王様になりたがっているのを私は確かめられないからです。同様に、お金持ちになりたいという極めて一般的な欲望も、実際にはお金持ちになりたがっている訳ではありません。しかし又、欲望は想像力と現実の間に止まっていることが出来ません。それは想像力に再び降りて来ます。それが本来の動きです。「自分の運命を何も変えたがっていないで、隣人の運命を羨むこと」。この様にロマン・ロランの『リリュリ』の中で語られています。私は従って、極めて見せかけの当てにならない考えを放って置きます。所持とか所有において、その人を把握する方を好みます。各人が欲するものに走るなら、その怪物であるリバイアサンは更に恐ろしくなるに違いありません。だが、この反乱が続くことでもっと弱くなるでしょう。スピノザの精神に倣って各人は、自分が行うことだけを実際に欲すると口にする方が良いのです。吝嗇家は溜め込みますし、溜め込むことを欲します。愛する人は所有しますし、所有することを欲します。野心家は支配する人です。そして、野心は誰もが小なり大なり何らかの地方を支配することですから、万人に共通しているものです。想像上の情熱で書くことに気を付けましょう。何故なら何もならないからです。その反対に、野心の力は自分の場所では全てであり、そこでは不敗です。それ故にリバイアサンは、あの不変の形と分割できない大きさを見せています。誰もが自分の仕事とか職能に従って欲したり思考したりするので、全ての意志はお互いに答えます。誰もが支配するだけまじしく服従します。そして欠乏は何ものでもなくなるので、権力は数々の権力によって作られます。従って変化は権力の弱体化によってしか起きません。この弱さの前では、大なり小なり全ての野心は小さくなったり侮辱されているのを感じます。幾度となく書かれた社会階級という制度は、誰もが自分の経験したことのない特権よりも、今持っている特権により多く執着させられていることから説明されます。そして今日でも更に、最も野心的な農夫とは、まさに農夫の地位で足りている者であることに注意するのは当然です。そこからこの傲慢な服従は、最も高い仕事において更により明らかになり、それだけ益々特権が幾つもその中でより良く保障されます。そして、このことは何処でも本当です。教会の番人や巡警や聖歌隊員は、司教よりも威厳が少ない訳ではありません。その様にして真の権力は、牛の屠殺業者の連中がそうである様に、全ての特権を保持しながら自分自身の身を守ります。以上が配分的正義の精神です。

野心は、その様にして野心そのものの中に集中されますが、それによって決して制限されません。しかし思想のしるしの下に、別次元に従って広がります。この休止期や潜伏期においては、常にその秩序に従い、そしてその秩序に応じて至る所で勢力が大きくなり、そして自らに充足します。誰も自分のことしか考えません。子供は大人になりたいと思いますが、他人になることはありません。皇太子は王になりたいと思いますが、皇太子付きの貴族は侍従になりたいと思

、見習いコックは料理人になりたいと思います。羨望のうちにあるのは、良く見てみれば自分の身分を抜け出ている人々に対しての非難が大きな部分になっています。上手に管理されている一家においては、不平等は少しも感じられず、一家に特有の次元でどんな権威でも限りなく発展して行きます。シャンホール(1)が語るに、或る男が新作のオペラの入口にいて、声が良く聞こえないと言っていました、良く見ると馬車を呼び寄せていた男だったのです。

この様にして勢力が思考の対象になると、全ての思想があらゆる水準で、仕事の技術よりももっと遙かに窮屈な一種の勢力の技術に限られることになります。それは秩序が決して人に調べられたくないからです。それ故に精神が絶対的に保守的であるのを望む社会は、歴史にあって幾らも見付かります。そのことが説明しているのは、それが可能な限りは真に底知れぬ軽信ですが、何ら深さのないものでもあります。確かに、取分け対象や状況の外にあっての物語の力による想像力の遊戯は、最も不条理な信仰や狂った行いを説明しています。しかし、もしも大小様々な権力の利害関係が、何らかの変化に反対するのを目的と見做す一風変わった批判と考察が、不十分な一種の理性の方へ常に判断を向けなかったなら、想像力はその固有の不安定さによってもそれらの信仰心や行いを変えることでしょう。そして精神はその時、緻密さが無い訳ではなく、常に疑わしい新しい奇跡を縮小したり、謂わば消化することに献身します。そして、この種の精妙さは司祭の裡にも認められ、超自然的なあらゆる種類のものに対して大変見事に武装しています。その理性は従って緻密なまでに発達していますが、常に下級的な状態にあり、奴隷的であるとさえ言えるでしょう。占星術、夢占い、神託、結局のところ全ての魔術は、至る所で厳しい法則に支配され、それは国家の法律でしかありませんでした。人間の法律が諸現象にまで広がるのは、如何なる自然の経路によるのか、そして如何にして統治の技術がそれらの思想だけで規制するのかが把握されます。更に今、大小を問わずどんな権力も、大小を問わずどんな特権も、一つの意見が本物であるか偽物であるかを自問するよりも遙か前に危険であるかどうかを素早く見分けます。それ故に、高い地位にある人間の思想はその待遇にある、というプルードン(2)のあの有名な格言は影響力を持っています。それでいながら権力が権力である限り、如何なる反対意見も認めますが、その意見は新しいものの範囲内でしかないと言わなければなりません。権力は、それらとは別の理由によって慣らされているとするなら、ご存知の様に権力を支える人々でさえも恐れるものです。これらの考察によれば歩みを予見することは極めて容易ですけれども、常に極僅かな歩みによって驚かされるあれらの支配している思想の何らかの観念を恐らく手に入れるのでしょう。権力は精神で満足すると全てはつきりと言いましょ。ここでは誰もが取引で少しは儲けることを望むのですから、そのことを頑なに言いましょ。でも、空しい希望です。私たちの知識の世界には、お金がかからない権力の欠片もありません。盲目的な技術がそのことを最初に分からせてくれます。そして又、その観念が少しも苦過ぎることがなかったならば、有名人たちの間違いはそのことを確信させることでしょう。単に少しばかりの理性を見せるために、少しの権力を握る夢も見なかったのは誰でしょうか。これの始めは美しいです。しかし、ネロは始めの後の終わりを見せます。どんな王もネロではなく、どんな副官でもありません。しかし私は万

人の裡に、何時も大変に良く尽くそうと待ち切れずにいる動きも認めます。全てが成功しない時は、いずれにせよ対象が権力の衝撃により絶えず変わるのは本当です。ティベリウス(3)は、天体が彼に反対していたことに我慢なりませんでした。ティベリウスの視線は占星術を変えました。如何なる権力も最早遠くを見ません。それ故に権力は、混乱して読めない自然を通して素早く飛びかかります。そこから、ジュピターは権力者たちを盲目にする、という諺が引き出されます。あれ程にも非難されている愛は、愛が与える権力によってのみ恐らく人を盲目にしているのです。しかし、それは愛がその時に野心に変わります。愛が主張しないで目隠ししているのを、誰も一度も見ませんでした。バルザックの小説『骨董室』の崇高なシェネルは奴隷になりました。それ故に彼は戦いに勝ちます。自分のためではないのです。空間は文字通り、熟考する人の前にしか穿たれません。従って命令することは眺望を閉じ込めることであり、奉仕することとはこれらを開くことです。奴隷が主人以上に偽ることは別にしても、同様に情熱を乗り越える時に相手の情熱を発見するのです。それ故に自然と人間は、権力の前では双方とも不透明になり、その反対に奴隷の偽りの視線の前では双方とも開かれています。注意のしるしは常に深く知られていませんし、何時までも知られないでしょう。精神のうちにも権力を見たがるのは主人の誤りです。

常に素早く思想というこの間接的な視線から、ついに何ものかを理解するためには恐らくこの長い回り道をしなければなりませんでした。その最初の思想が目覚めると直ぐ様、常に自他を避けながら、万人や思想そのものを拒むのは、まるで人が小さな星々を横目でちらっと良く見るが如くです。それは単に、思想が謎であるとする弱者たちの術策によるものではありません。謎、譬え話、寓話は姉妹であり、三つとも奴隷の様に折りたたまれています。委ねることと同様に、守ることも運命づけられています。権力を拒みますし、通行することさえも拒みます。待つことです。私たちの隠喩の中にはこの遊戯が残されています。そして私たちには、これらの寓話の中では遊戯でしかない様に見えます。でも、遊戯でしかないのは確かではありません。ロバだけが次の様に言うことが未だ許されているのです。

我々の敵とは主人である

はつきり言うなら私はそう言う(4)

如何なる腹も無い素朴で赤裸々な精神しか恐らく無いのですが、その精神は良く理解することも出来るのです。(完)

(1) シャンホール(一七四〇～九四)は、作家・モラリストであり『格言集』を書いたが、恐怖政治下において投獄され自殺した。

(2) プルードン(一八〇九～六五)は、社会主義者でアナーキズムの創始者。

(3) ティベリウス(前四二頃～後三七)は、第二代ローマ皇帝(在位一四～三七)で、治世後半に恐怖政治を行った。

(4) ラ・フォンテーヌの寓話「老人とロバ」から。



パリのペール・ラシェーズ墓地にあるアランの墓（訳者撮影）

第一章 祭

多くの人々が垣間見たのは、祭や儀式やその他この種のものが私たちの大部分の観念、いや多分それらの観念の全てを齎したことです。隠喩である、身につけた全ての祭の衣服を、もしも昔からの観念が私たちに齎すと気付いたならば、そのことはより一層良く確信されることでしょう。私は、デカルトが巡礼や戴冠式に求めたものを理解します。それに、これを言ったのは彼自身のものである思想の大胆な飛躍によるものです。魂と肉体の結合は、社会の動きの中と同様に、何処にも現れないとデカルトははっきりと言いました。あらゆる処にある沢山の道は、極めて長い間秘められていたこの力強い観念を見える様に導いてくれます。しるしから観念への関連を十分に理解したであろう者は、共通の観念とか単なる観念が、しるしの交換と確認を抜きには生まれ得ないと自然に考えるまでになります。何故なら、これらの観念は全く同一であるからです。ところが、祭や儀式においてはどんなものでも、私はしるししか見ませんし、それらのしるしを喜ぶ群衆しか見ません。しかし、この巨大な主題を如何に区分して構成するのでしょうか。しるしが単に反射される、つまり模倣される、如何なる熟考も無い直接的な儀式から出発しなければなりません。舞踊は直接的な儀式です。本来の意味で儀式は見物人を生みますが、舞踊には対立するように思えます。結局のところ祭は、言葉としての普通の意味に理解すると、熟考の一瞬を表している様に思えますが、別々の二つのものを解消する如くそれらを乗り越えながら或る意味で保存することになりません。それは諸概念がその様に整理されると、具合の良いしるしになります。

舞踊は社会です。踊る女性の前で、その踊りを思考することを望むのは重大な勘違いです。遠く隔てて眺望の如く見ると、舞踊は舞踊そのものとは別の何らかの振舞いになります。舞踊は別種のものに色褪せます。舞踊を社会と見ても、決して眺望ではありません。踊り手の真剣さは、踊るのを見る者にとっては謎を生みます。独りの舞踊に関しては無一物の様なもので、決して自足していません。その舞踊は外的な規則を何か探しますが、大して見付かりません。この眺望には何か欠けていて、その時は抽象的に見えるのです。それとは反対に、昔からの規範に従う何らかの農民の舞踊を観察した者は、舞踊と同時にそして舞踊の内部に規則を認めます。何故なら独りの踊り手は、全員と共に、全員に従って踊り、そして独りに従って全員が踊り、中心が何処にも無いのは明らかであるからです。規制された集団は一人ひとりの動きを制限します。そして、ここでは模倣そのもの、つまり各人が行う動きと、自分の付近と周りで認識する人々の動きとの間で、探求され把握され維持された一致以外の規則を探してはなりません。何故なら踊っているのは私の同類であり、私も彼と同じ様に踊るのが可能であるからです。それ故に、私が彼と同じ様に踊り、彼も私と同じ様に踊る限り、彼が私の同類であることを私は感じます。そして舞踊の経験は、私が彼を模倣するのと同じ様に、彼が私を模倣することを絶えず認識するので、彼も

そのことを同様に感じていると私は感じます。母と子の対話は、この社会的な交換の最初の観念を与えていますが、それは子供が母の言葉の屈曲を出来る限り模倣する間に、母も同時に子供の叫び声や言葉遣いを模倣するからです。

けれども生物学的なこの社会は、まさしく社会ではありません。平等がここには無いのです。同類は、ここにあると言うよりも寧ろ探し求められるものです。言葉において母親は手本です。子供は決して手本になりません。規則はこの様にして子供の外にあります。舞踊も又一つの言葉ですが、それ自体にまさしく規則を持っています。ここでのしるしは全くのしるしであり、決して他のもののしるしではありません。身のこなしには他に規則は無く、動作に一致します。以上のことからどんな舞踊の規則も、決して強制が行使されることは無く、双方共に行使されず、動作の連続が自然であること、つまり全てが共通している身体の構造や位置に基づいていることを要求しています。私が思うに、ここには音楽の精神もあります。足音にも既に音楽そのものがあります。連続した単純な音によって前もって予告されていて、抑制された情熱に席を譲ります。しかし、物音と動作のこの一致は、人間の肉体が自らに適している期待と満足と補償を見出す他の一致を表現しているだけで、それは絶対に過たない治療法に従っています。ここには決して人を驚かさないうことから成っている本質的な礼儀がありますが、その利点は決して不意に襲われて驚かされないことです。戦闘とは不意に襲うことから、全くその反対のものです。一人ひとりの裡には戦闘がありますが、万人の間にある平和が一人ひとりの裡の平和になります。事實は、しるしによるこの同意は決して飽きさせません。そして、それは必ず見物人を驚かします。何故なら見物人は人間の肉体そのものに適している一連の動きが他から如何なる闖入者も無く、大きな情熱も小さな情熱も同時に如何にして鎮めるのかを踊り手が知っている様に、経験からは十分に知らないからです。デカルトは、不決断が悪の中でも最悪のものであると言った時に、予めしっかりと見抜いていました。そうです、退屈という身体構造の中まで見抜いていました。舞踊は生きることの幸福を再発見させてくれます。それ故に和声が単に耳にだけ感じるものであることを意味したならば、大きな間違いを犯すことになるでしょう。

全然見物人のいない舞踊とは反対に、単に見物人のいる儀式は、万人の儀式です。万人のための儀式であるのが直ぐに分かります。舞踊には中心が無く、あるいは至る所に中心があります。儀式には一つの中心があり、どんな場所も万人に適している訳ではありません。その代わりに舞踊の法則は、全ての人が結局はどんな所でも通ることにあります。儀式の喜びは、各人が自分の場所に姿を現し、他人の場所に他人を見るというこの点にあります。普通の言葉において距離とは尊敬です。そして儀式のしるしは全てが距離に関係しているのは本当の様です。例えば、人が近くにいるなら視線を止めないためには頭を下げます。その上、それらの距離が高さによって複雑になるのは容易に理解されますが、それは視界が広がって、距離がより一層良く見分けられるためです。それ故に、空間についての最も古い考察は、儀式によって齎されていると言っても決して間違っていない。そうして生まれた言葉には、美しい二重の意味があるのです(1)。これらの素朴な形の中にある空間に関係した本来の意味は、各人が適切に一定の場所を占めていると

ということになるのでしょうか。もっと適切に言うと、首領と彼に従わなければならない人々の間の様に、もしも人が最も単純な儀式を観察したなら、自然に円が形づくられるのがお分かりになるでしょう。尊敬の等しさが恐らくコンパス以前に円を描いたのです。これに反して、舞踊では全員が次から次にあらゆる場所を占めて、決して止まらないという法則によって、いずれにしても時間との関係が現れます。

音楽が舞踊を規定し、足音とやがて手拍子が最も古い音楽を生んでいるのは明らかです。それ程明らかではありませんが、彫刻も舞踊を固定しますし、又或る意味では建築も同じです。けれども、建築が儀式に関係しているのは明白です。しかし儀式を固定するのは、本来は絵画です。そして恐らく、絵画における構図と様式は完全に儀式から取られています。肖像画における衣裳と姿勢も、そのことを十分に見せてくれています。そして様式の本質は不動の見物人のために光景を作ることではないでしょうか。それ故に、そこには絵画的な外観の諸法則が謂わば閉じ込められています。尊厳が自然と絵画になります。舞踊と彫刻との間のもう一つの血縁の方は、もう少し分かり辛く隠されています。何か農民の舞踊の動く絵様帯が、一緒に動いたり止まったりするのが見えるまで長く熟視しなければならないでしょうし、踊り手たち全員の姿勢が同じ動きを与えているのです。そこから出て来るのは、全員の姿勢のうちの一人ではなく、全員の休止と平衡によって動きを表す一つの術です。従って彫刻の様式は古い舞踊に着想を得ていると思いついて言えるかも知れません。しかし、私たちは第三の言葉へ行かなければなりません。

祭は舞踊ではなく、儀式でもありません。祭は両者を含みますが、両者を遙かに越えていて、喜びの約束と選択への誘いでしかないしるしの交換によって寧ろ砕いています。祭は、舞踊の様に平等のものです。祭は、儀式の様に万人のための万人の光景です。しかし祭は解放されています。誰もが自分が気に入っているものへ行き、かくしてそれが祭であることを意味していることを告げています。従って祭の効果はまさしく舞踊と儀式を速やかに砕き、それらはかくして祭のしるしの水準に下げられます。その代わりにそれら自体のしるしになりたいのですが、そうは行きません。結局のところ祭には無秩序があります。祭によるものは万人にとっての一つの規則ではなく、謝肉祭が誇張させた特色を表している様に、最早誰にも規則が無いという共通した感情です。これは陰鬱な情念や心配事が消えないと行くことが出来ません。又、低次のものへの一種の支配もなければ行くことも出来ませんし、その饗宴は余りに明瞭なしるしです。その様な人も自分が儀式に参加しないでも、社会秩序の機会を育むことが出来ると私は決して思いません。さもなければ観念は抽象的で弱いものになるでしょう。何故なら人間の身体は決して観念に従って規定されないからです。それに反して反対の観念、つまり一人ひとりの裡の自由な観念が、祭以外の処で実際に思考され得たとも思えません。更に、思想家を天職とか本職にする人々の裡での孤独な思考は、社会と詩人や、あらゆる種類の作家たちの証言が無ければ、遠くへ前進して行くことはありません。私たちはしるし以外のことについては自然に熟考しません。それらの考察によれば、共通の秩序という力強い言葉を尊重しなければなりません。反対に光景の中で与えられる無秩序の言葉は、それが無いと私たちが否定する能力を認識することは多分決してないでし

よう。最も広義の意味での信仰は、それらのしるしを固定したこの力強い術以外の何ものでもなく、そこから私たちの最初の観念に形を与えましたし、恐らく全てを支えているのです。信仰と文化という言葉には、それらに様々な意味があります。もしも私が、思っている様に理解することとは一つの言葉のあらゆる意味を一つに纏めることであるとすると、容易には理解されません。

しかし、この最初の素描を完成させるためには、祭に適していて、秩序と真剣さのこの共通した光輝く否定を表す術が、如何なるものか探求しなければなりません。滑稽さは確かにそれと関係しています。しかし滑稽さは多分、外の如何なる方法よりも多くの規則を持っています。それは適用と反省を必要とします。その場所は私たちの原初的な観念の図表には未だ示されていません。私は、祭の動きを表して鳴り渡る鐘しか見ません。そして、鐘の音が古代社会には知られていなかったことは、祭の精神がそこでは完全に解放されていなかったことを証明しています。鐘の音と、最初の目覚めと考えられる現代精神の間には、驚くべき関係があります。如何なる思想も一人ひとりの人間の裡に眠っていて目覚めるのであり、そしてその目覚め以外には万人の思想を決して形づくらない、と少なくとも繰り返し言わなければなりません。従って良い知らせは鐘が一斉に鳴り渡ります。何故なら鐘は恰も、表されたざわめきを作るが如くであるからです。鐘の材料は溶かされたのであり、彫られたのではないことに注意しなければなりません。この方法はそれ故に先ず物理的で化学的な力に作用させながら、それらの元素に戻るのです。鐘においてはその材料が、鐘の本体と舌による自分自身との戦いの中にあることにも又、注意しなければなりません。同様に、人間が鐘を鳴らす衝撃もそれを維持することが出来ることでしかなく、重力の法則はその二重の活動を支配しています。その上、既に鑄造の偶然によって、耳は無秩序と鐘のみの音のうちに群衆のざわめきの様な音に気付きます。更にもっと正確に言うと、何らかの法則も決して見出せない音と衝撃の交錯の中には、低次の力による御し難さを強烈に現します。ここではリズムは否定され、和声も否定されます。同様に時宜を得ること激しく、人は鐘によって休戦をお祝いすることもあるでしょう。この驚くべき音、重力の法則によって絶えず消えて行くこの音楽は、秩序が砕かれて消されていたことを告げていました。和声を否定するこの調和そのものは、音楽家が鳴らす鐘の使用や、或る合唱曲の楽譜の中にも又再発見されます。それは声が、幾らかの瞬間に鐘が鳴り響く様になる「第九交響曲」の中で聴けるが如くです。(完)

(1) 儀式 (cérémonie) には「礼儀正しい」という意味もある。

第二章 記念

恐らく最も古い墓で、最も簡単なものは石を積み上げたものです。そして、これに一つの石を加えることは敬虔な心です。火葬台は、惨めなイメージを更に一層良く消します。いずれにしても死者たちへの信仰は忘却が要求されますが、先ずは病人や弱者や高齢者であったことを思い出させる全てのものを消すことが要求されます。しかし彼らが殆ど見分けがつかない位に極めて高齢になる前に、彼ら自身を引き受けるのはその様に私たちが彼らを愛していることを示さないことです。実際に私たちが愛する者たちは、殆ど自分の姿を見せませんし、寧ろまさに自らの身を隠します。それは単に気分の外面からではなく、恐るべき一種の遊戯からも身を隠します。取分け子供たちへの両親の関係においては、この種の逆になった欺瞞は屢々、一方では一種の暴君にまで行きますし、他方では一種の反逆者にまで行きます。愛は何処でも同じで、何時も逆上して無謀な経験を導きます。自分自身にとっての、愛されるための野心は自然に美德を決して長所と思わない様に導きますし、どんな種類の長所とも思わないのです。高慢は、貢献するのを恥じますし、許し (pardon) というこの美しい言葉が持つ完全な意味において許しを請います。そして、愛の劇は殆ど全てがこのことで説明されます。この外に歳月は無意識な減退によって、気に入られようとする野心にも又苛立たせます。従って愛は人の気に入られようとするを最初に不名誉と評価しますが、結局のところこれを困難以上のものであると感じます。気分がその様に気分そのものと格闘している間に、病と年齢の双方によって愛されている人が不格好な姿になって、恐れ以上の衰弱が何時もやって来ます。そして死において、あらゆる限度を超えることになります。それ故に文字通りに埋葬して清めなければなりません。そこから、あの様な石を積み上げたものになるのです。

思い出が残ります。先ずは嫌な思い出、そして意欲を殺ぐ不当な思い出です。そこから死者たちが蘇り、それらの姿が恐怖させる、普遍的でしかも最初は不快感を与える観念が生まれます。確かに慰められて懐かしく、そして最も美しく彩られた思い出は決して幽霊と見做されません。何故なら、これを人は拒絶しないからです。しかし想像力がそれでも石を墓に加えたがることを、人は恐ろしい死者たちの霊を思い起こすと理解するのです。完全な聖墓への知覚、儀式の整理された思い出、最後には事物と人間の一致した証言は、ここで想像力の責苦を加えに戻って来る古い伝承を人は理解するに至ります。そこには真実の神話の注目すべき事例がありますが、それは恐らく最も驚くべき人間的な事実です。何故なら、それは死者たちが最後に残す醜い姿であり、しかも醜い以上に悪い姿を露わに晒して置くことは死者たちへの侮辱であるからです。それは最悪に彼らのことを思考する機会を手に入れることであり、まるでその様に考えたとしか望んでいないかの如くです。その様にして神聖な埋葬への心配りは信仰により開始します。というのもそれは、可能な限り一種の嫌悪された瞑想を閉じ込めて終わりにするからです。しかし又、それはより一層信仰心に合致した瞑想への道も開いているからです。ここに愛が行うもう一つの埋葬が開始します。

もしも嫌な知覚をとことん流さないならば、想像力の遊戯は明らかに不敬虔です。もしも内的な信仰や思想のみによって、愛が死者たちの浄化を行わなかったなら、自分自身に背いていることを十分に感じます。それは、先ず死者たちに不利な外的な原因を歪めて、結局は破壊して仕舞うれらの原因から常に遠く離れながら、彼らの存在の裡に彼らを探すことに戻ります。愛が探して最後には見出す伝記は、少しも死の物語ではなく、それとは反対に生の物語です。そしてそこから正確に話すと、愛が呼び起こす存在は断じて死ぬことが出来ません。誰も自己の本質による帰結から死ぬのではなく、一存在が自分自身を自滅させている様に見える時でさえも、その存在から追い立てるのは常に外的な原因である、と彼は言います。自分の短刀が自分自身の胸を攻撃するのが、力尽くで我が身に向けられるにしろ、暴君の命令で突かれるにしろ、あるいは結局のところ一種の精神錯乱から自滅してその原因が理解されないにしろ、彼の裡に這入り込み、自分自身の法則に深刻な動揺を与えて最後には彼を殺して仕舞うのは、常に敵対する何らかの出来事なのです。この観念は直接に明白ではありません。その反対に、それは情熱に駆られた人々や病人たちによって自然が拒絶されます。何故なら彼らはまさに自分自身の裡に異物の侵入を感じているからです。ところが、もしも自分が病気でないことを知ったなら、既に少しは癒えることでしょう。スピノザにおいてそれは自分自身の裡に完璧な健康と、限り無く持続させる力を認めることに導く、教義上の準備を続ける知恵のための一つの方策です。それは出来事だけが動揺を与えることが出来て、結局のところ私たちは戦士の様に、或る意味で生きながら死ぬのでしょうか。しかし、愛はこの観念に直進します。死んだ者を思考の中で更に何度も殺すことを承知する人は誰もおりません。しかしその反対に愛は、運命の不当な打撃をその存在から異邦人の如く引き離し、その様にして自分の生の中で死者を賞賛するのです。自分の死の中にはないのです。有名な死者たちの物語において常に尊敬すべきは、力強い人生であることを知って下さい。外部の力がその存在から本質を追い立てることが上手く出来ても、決して歪めることがないという点にまで明らかになるのが本質なのです。それが「立って死のう」という皇帝然としたこの言葉の意味なのです。誰もがそれらの高貴な人生の中で、その様な力のしるしを探求します。それはもっと適切に言うなら、傷口を洗ってきれいにする事です。

しかし折檻用の革帯を受けて傷痕を残しているのは身体であるので、真の信仰心と魂の埋葬は何時も精神を身体から分離させることであり、公共の信仰と集会との助けによって完全にそこに達することであると理解されています。ヘラクレスやイエスや英雄たちは、やがて栄光の肉体しか最早持たなくなります。その表現には、魂が分離されていても如何にしてその姿を保存しているのか、その姿が行動し、愛し、思考し、望むための力を表している限り、見分けられることでしょう。矢は少なくとも肉体から引き抜かれますが、その矢は彼のものではなかったのです。

情熱も又、彼のものではありませんでした。そして、そのことを表現しているものは、ヘラクレスの死におけるディアネイラの下着(1)です。これらの有名な死者たちからもっと親しみのある事例に戻るなら、輝かしいイマージュには決して偽りが無いことを私たちは理解しなければなりません。もしも理解出来ないとするなら、私たちは意地悪とか不正とか弱いとかいうものを良

く知らないのです。又もスピノザは言っていますが、確かに一人の人間が存在するのは、彼に欠けているものがあることによってではありません。従って彼に欠点があることは、どんなことでも周囲の事物の傷跡の様なものであったと言いましょ。それ故に思考することが死にそうであったり、無知であったり、苛立っていたり、狂暴であったりすることは、彼をもう一度殺すことなのです。死者たちを弱めて最後には破壊したことを思考するのは、決して死んだ者たちのことを思考することではありません。もしもそこに死者たちの存在があったなら、彼らは生まれる前から死んでいたことになるでしょう。要するに欠乏は何ものでもありません。従って死を許すことを知らないあなた方は、次の崇高な観念を生んで下さい。良く理解して下さい。生者たちを最早許さなければならなかったのです。思想が犯した悪を償うことが出来るのは、思想以外にないのです。どんな人も死後の栄光を望んでいますが、そうして当然のことしか求めません。

一般に愛はどんな神話も真実とする、形而上学無しで済ませます。しかし、只管勇敢にも自らを慰めるために進みながら死者たちを敬うことは、死者たちのうちで死すべきであった者を埋葬することですが、それは死者たちでなく、その反対に美点や格言、そして結局のところ画家の才能が時として生者そのものの中に発見するあの顔付の深みを集めて構成するものなのです。それ故に愛は絶えず歴史を殺し、伝説を育みます。そしてこの伝説という言葉は、美しく充実している様なものとして気付いて下さい。伝説とは、言うべきことであり、又言われるに値することです。愛するものを構成し、発見し、保存することへの適用は、あらゆる愛に認められます。自分の友人の肖像を美しく描かない小学生はおりません。司令官の姿を美化しない兵士もおりません。自分自身の思い出に背いても屢々美化します。というのも憎悪が愛されないことも又、思い起こさねばならないからです。人間の美しい側面である、人間を飾り立てるこの仕事は、奇跡を語るその人間が知られていなければいけない程、容易です。これらの物語は直ぐに信頼を見出します。信頼 (créance) という言葉は信用 (crédit) という言葉と同様に大変に豊かな意味も又持っています。人間は誰もが良く知り合いになる前は、自然と大きな信用を得ていますが、殆ど何時も大急ぎで狂った様に散らして仕舞う、と老人ペコーに言わせました。この面白い観念に従えば、伝説と逆に機能するのは英雄自身しかいない、と私は言いたいのです。そして恐らく一人ひとりの裡で最も苦い感情は、彼らが信じる処では自分自身で理解している良く思う気持ちを、身につけることが出来ないことから来ています。そして同様に、他の人々も殆ど感嘆に応じてくれないのは本当です。それは子供たちの裡で拡大して見られます。子供たちが周りの仲間から注意で見られると、直ぐに思いつきの外観を開始します。この指摘は恐らく儀式の価値と、人間を現れさせる困難をもっと良く理解させてくれます。人間嫌いの激昂においては人々が悪戯っぽくその人間を隠してしまうというこの観念に、私は何時も気付きます。死者たちを中傷するのは自然ではなく、一般的な道徳は直ぐに彼らに対して平和と許しを要求していることに戻りましょ。そして、その理由は死者たちが彼ら自身に不利な証言を止めたことです。事實は、死者たちに抱く愛に品位を決して思わないことが生者たちの感嘆すべき自負なのです。その上、既に言われたことであっても、悪徳の中には多くの自負があり、司祭が言う様に地獄に落ちた人

々にも多くの自尊心があると繰り返し言わなければなりません。この後で死者たちのために祈ることは何であるかが恐らく理解されることでしょう。

記念に関しては、まだこれから集団が些細なことに通じなければ、それだけ良く記念が埋葬し清めなければなりません。更に感嘆の幸福は、しるしの合致によって強められる様になります。ここで私たちは謂わば共通観念を生むのを見ますが、それは共通であるが故に、それと同時に対象が現存しないが故に、観念なのであり、そして直ぐに典型となり規範になるのです。英雄の観念とはそれ故に最初の観念であり、又全ての観念の規範に違いありません。幾何学が決して長さを測る仕事から生まれたのではないことを私たちは良く知っています。そして、もしも私たちの最も古い思想や最も親しみのある瞑想に痕跡を留めている、浄化や崇拜の働きに注意を払わなかったなら、それは驚きでしかなく不可解でしかないでしょう。これはコントが、私たちの概念の最初の状態は如何なるものであっても神学的である、と言ったことと別のことを言っているのではありません。勿論、別な風に言うこともあります。私たちの実際の幼年時代に可能な限り近くもあり、孝心の動きに何時も認められることです。そこに困難はありません。寧ろ、物語や寓話や神話のヴェールに、この自然な抽象が如何にして常に包まれているのかを理解しようと試みなくてはならず、それは想像力と言葉の双方を根元まで発見することです。ここに、より一層高い困難が私たちを持っているのです。（完）

（1）ディアネイラは、ギリシア神話でヘラクレスの第二の妻。夫の愛を取り戻そうと、媚薬といわれるネッソスの血が染み込んだ下着を着せるが、その毒のためにヘラクレスを死に追い込む。

第三章 しるし

しるしとは、人間の行動です。そして理解するとは、先ず第一に模倣することです。一人の者が逃げるとその後が続いて皆が逃げます。兵士は戦友の動きに従って地に伏せます。夜のしるしである声は、全てのしるしの中で最も曖昧ですけれども、自然と最も力強く最も感動的です。そこから出発して人間の言葉の歴史を書くことが出来ますが、欠けているのは思想だけです。模倣することは行動することであり、思考することではありません。その意味で理解するとは、思考することではありません。その時、人間の言葉は動物の言葉と区別されません。そこを歩いて行けば、私たちは動物が思考しないことを十分に理解しますが、人間が思考することは理解されません。コントによって詳しく述べられた社会学的な偉大な観念をしっかりと保持しなければなりません。つまり第一には人間にしか社会はありません。第二には社会の中にしか思想はないということです。その観念は、それを試みる以外に証明することが出来ませんし、如何なる観念も証明することが出来ません。

記念による共通の思想は典型であり、規範である共通の対象を持ちます。舞踊と儀式による共通の思想は、構成された態度やリズムのある動きの中に人間の肉体そのものがある共通の対象を持ちます。それ故に肉体がなければ観念もありません。観念は、この秩序と、この秩序立てられた動きによる知覚そのものの裡にあり、この動きはそれ故に観念を示して表現します。しかし模倣する舞踊、雄弁な行列、衣裳、装飾、象徴の如くこれらの不変のしるしがまさしく人間の言葉で最も古い要素であることを見せる前に、注意しなければならないのは、祝賀である祭によって私たちの思想の中で最も堅固に維持され、これからも維持されるであろうもう一つの共通した対象が、しるしにかこつけて荘厳に登場することです。その対象とは世界です。同様に記念も又、月や季節の様にそれらの自然の回帰と分離させることが出来ず、それらはあらゆる記念の支えです。しかしそれ以上にそれらの回帰は、それに応える生物学的変化によって祭を課しております。又、文字通りに祭を生んでいます。月が夜を照らしに戻って来ると、再び希望が生まれます。このしるしは大変力強く、取分け澄んだ空の下ではそうです。しかし、それは孤立しています。夜の間方向を知り、そして身を守る必要に応じるだけです。春の回帰は大地と空の全てのしるしが一緒になって行動します。星々、植物、動物、急流、泉の全てが同時に目覚めて活気づきます。月の祭は暖かい地方だけのものです。その反対に春の奇跡は冬が長くて厳しい程に、益々素晴らしいものです。そこから二種の宗教が述べられることになるに違いないでしょう。しかし、気候の変化による恐らくもっと長い期間に結び付いている移住が、全てのしるしを曇らせたことを忘れてはなりません。それは実際の信仰の歴史が殆ど不可解なものになります。

同様に月が病の時には恐怖や嘆きや断食を含む月の祭しかありません。同様に、恐らく季節の祭しかありませんが、それは春の祭です。何故なら一方において冬のしるしは殆ど絶えず姿を現し、酷暑の時に枯れた草にも既に現れるからです。それに反して春のしるしは、取分け温暖な地方においては数々の秋の名残そのもの下や、大地が再び柔らかくなる穏やかな日々によって

冬の期間中でも現れることがあります。それで太陽の出没に従う限り、人は労働と企てによって常に一つの春をもう一つの春につけ加えるのみならず、絶えず恐れたり期待したりします。従って舞踊と儀式は、記念と同時に祝賀のものでもあり得るのです。これによってあらゆる地方の神話が示している様に、英雄とか神の死と再生は、春の回帰と結び付いています。その様にして一方で、自然の大きな変化は人体の活動によって表現されます。従って神話は想像的である前に、現実的となって知覚されます。しかし他方で、逆の隠喩により、情動と情熱は自然の光景に結び付いていて、既に外部の秩序に規定されているのが分かります。舞踊の表情や動く絵画によって、これらの全てが一緒になります。その様なものが多分最も古い言葉なのです。そして、もしも集団の表現が、どうして最初は知覚と同時にあったのかを理解したいと思うなら、その点については注意しなければなりません。言葉の条件は、理解する者も表現する者と同様に想像することにあるのです。ところで、私が全く生物学的と理解している自然な言葉は行動の中で滅びますが、それは最初に各人の状況と構造に従って情動が痙攣的に生まれるのであり、決してしるしによる同一の結果に戻りません。次に各人が出来ることを行い、そして行っている最中であることは行動が身振りを隠し、直ぐに事物の間を散って行きます。その様にして一羽の渡り鳥が飛び立つと、全ての渡り鳥も飛び立つのが分かります。全く生物学的なこの言葉は全然言葉になりません。結局のところ、そこには何か想像的なものを存在させる対象が常に欠けているでしょう。取分け良く見なければならぬのはここです。

想像力による逆説は、想像的なものは何も無く、決して現れない次の点にあります。直視は全ての神々を死滅させました。想像的なものは、人がそこを見詰めるや否や、二つの要素に帰着します。一つは世界であり、それはあるが儘で忠実で純粋なものであり、葉や雲や風の音です。もう一つは単に、震え、揺れ、急ぎ、引き止められる人体のものです。これは情動の嵐であり、単なる事物に悲劇的な顔付を与え、人が知覚した事物に見ているものと別のものを見ていると思わせるものです。ここでは懷疑、熟考、調査、一言で言えば意識や思想を説明することが重要ではありません。いずれにせよ熟考が何らかの事物にすぎりつくためには、単に生物学的な言葉の効果においてどんな条件が欠けているのかを良く見ることです。表現されるものは予想であり、これは精神の前では何ものでもありません。かくして身をかがめた人間の前での深淵の深さは、把握出来るものではないのです。この大きな空間は可能なものでしかなく、一方では常に正確で脅すことのない外観や色彩や眺望に帰着します。他方では身体の状態や動き、準備、用心、ついには情動でしかない抑制された恐怖に帰着します。しるしによって告げられたライオンの期待も同じものです。何故なら草や葉は、単に草や葉に過ぎないからです。そして恐怖も又、恐怖でしかないからです。更に、人が何かを言いたいと思っても、何かを好んで言っても、恐怖は外観を変えたりしないからです。世界は私たちに騙しません。世界は現れる儘のものであります。立方体の外観は決して立方体ではなく、反対に等しくない表面が幾つか見えますし、異なった形をしていて、全ての表面は同じではありませんが、立方体と人体の両方によって真実であり、絶対に過たない行動の規則を私たちに与えます。というのもその外観は、あるが儘の立方体と、それとの関係に

よる私たちの身体の位置を同時に表しているからです。満ちたり欠けたりする月も又、私たちを騙しません。というのもそれは影になっている天体と、明るく照らす太陽と、地球の観察者とのあらゆる位相での正しい位置を知らせているからです。そして大変に長く知らなかった光の働きにおける本来の活動を、ついに知覚するからです。人が事物に尋ねれば、事物は直ぐに答えます。そして、私たちが間違えるのは外観を何時も余りに早く軽視するからです。どんな平静さも、どんな安心も、どんな計画も、どんな事業も、事物への正しい視線に従っています。それは私たち次第であり、私たちが常に待っているこの光景次第であるのです。要するに幽霊は決して出て来ません。しかし、以上のことに従って私たちが本題に戻るなら、しるしに触れた人間の想像力は、明示されている事物を決して見出さないで、単に知覚された事物を見出しているのを私たちは同様に理解します。その様にして生物学的な言葉は決して私たちに思考させませんし、渡り鳥が飛び立つ様に単に行動するだけです。

それでもそれとは反対に、舞踊においては想像力が存在を与えるもので、人体の動きでもある唯一の対象を見出しているのを理解しましょう。それは逃れたり変わり易いものでもなく、又散らばるものでもなく、その反対に纏められて規定され、形づけられて、情動を規定するものです。しかしもっと適切に言うなら、私たちの内的触覚に対して感じ易い様に眼にも描かれ、更に地上の音だけで耳に鳴り響くものでもあります。ここに想像的なものが現れます。想像的がものが対象になります。表現された事物は、同時に知覚されます。舞踊のこの鏡の中では、しるしはしるしであり、人が望む限り自分自身に似ています。又、望む限り何度でも繰り返されます。予想というこの狂女は、リズムが目を覚まさせて直ぐに満足させる期待によって躡けられて吟味されます。社会のこの幸福は決して衰えません。もしも踊り手たちを見たならば、彼らの動きが規則に従って外には何も求めないことが驚きをもって発見されます。彼らは、表現されるものと理解されるものの正確な嵌め込みによって、又失う危険を負っている一致によっても、直ぐにでもその一致を再発見する保証の中で、如何なる曖昧さも無いこの会話に十分満足します。踊る一団は、統一により、慎重さにより、真剣さにより、注意力により、人を驚かせますが、敢えて思想により驚かせるとも言えます。例外無く全ての芸術の力強さは恐らく、想像的なものに存在を与えることにあります。しかし、舞踊が諸芸術の中で最も古く、最初の言葉でもあることは本当の様です。

もしも些か苦勞して説明してきたことをこれから纏めてみるとするなら、私たちの全ての観念の最初の状態が、如何なるものであるかが概ね見抜けられます。私がしるしについて思考するや否や、これがまさしく思考することでありますが、しるしは自然に意味深い人体になります。意味されるものはそこで思考されるのであり、あるいは全く思考されません。しかし行動においての人体ではなく、舞踊とか行列とか儀式においての人体です。それは最初の言葉、最初の物語、修辞学の最初の表象である人間の絵様帯です。それ故に私たちの全ての思想は、最初は隠喩的であり、神人同形説的です。自然の結果によって単に春を思考することは、未だ思考することになりません。それは待つことであり、覚悟することであり、幸せになることです。そして思考する

ことを思考しなければ、何を感じているのかも分からないのです。しるしによって考えなければなりません。最初のしるしは規定されて規定する人間、つまり踊っている人間です。それ故に春は何時も祝福されましたし、単に確認されたものではありませんでした。舞踊により、そして舞踊に入れられた物語によって祝福されたのです。もしもここに共通の思想が生まれる処を十分に把握しなかったなら、一つの事物を他の事物で表すことで、先ずは行動による自然の法則で、決して滅びることの無い幸福を十分に理解されることは決してないでしょう。ここに神々が人間の姿になって生まれるのが見られます。しかしながら、私たちの幼年時代は魂を万物に貸すという古い仮説が、ここでは遠く追い越されています。というのも、一方で私が対象を見出すのは魂によってではなく、人体そのものの知覚によるからです。そして他方で、自己にとっての書き物や全ての象徴やしるしは、動物としての人間ではなく、厳格な社会、敏感な社会としての社会的な人間です。そしてそれが説明していることは、人間関係が自然と事物の真理としての思想となり、個人が分離されたり自意識が企てや情熱のイマージュを探すよりも遙か前に、それらの事物が類似や階級や法や権力を受け取っていることです。神人同形説は先ずは政治的なものなのです。

(完)

第四章 人間性

舞踊から全ての芸術が如何にして生まれるのかを理解することは、素晴らしいものになるでしょう。もしもその弁証法を躊躇することなく導くことが出来たなら、少なくとも概略を掴む様になるでしょう。一つの項は私たちをもう一つの項へ送り届けるでしょうが、それは単に論理的な要求からではなくて、それ以上に人間の共通した構造とどんなに小さな動きでも最も不変な条件に基づく現実的な要求と一種の補償によるものなのです。かくして舞踊は、行列が通路となって私たちを儀式に送り届けるでしょう。そして最後に祭がやって来て、両項と通路を同時に取り戻し、破壊し、保存するでしょう。しかし、これは一つの素描でしかなく、更に最も容易な一例によるものでしかありません。建築は、土地が踏み固められて広場が出来ること、舞踊と儀式の両方に依存していますが、それは象の踊りが森林の中に空地を作ったり、平らに均された場所を作るキプリングの物語でお分かりと思います。儀式は分離と観覧席を十分に説明しますが、それと同時に観衆が秩序だつて自らを静かに考えるや否や、最も自然であるのが円形です。その様にして階段が登るための道具である以前に、舞台であったことは十分にあり得ます。そして演技芸術がこの頃に見直した真実でもあります。しかしもしも建築が、儀式のお蔭で逆になったピラミッドか、あるいは殆どそれに近いものである円形劇場を得ているとするなら、それはあらゆるものの中で古くて自然なしるしとしての墓にあります。建築がピラミッドを得るのは、重力のみによって均衡を保っている大きな石の山でしかありません。塔は軍事的な技術から生まれますし、ギリシア神殿は家屋から生まれました。従ってそこには、少なくとも一つではなく三つの道があります。これらの分かれた道においては、必要性和信仰心が一緒になって常に私たちを導きはしますけれども、この論理は既に断片しか与えません。もしも今度は彫刻の方が儀式とか舞踊にもっと似ているとしても、断定は出来ません。しかし、この二つの指摘は彫刻の様式に関しての古い規則を、動きや休止であつても十分明らかにしていることを認めなくてはなりません。演劇は何の疑いもなく、始めから舞踊や儀式や建築を集合したのですが、一方ではそれらを純粹な外観の水準において制限していて、他方では大胆にも芝居と観客を分離しています。それは現代の思想史において、その外観が確かに裁かれて乗り越えられているので、取分け喜劇に表れる様に、疑いもなく反省の瞬間を示しています。大胆で解放されたこの動きによって儀式と行動の外へ逃れて、最早それらの外部のことしか考えない人間は、絵画的な構図の規則が示している様に、恐らく画家の芸術を準備したのです。しかし彩色されたデッサンは、更に別の起源を持っているのも本当の様です。これらの指摘からここでは全てが不確実であると結論を下すどころではなく、私は寧ろ言いますが、最初の検討を行うと直ぐに、閉ざされて方向づけられた体系に従って決して配置されない数多くの真理が私たちに発見されるのです。それらの断片は形をなしていないどころではないのですが、私たちは集める術を知らないのです。

いずれにせよ、墓や円形劇場や塔や寺院や彫像や絵画の大きな文字で書かれたものは、過去と現在の間のもっと力強い結び付きを作りましたし、今でも作っていますが、最後には私たちの実際

の思想の中で主要となる対象を作りました。そして今でも作っているのは明白であるのは事実です。何故なら、如何なる証拠も同じで、その様なしるしによっては誰もが経験している様に決して軽視させた儘にして置きませんし、その反対に私たちを止めさせて寧ろ信仰心に従ってまさに整えさせるからです。それは私たちがそれらのしるしを理解するのに近づきますが、それと同時に力一杯促します。これらの記念的な文字の前では、決して文旨はおりません。その代わりに、これらの力強いイメージを前にして十分な熟考がなければ、言葉の完全な意味としての学識ある人々も決しておりません。その上、それらの結果によって少なくとも、人間の思想で最新の状況しか知らない者は、自分自身を前にして、私は自然を前にしても言うでしょうが、絶対に過たない動物と同じ様に、無知であることを人は十分知っています。ここでもう一度、主要な観念を纏めましょう。意識は記憶がなければ決して進みません。換言するなら、外観とその外観が意味するものとの間に、あるいは又、しるしとそのしるしが意味するものとの間に、対比とか分離がなければ決して進まないのです。人間のこの鏡は、自己から自己への思想、すなわち厳かに思想そのものに現存し、思想そのものを前にして構成されている社会の先ず最初の支えであったし、又常にそうなのです。その同じ鏡は全ての作品の中で割れているが如くですが、なおそれらの破片においても鏡なのです。この道によっても、そして今度は何ら観念を逸する危険も無く理解するのは、神話が私たちの全ての思想の最初の状態であり、コントが形づくった重要な真実であることです。

書かれた作品はやはり力を持っていますし、誰もがそのことを良く知っています。「ホメロスが何になるのだろうか」と言う人々がいます。彼らは少しもホメロスを読まなかったのです。良く理解しなければならず、又容易に忘れられることがあります。書かれた作品は記念的な性格によっても又、力があるということです。私は記念的を三つの意味で理解します。私が行うここでの適用例においては、更にもう一つの意味で発見されるに違いないと確信しています。書かれたものは、それだけで記念建造物です。ご存知の様に、文字は裸のデッサン以外の何ものでもありません。中国の書は既にその証拠です。そして、デッサンに近い全ての筆跡は、そのもの自体によって一つの様式と美を所有しています。最早、事物を表さずに音を出す筆跡は、自由意志に基づくものに委ねられます。実際に印刷術の発明が、書かれたものに建築の性格を復元する時、筆跡はだんだんと権威を失って行く様に私には思えます。この対象は抵抗しますし、その様な様子を示しています。散文が祝福されて認められたのは、恐らく印刷術によってです。昔は碑文だけが尊厳を与えていました。

声は、しるしの中で最も曖昧で不安定なものです。ご存知の様に、抵抗する作品がなければ、話し言葉は方言となって崩れ、直ぐに殆ど動物の様な言葉遣いとなって滅んで仕舞うに違いありません。しかし声は大変に古く自らを対象とする方法を見出しましたし、それは舞踊から学んだのは本当の様です。屢々言われた様に、詩は記憶術です。もう一つ別の姿で同じ観念を示すために私は言いますが、詩を暗唱する時には耳や脚韻を無視して何かを変えるのは不可能であるので、詩は声に堅固さを与えます。テキストはまさにそれを決して変えたくないという条件で、精神

を定めるばかりです。変えることが出来ないとすれば、それは既に最良なのです。リズムと拍子によって舞踊は既に記念建造物であり絵様帯であるのと同様に、声そのものも韻律上の規則と詩句の音節と半階音によって持続するものになります。精神はこの時、言えるとするなら迅速と補償の法則によって、少なくとも規定された独白の中で、道に迷うこととまさに無縁になります。精神は不変の独白を確立しますが、それは暗唱者と感嘆者たちの長大な行列と共に群をなして、人間的な礼儀正しさに応じ、その様にして孤独の中にまさに自らを再び発見するのです。この孤独な暗唱こそが本質的な祈りであるとオーギュスト・コントは言いましたが、それ以上深く何も言いませんでした。祈りはそれ故に人間の規範に従った自分自身への独り言であり、その様にして孤独と付き合っているのです。

更に、他の意味においても詩は記念建築物的なものです。そして第三の意味として、推敲された散文も又、記念建築物的なものです。何故なら詩人も作家も、外部の力の象徴としての神々と同じ形を、多少なりとも厳格な舞踊の法則に基づいて全ての儀式、全ての行列、全ての記念建造物を一緒に現れさせ、そして又、逆になった隠喩によって私たちの情熱の共犯者であり最後の理性としての山々や森や平原や大空を現れさせて、全ての芸術を一つに集合させているからです。ここでは人を感動させ、それ自体で意味があり、そして先ずは尊敬を要求して敢えて静かに言うに違いない緊密な表現として、あらゆる人間の遺産が私たちに投げ入れられているのです。その様にして観念は、その様なものでも申し分なく私たちに齎されます。衣服だけがそのことを私たちに告げています。そしてそのことが又、私たちに何かを変えたいと思わなくさせています。全てが最初に言われていて、それに手筈を整えるのが私たちなのです。そこから私たちの感情が、敬虔な情動から発して先ず形づくられます。そこから最後には私たちの観念が、観念であり私たちのものであると判断させる人間的な形を引き出します。有名な作品や優れた詩は、どんなものでもそれ故に魂の鏡なのです。私たちは変わらない言葉の前でしか決して思考しませんし、私たちのものをそこにつけ加えますが、直ぐに何もつけ加えていないことを発見するのです。この発見はどんな思想も完成するのです。それは感情にとっては受け入れるのがもう少し困難ですが、やはり本当のことです。コントが、人は二千年前の昔の詩人を読みながらも、自分自身の心の中で発見をなし得ると指摘する時、コントは両方の関係を持っている二重の事例を私に与えます。人間の言葉に賛辞を呈することも又、忘れないようにしましょう。火や小麦の様に共通した発明である〈人間性〉(ユマニテ)という一つの言葉においては、全く偉大な書物の三倍や四倍でさえもの意義を生んでいるので、それは既に詩であり、思想の規則になっています。(完)

第五章 観念

この表題が告げている題材は、不足しても許され、多分尊敬されることさえあるものです。大作家たちはここに、盲目にさせる閃光を投げ入れることだけを行いました。幾何学がその入口で私たちを受け入れます。しかし、幾何学がその明晰さによって謎を生むことしか見ないのは誰でしょうか。そして、その光輝く大通りが何もかも導かないことしか見ないのは誰でしょうか。デカルトはここで有名な諸規則を私たちに与えますが、それらについて考えると際限がありません。しかし、もしも道具の様に単純な自然を考察しないならば、第一定義や公理についてさえも可能な限りの曖昧さを引き戻さなければなりません。プラトンが私たちを洞窟の外へ連れ出した時にはっきりと知らせたことは、直線と正方形とその他の多くの発明品は観念そのものの反射しか既に与えず、理性は観念の太陽である〈善〉の前では月の明かりでしかなかったことです。しかし善は単に諸観念を照らして眼に見える様にするばかりでなく、それらを存在させてもいたことです。ストア学派や私の師であったラニューに教えられた私は、観念を生んで支えるのは意志であることを大変早く理解することが出来ました。いや、余りに早く理解し過ぎました。直線の粗雑なイメージでなくて直線を思考したいと思うなら、誓わなければならないのは明白です。デカルトはそのことを第一及び第三の規則の中で言いました、「私の判断において、それ以上何も理解しないこと...」、「お互いに決して先行しない事物たちの間でも順番をまさに仮定して...」。これらは固い決心です。デカルトも全ての人と同様に、出来る限り事物に従って考えようとしています。しかし、単純なものから複合されたものへ行くこの順番によって知らされたのは、事物の中に無いことであり、それは常に思想に支えられたものであり、デカルトは第一に何時も精神に従って思考することを誓いました。そして、それ故にどんなに些細な経験において、それでも全く余分なものと共に与えられている政治を、彼は保留します。有名は方法的懷疑によって多くのものを拒絶し、先ずは全てを拒絶するこの英雄的な足取りは、デカルト以来絶えず私たちの最良の思想を規定して来ました。私たちの思想に関しての一種の義務でさえあると私は言いますが、この実践の根拠を発見するのは容易ではありません。私たちに大変良く役に立ち、更に家畜よりももっと良く役に立つのが経験ですが、その経験を出来る限り拒絶しなければなりません。しかし何故でしょうか。デカルトはここで雲を集め、先ず全ての観念の規範として〈神〉の観念を提示している様に見えますが、直ぐにプラトンを模倣するものではありません。プラトンと同じ動きで、私たちの裡に完全に倣って私たちの観念の完全を保つ様に促していて、それは極めて高い価値があるもので、彼は自由意志とか場合によっては高潔と呼んでいます。それ故にどんなに小さな思想も大胆に違いありません。あるいは、もしも信仰を望むなら、〈神〉への信仰が私たち自身の思想の中で最も確信のある信仰に他ならず、考えられた思想ではなく、考える能力のある思想であると理解されるに違いありません。自由に考えなさい。そうすればあなたは正しく考えるでしょうし、それは〈神〉が私たちに敢えて言っていることに殆ど近いのです。ところで、ここでは抽象的な証明を探るのは無駄であり、それは単に〈神〉が言っている

ことを間違っただけです。その証明を行う行為に知性があるのです。デカルトの天は〈神〉の栄光を祝福しています。

私はこれらの大きな半円形のアーチの下を私の塔へ進むために、次から次に続く思想に大胆な形を模倣しながら、又厳格な方法に従って楔や釘や車輪を説明しながら、それらの深淵に橋を架けたいとも思います。しかし、この作品はそこを目指すものではありません。寧ろどうにかこうにか私たちの思想の歴史と生理学を描きながら、もしも神話の中のこの種の神話が天上の教義を少しは模倣している形を現せたなら、私は十分満足するでしょう。ところで、外部から始めることで私は、人類がその最も古い概念において経験拒むのは、如何なる意味においてであるのかを既に良く理解しています。そして私見によれば、そこが沢山引用されても非常に誤解されている〈野蛮人たち〉の最も美しい特色なのです。これらの人々は不用心に決して考えません。彼らは自分たちの思想に尊敬しています。伝統的な雨乞い人は、雨について変わることに無き意見を持っていて、雨がそれに合致するのを根気良く待ちます。彼は哲学者の如く鋭敏です。彼は言います、「雨は、雨になったのと同じ私のしるしまでやって来なかった。しかし私は、そのしるしを良く作ったのだろうか。人がしるしを非常に恥ずべきものとしなければ、私は断食と禁欲的な準備の中で全てをすっかり観察しただろうか」。私は自然にニュートンのことを考えます。彼は仮説を変えることよりも寧ろ計算を再検討したのであり、この点に関しての自分の思想をまさに保留したのです。仮説は彼の奥底における精神の純粋な娘で、全く精神の一人娘でした。しかしそれ故に、有名な法則が自己から自己への公理であるかの如くに認めるために、外部の全ての作用が至る所で同一であるために、一つの流体の集合として明瞭に形づくっている完全な球体については誰が考えたのでしょうか。困難なことです。しかし少なくともこの例によって大変良くお分かりの様に、一つの観念の特性は経験を恐れないことですが、寧ろ計算と観察との間の距離、観念によって存在する距離によって、その経験を存在させることにあります。この距離は、全ての人々が事実と呼んでいるものです。観念を完全に吟味する事実などは決してありません。一つの事実の全てを誰が知るのでしょうか。しかし逆に、事実は観念によってしか存在しませんし、換言すると混乱は考えられた軌道によってしか存在しませんし、それは如何なる天体も従わないものです。同様にプラトンが望んだ様に、曲線の審判者は直線であり、それは曲線の父でもあります。そして全ての線を一緒にしたものが、線の無いものの審判者なのです。更に、一様のもものが変化のあるものの審判者なのです。三角測量は、この方法で測量されたものが三角形であることを意味していません。恐らくニュートンの楕円も、天体が楕円を走り回っていることを意味していないと言わなければなりません。同様に、天球が存在しないのを知りながら、次のことによって私たちに教えています。存在しない代わりに私たちは絶えず天球を思考しており、天球によって絶えず経験を思考しているのです。多分、私たちの観念が照合でしかない決めてかかったならば、学者たちの論争は全てがもう少し整理されるかも知れません。照合は思考であり、正確な思考です。そしてそれは些細なことではない、と少なくともまだこれから言うべきです。空想的な仮定には多くの相違があります。それらには、既知のものを説明するのを目指して未知

の存在を考え出すことと、仮説があります。後者を正確に言えば、直線や円や等速運動や慣性や力の様なものは、世界に新しい事物を創りませんが、そこにあるものを現れさせるためのものです。そして結局のところデカルト的な秩序に従って創り上げる判断力だけによって把握するものです。何故なら、自然の中に直線のものが無いのは明白ですし、小骨の山積みの中にも数字は無いからです。私は危険を冒してつけ加えて言いますが、観念から事実への関係には、観念は決して十分ではないという点があります。こうして私たちは雨乞い人から遠く離れます。けれども事物にするしを従わせるのを拒んで、勇ましく間違える人間のこの姿勢は、まさしく動物には決して観察しないものであり、動物は全てに屈します。そしてその様にして何も知らず、事物も自分自身を知らないということに気付くのは有益です。

偏見は私たちには脊椎となり、信義は精神の美德として現れます。昔のことではありません。年齢との関係は人類におけると同じで、私たちの一人ひとりにとっても同じです。そしてもっと適切に言うなら、私たちの全ての老年者は毎朝自分の順番に従って、この上なく僅かな思想においてさえも目覚めるのです。どんな幽霊の前でも私たちは古代の呪いと同じに、絶えずしるしを掲げます。しかし直線や三角形を掲げることは、信仰の無い多くの幾何学者たちが屢々それを否認して、弓を曲げる様に、観念を先ず曲げ様と試みますけれども、それらは余りに少なすぎます。これでは足りないのです。何故なら存在するものは待ってくれませんし、情熱がキャンパスを張っているからです。一分毎に人間の判断力が必要ですし、危険が無い訳ではありません。戦争、平和、愛、友情、憎悪でさえも仮面と渋面を差し出します。それらの役割が外観を見せつけるのです。もう一度、いや何度でも、アナクサゴラス(1)が言った様に、万物は一体になっており、精神は秩序づけられるのを要求されるのです。他の対象のために目覚めて成熟することを自分自身に証明することではなくて、新しい外観の前で目覚めて幼年時代から抜け出るのを要求されるのです。確かに、デカルトは多くのことを敢えて行いましたが、エリザベス女王が苦しんだ持続的な微熱に対しても、悲しみは健康に良くないとの『情念論』の思想をここに適用します。しかし悲しみは、それでは未だ打ち破れません。政治的な外観を解きほぐさなければなりません。それらの外観は各人のものであり、各人のために再生します。幸いにも〈人間性〉の宝は、力強い「もの言わぬ歴史」を別にしても、モンテーニュの表現に従ってその外にも沢山の格言を含んでいます。そして精神は、美しいものはどんなものでも真実である、という感情の予断に倣って第一に形づくられます。教養のある人は、格言の外観の下に真実を再発見することで、最良の時間にします。その点で彼は二度も得をします。何故なら、一篇の詩の美しさが人間の真実と情念の秘密を何時も最後に引き渡すことは真実であり、各時代を通じて吟味されて、そしてそのことがまさに格言を生んでいるからです。しかし又、これらの格言が時代遅れで死んだものとなって外観が常に戻って来るので、それらの格言をこじつけ、掘り、揺り動かし、催促し、本当の注意力である敬虔の念に従って壊して作り直すのです。まさに申し分の無い訓練が行われます。というのも情念も又、スフィンクスであるからです。従ってそれは一つの規則ですが、用心とも言える別の方法で、神聖なテキスト同様に外観を読むことで良く隠されます。最初に騙されているの

は偉大な術です。何故なら、もしも外観を拒むことがなければ、何も騙さないからです。只、頭を回して下さい。すると外観は虚構としてあなたの裡に残ります。事物と離れて外観を思考しても空しいのです。事物と離れて誰も思考出来ません。事実が単に思い出すことであると直ぐに、最早何も発見すべきものはなくなります。もしも最初が謎であったなら、何時でも謎でしょう。つまりそれは世界から切り離されて他の対象によって少なくとも説明が付くものであり、それらの対象は経験外のものでもあります。両眼を閉じて思索する人にとっては全てが奇跡です。しかし、直視して全幅の信頼を寄せている人には如何なる神も決して現れません。観念を形づくるための最初の条件は、従って決して恐れないことです。そして、私たちは情念を持たないことは決してないので、あらゆるものの最初の外観を愛さなくてはならないでしょう。確かにスピノザの強固な教義はそれに無益ではありません。「外観の中で、それらが間違いであると言う原因になっているものに、積極的なものは何も無い」。従って全ては結局のところ真実でなければならず、二百歩の処にある太陽でさえも、距離により、霧により、人間の身体により、真実でなければなりません。そして折れた棒の外観が水面に見せていることを誰もが理解します。しかしこれらの事例は、饒舌家や激昂家からは余りに縁遠く、又市場や軍隊や騒乱からも余りに縁遠いものです。それ故に大部分の人々は目を閉じて、しるしによって自分自身の中で思考したいと思っています。それらの観念を抽象的と呼ばなければなりません。タレス(2)は相似形を発見した時、ピラミッドと人間、そしてこれらのものの二つの影を見て、太陽を証人としました。それらの恐ろしくさえもある外観を見詰める者、そしてそれらを決して反駁しない者は幸いです。変えることは反駁するには最良の方法です。しかし、これは行動によって恐怖から逃れることになります。決して思考することにはなりません。人間は現にある如くに存在しているのであり、現にある如く最初に震え、そして直ぐに逆上します。儀式や宗教においてしか思考しないで、眼に見える社会によって保障され、礼儀と尊敬によって抑制され、不動のものの前では不動になる、と私は理解します。人が理解するのはそれが大好きでもあるからです。熟視する(contempler)という言葉には、そのことの意味もあります(3)。もう一つの言葉である考察する(considérer)には、星々(sidera)が含まれています。科学の最初の対象は、私たちの手が届かない対象でもあったことを思い出させてくれます。(完)

(1) アナクサゴラス(前五〇〇~前四二八)は、古代ギリシアの哲学者で、宇宙万物の種子秩序が理性(ヌース)によって生じると説いた。

(2) タレス(前六二五頃~前五四七頃)は、古代ギリシアの数学者・自然哲学者で、七賢人の一人である。

(3) 熟視する(contempler)には、「うっとり見とれる」という意味もある。

第六章 悟性

理性の歴史は、信仰の歴史に他なりません。それらの文字は地上の至る所にも描かれていて、宗教から観念と科学へ行く順番が良く理解されると、それらの文字を読むのはかなり容易です。悟性の歴史は、人間のあらゆる技術を覆っている奥深い闇によって、もっと一層秘められています。観念の歴史は、道具の歴史と分離させられないことを誰もが感じます。ところが道具の歴史は、弓や楔や梃子や車輪が至る所で利用される時代まで記録を残さなかったのみならず、技術的進歩は現代においてさえ不可能そのものであると言わなければなりません。何故なら機械とその処理は、知性が明らかにする前に何時も形あるものに行っているからです。例えば飛行機の形はどんな細部に至るまで広くて丸い前部と、ほっそりした後部を示していますが、この時、蒸気機関車の風切りが何故誤りであるのかを説明することは今でも困難です。同様に風に対して斜めに帆を張った人が、力の分解を知っていたとは決して本当に思えません。又、最初に梃子を使用した人がさっと眼を通した経路によって力を生み出す様に、労働の定義を適用するための目的の様なものを持っていたとは決して本当に思えません。慣性、等速運動、加速度、二つの運動の合成、全体の結果の中で再び見出されるそれらの一つ一つの法則が垣間見られる前に、矢は先ずその軌道を描きました。しかし、大砲の最も強力な効果は驚きでしたし、それを発明した人々でさえも今だに驚きであることは、驚くべきことではないでしょうか。人間の才能の奇跡は一つ一つが、代数学においてさえも逆説的な姿を示していて、成功した後では予見し得たであろうとか、予見しなければならなかったと言われますが、結局のところ決して予見されることはありませんでした。ご存知の様に、フェルマ(1)は最大と最小についての研究において、筆の先には微分代数を持っていましたが、それが未だ何であったかのかも知らずに使用していたのです。他方では、この驚くべき成功はフェルマにしか与えられていませんでした。そして彼は予め多くのことを理解していなければなりません。しかしそのこと無くしては、理解出来ずにいた彼にとって、この結果には至らなかったであろうとまさに認めなくてはなりません。同様に人間と動物を比べるとすると、道具の発明が常に熟考を乗り越えていたとしても、それでも熟考を仮定しているのは十分に明らかです。猿も棒を梃子の様に使うことが出来ます。折れた枝で積み上げられた中にいて道を開いて行くとなると、直ぐにでも猿もそうすることを私はまさに確信することになると思います。しかし猿はそのことに注意しません。そこから私たちは、注意すること、考察すること、沈思することは決して生物学によって単に説明出来る機能ではないという私たちの観察に戻ることになります。そしてこの種の注意は、コントが引用するのを好んだ次の『模倣』の一節に思いがけない解釈を与えています。「悟性は信仰に従わなければならない。これに決して先行するのでなく、まして砕くのもない」。その上、信義に関して以前に説明したとおり、この格言はどの様な対象であってもこれを知るためには、もしも第一の条件が精神に対して信義を守り続けることであるなら、更にもっと奥深い他の意味を示します。そして、ジェルソン(2)が恐らく大変上手に言う術を知らなかったことに注意する良い機会です。しかし如何に極めたのでしよ

うか。テッサリア地方の魔法使いたちは、人間の世界における沢山の変化の原因を月に帰していましたが、大変上手に言う術を知りませんでした。何故なら、潮流は小さな港であっても観念や計画や情熱を変えますし、魔法使いの意見よりも遙か向こうでありながらも、そのやり方は別な風でもあるからです。

この点で私たちのやり方では、大部分が手に負えない数々の困難が認められます。しかもそれは些細なものではありません。少なくとも人は、説得的で性急で断定的な〈実用主義〉（プラグマチズム）を、如何なる突然の恐怖もなく裁くことが出来ます。認識の形式は第一に行動の形式であることは、多くの事例が示していることです。私が単に空間を考察するのは、この事例があらゆる方法で最良であるからです。距離や方向や形についての熟考以外に、悟性をより良く持ち続けるものは何もありません。換言すれば、空間とは行動の規則に他なりません。遠近には、私たちが触れることが出来るものに対し、触れている関係にないとするなら、決して意味がありません。距離は行うべき運動を描くのでないとすると、何ものでもありません。距離は、この運動の準備と素描によってのみ感じられるものです。同様に、直線も他の一点へ絶えず向けられた一点の運動による以外に、より良く定義する術を私たちは決して知りません。但し、少なくとも直線を実際に描くことは出来ません。どんな行動も、詳細が果てしない一つの航跡です。その航跡が船の後に広がり、あらゆる海に及びます。この比喩は、全ての行動が行動の規則を消すのを私たちに知らせるのに適しています。目標に向かって走る人は直線を描きません。この上なく細い鉛筆も直線を描きません。それは炭素の塊の一部でしかありません。塊が大きくても小さくても問題ではありません。描かれた直線とは、全ての事物の新しい配置です。例えば光はその後、折れて別な風に送り返されます。ユークリッドはこの事物の中で、行動がむさぼり食っても全てを食ったのではない思想の記憶を発見しますが、それは奇跡です。観念は存在したのですが、その前方に存在したのです。観念は常に前方に存在します。私たちは前例として、観念とは行動が可能なものでも決して行われません。この種の停止やこの種の注意力は、鳥とか犬が方向を変える障害物とは別種の障害を前提にしている様に私は思います。距離が、緊張し収縮した筋肉の中にある限り、それは混沌です。欲望も観念をむさぼり食います。観念への移行は肉体の抑制、つまり行えるであろうことに対しての鎮静を前提としていますが、動物的な無関心を前提にしていません。動物的な無関心は、肉体の抑制の周りで空間の全ての門を閉じますし、決してそこを通過して突進することはない様に見えます。その様にしても動物は全ての門を閉じて、如何にしてどんな空間もその時に動物の肉体の空間の中で、動物のための空間でなくて、私たちのための空間に再び陥るのかを良く理解して下さい。同様に、精神の最も高いものに答えることを私たちの心象活動に取り戻すことを大切に考えている悟性は、何もつけ加えずに精神そのものであり、その全ての歩みの中に捕らえ処の無い観念を探しております。しかしその観念は何ものでもなく、存在を既に拒んでいて宙に浮いている瞬間そのものにおいて探しておりますが、それは正当な権利であるべきです。そこから空虚で充実した観念、驚異的な多産性を持ち一点と他の点との間の、単純で直接的な関係にあって大きさも部分も無く不可分な関係にある観念が生じます。

思考された距離が最初は尊敬によったことは、どうやら本当らしいのと同様に、円が集会の形であったことも、どうやら本当らしいです。至る所が等しいこの円の形は、生命の兆候が無い事物においては決して一般的なものではありません。その代わりに円は、草の中で一つの場所を作る犬とか、巣を作る鳥の様に、あらゆる方法で自由に体を回す動物によって自然に描かれます。しかし、注目に値することですが、円は眺望すると直ぐにその左右対称の形を失います。その代わりに果実、瓢箪、転がって来た小石などに示される形である球体は、眺望しても決して形を変えずにその形を含んでいて、一つを中心から発してもあらゆる方向への或る種の平等性に隠れてもおります。ここでは外観が人に教えますが、直ぐに使用することで逸脱させます。それと反対に敬虔に守られた距離は一つの規則です。そして格式張った注意はこの規則に則ります。そして十分にお分かりの様に、人間の跡である火の周りを囲む円のしるしは、敬うべきしるしの地位へ移り、自然と外観を探すことに導きました。円はそれ故に計量的である前に魔術的であり、有益である前に美しいのです。あるいはもっと正確に言うと、円が注目されたのは有益だったからではなく、寧ろ突破することも、軽々しく描くことも許されなかったからです。規則はそれ自体によって観念であり、又観念そのものです。確かに全ての規則が未来の観念に通じていた訳ではありません。只、禁止は規則の中でも最も明確なものです。図形化された数々の義務の間で、円は人間の奇跡であり、全ての機械の源である車輪の方へ精神を導いたに違いなかったことを観察しましょう。従って舞踊や儀式や集会の場所が、先ず空間の観念を与えたと言っても決して間違いではありません。しかし、悟性を支えるのは常に敬虔であるというこの根本的な観念に従って、行動の場所としての空間と、儀式の規則としての空間をもっと良く区別しなければなりませんでした。

運動の観念は、これらの分析の中で至る所で示されています。この観念は、運動を行うことが、運動を思考することと全く同じでないのを理解させるのに適しています。一方はもう一方を追い出す、とまさに言うべきです。何故なら先ず実行において、運動の一瞬はそれ自体でしかないからです。そこからゼノンのあの有名な論証が生まれました。しかし、もっと正確に言えるとするならば、実行において全ての事物の多様性と関連によって実現されるのは一つの運動でなく、千の運動、いや千以上の運動です。その反対に、運動を観念として述べなければなりません。その観念は不動の全体です。又、その諸部分は全体によってのみ意味を持ちます。法則無しに考えられた運動は決して無い、と言えは十分です。確かに、幾何学者の正方形において考えられるのは、常に正方形の法則です。確固としたこの法則が無いと、優柔不断に陥るに違いありません。しかし結局のところは図面を認識することが出来ます。円とか三角形の図面になるが如く、一つの図面をもう一つの図面と区別することが出来ますが、生成する法則に訴えることはありません。その代わりに運動にとっては、不動の軌道の前でしか認識したり検討したりすることが出来ませんので、運動は時間と位置との間の関係による思想によってしか残りません。これは言葉とか代数的記述によって表現された数々の位置の間の関係に帰着します。それは或る時間の位置が決定すること、そして謂わば連続している時間の中での位置を作図することであるのが理解させられ

ます。例えば、さっと眼を通した空間は、それ相応の時間になるでしょうし、あるいはそれ相応の時間の正方形になるでしょう。しかし、もしもこの種の如何なる法則も、完全な連続によって軌道の前で思考されなければ、その軌道は最早軌道でなくなります。鏡の中の様に、不動の運動において悟性も自己自身を見ることです。そしてゼノンの有名な論証は、運動が法則に依存するか否かによってしか解決され得ません。ディオゲネス(3)が歩いていることに依存するのではありません。実際の運動は従って観念を消します。しかしそれとは反対に、観念を確認する数々の運動が次のとおりにあります。それらの運動は繰り返されて再び現れますし、同時にそれらの法則は力強く呼び戻されるものでもあります。ここではさ迷うことは出来ません。空の光景はゆっくりとした運動を示します。同様に記憶と記録保管所を必要とします。私は軍隊とか合唱隊の変化しか見ませんし、それは平行移動、回転、列の変化、整然とした分散と集合によって、運動を何ものかであるとして思考する様に導くことが出来ます。

今は道具を考慮に入れなければなりません、道具は些細なものではありません。紐、楔、釘、車輪、梃子は悟性にとって特上の対象です。動物の世界では道具による行動の跡を少しも示していないのは注目すべきことです。動物たちが記念建造物も如何なる種類の書き物も持っていないことは本当です。実際のどんな言葉も、世代と世代を結ぶことがありません。動物たちが受け継ぐのは自分たちの体型ばかりです。それ故に手段となるのは脚と顎以外になく、もっと適切に言うと、身体全体が取って代わります。動物たちが働くのは、引き裂き、咀嚼し、消化する様なことであり、砕いたものを全て血肉化しているのです。その反対に、道具はそれに抵抗する何らかのものであり、その形に行動と、作るものを同時に課しています。鎌一つによっても、鎌で刈る技術は父から子へ伝えられます。弓は腕と全身の位置を必要としていますし、決して譲れません。鋸も同じです。鉄の歯車の歯は努力を軽減し、運動を規制します。これは囓ることとはまったく別ものです。以上が道具の最初の姿です。その外にも私が気付いていることは、道具が防具と同じであるということです。何故なら、生身の体は容易に傷つけられ、苦痛が気持ちを引き離すからです。それに反して、道具は固体と固体を向かい合わせ、筋肉の働きは木や岩や鉄でさえも穴を開ける様になるからです。ライオンが猪槍や投げ槍や矢を噛んでも無駄です。その様にして人間は最早行動の中で身体を失うべきものではなくて、道具を発見のために送り届けます。もしもぐらぐらしている岩を鶴嘴やピックで制止しても、手とか腕で押さえるのと訳が違います。人間は無傷でいます。誤りにも救済策が無い訳ではありません。ここから決して恐怖の無い一種の用心が生まれます。これらの注意の後で道具の力が理解されます。そこにまさに危険の無い試みである思想の条件を見ます。器具は私たちが火を取扱うことを許します。しかし、動物は何も火を生むことが出来ません。

道具の発明そのものに関しても、偶然と注意力の面を考慮に入れようとしても困難です。しかしながら道具に似ているものは何も生まなかつた、動物的な恐怖と欲求ばかりの注意力もあります以上、ここでも又、人間の注意力が宗教と英知の注意力になっていると言わなければなりません。昔のあらゆるお伽話に出て来る魔法の杖は、力あるものとしての道具よりも、しるしとし

ての道具に何時も注意していることを見せていました。そして、恐らく何よりも上手に使い、一定の労働のためのみに使い、常にその形に導かれる儘に適用される道具を人々は信じたからですが、子供は形にはお構い無しで、何時も叩き、直ぐに怒り出します。仕事とは慎重なものです。そして更に、今日でも奇跡を生む動作を探す様に道具を無理することなく使い熟します。しかし、弟子が何時も力や情熱を入れ過ぎるのはご存知のとおりです。遵守するのは宗教のものであることにもう一度注意しましょう。もしも思いがけない抵抗に出会っても、道具を責めないで、自分自身を責めるなら、それは些細な進歩ではありません。

思想家は労働者そのものです。あるいは何ものでもありません。思想家にも又、道具とやり方が決して無くはありません。しるしも又、道具です。全てのあり得る思想がそこに含まれています。思想家に固有の美德はしるしへの尊敬、そして又規則への尊敬でもありますが、それらに従って人々は一般にしるしを一つに纏めます。言われたことは何でも取り上げて、最も良く鳴り響くものに注意することです。この驚嘆すべき遺産を用心深く押すことであり、動かすことです。師たちの靈感に基づいて、万人と一致して、礼儀正しくしるしを感じながら、事物に対して一般の慣用をすっかり鳴り響かせるのです。そして、人間と事物の二重の輪郭に従いながら、思想家の多くは仕上げる者でしかありません。もしも、人間の一致が唯一の真実の条件でないとしても、少なくとも最初の条件であるという思想に倣って、自分の本姓に従って常に慎み深く従順であり、常に実力を出し惜しんでいるのです。以上が、如何にして詩人が観念の狩に出掛けて行くのかです。そして屢々、他のしるしによって出掛けますけれども、数学者も同じです。（完）

(1) ピエール・ド・フェルマ（一六〇一～六五）は、数学者で微積分学、確率論の先駆者。

(2) ジェルソン（一三六三～一四二九）は神学者で、コンスタンツ公会議に出て、教会の大分裂の收拾に尽力した。

(3) ディオゲネス（前四一三～前三二三（三二七?））は古代ギリシアの哲学者で、キニク（犬儒）学派の代表者。

第七章 懐疑

無名のストア派（禁欲主義者）の人が「正しい観念と間違った観念があると信じている人々に反対して」と書いたと言われています。ストア派の人々が教条主義者であって、懐疑論者でなかったことを良く知りさえすれば、この表題は意味深長です。彼らの思想の断片によって「賢者は決して間違えない」ということも私たちは知っていますが、実際には殆どそれで十分足ります。これは正しく思考することであり、正しく思考することは意志に依存して、決して偶然に依存しないと彼らは解釈していました。彼らの事例で一つが今も残されています。一つだけですが光輝いています。「夜が明ける」と真昼に叫んで行く狂人は、それでも正しくない真実ではない、と彼らは言いました。樹木が池の中で再現される様に、真実は鏡としての人間の中に描き出されるという余りに単純な概念は、ここでは滅びます。論争的な精神は、この心象から出発して、鏡が象を歪曲するとか、その外に本当らしいことを言って、非常に遠くまで行くことが出来ます。古代の人々は、狂人とか〈巫女〉がある意味では全てを知っていて全てを表して、その反対に賢者は多くのことに無知であると決めていると気付く時に、もっと良い靈感を与えられました。この巨大な観念を恐れてはなりません。同様に、人間の眼には弱い印象と、それに続く情熱による単純な彗星でさえも、星々が私たちの運命を変えるのは本当のことです。だが、このことは天文学が占星術の真実になることに変わりなく、同様に人間がその形に従って万物の鏡であり、人間自身が全体の一部であるので、何も歪曲しなかったことが、その中ではもっと忠実な鏡です。狂人が言うことはそれ故に、世界と狂人の両方にとっての真実です。そして、もしも狂人が噴煙の中に幽霊を見たと言ったなら、それにはそれなりの理由があることを私たちは良く知っています。だが、その点で彼は正しいと私たちは単に決して言いません。そして、この「正しい」という表現は、大変に感動的であり力強いものです。私たちは出来事とは別の真実のしるしを望んでいます。そして恐らく、私たちがその人の声を聞く時、私たちの調査の主要な部分は、彼が提出しているものよりも、別の理由の証拠を彼の裡に探すことにあります。裸の証拠を前にしたこの用心は、精神の最初のしるしです。正しい推理はどんなものでも人を怒らせる、とスタンダールは書きましたが、そのことが私たちに教えているのは、戦争ではなくて平和に従って終始話すことであり、結局のところ証拠の発見のために決して口論を求めないことです。しかしもっと正確に言うと、どれ程用心しても新しい言い方は全てが、同意を得る時も最初に笑わせることを私は観察しました。このことによって聞き手は大変遠くに逃げて仕舞います。話し手の周りには、これらの見せかけが一種の砂漠の様なものを生みますが、美しくもあります。人間は些細な理由からも真実を恐れます。もっと重大な理由によると、解放されます。つまり役割を持っているのです。既に、望まない程に沢山持っています。何が真実でないのでしょうか。

二足す二が五であるのは真実ではありません。平面上の三角形の内角の和が二直角でないのも真実ではありません。しかし間違っているこれらの観念が、全く何ものでもないということも注意しなければなりません。ヒューム(1)の懐疑的精神はそこを掘り下げる術を知っていますが、

空虚しか見付かりません。何故なら二足す二と言うことは、常に四と言うことであるからです。そして、二直角に等しい内角の和と言うことも、常に三角形を言うことであるからです。前進していないのです。現実の対象は数字でもなければ、三角形でもありません。同様に、精神はここでは精神そのものしか考慮に入れず、会計係や石切職人の知識に眼もくれません。行動から大変に遠ざかっていると推測されます。緻密であっても評価と無視が交替する理論科学は、本当の目的を見失います。そのことは、如何にしてその様な真理が証明されるのか、何故それらが真理であるのか、と自問する様に導きます。何故ならそれを疑わず、そして四個の骨片を見詰める人はそれを知り得ることの全て、取分けそれらが四個であることを情操の感覚で知るからです。極めて単純なこの数字も変えられて増やされたり減らされたりすることがあり得ますが、情操はそれ程に変えられたことはありません。それ故に教養の無い人は、ここにも困難を覚えません。同様に、描かれた三角形とか材木から切り抜かれた三角形を前にして、情操はこの形のどんなものでも認識させられます。嵌め木の床とか寄せ木細工の技術は、ユークリッドの証明を少しも必要としません。しかし精神はそれを必要としているのです。そして精神がここで求めているのは、対象との一致と同様に、決してしるしとの間の一致ではないのです。それ故に不必要と思われるもの、取分け最初の照明においては慎重であることです。ライプニッツの慎重に負っているのです。あなたが二と呼ぶのは何でしょうか。三と呼ぶのは何でしょうか。四と呼ぶのは何でしょうか。同様に、ユークリッドの証明においても、私が他の言葉で既に定義しているものを三角形とか内角とか直線とか呼ぶことを認めましょう。認められたもの以外に、何も考えないことを認めましょう。ご存知の様に精神は証明を、良く出来上がった言葉に還元するためにここにやって来ませんし、何時までもやって来ません。精神には、二つ並んだものの知覚や、三角形では外部に平行線が必要なのです。精神は見なければなりません。しかし実際には、勤勉な精神というもの出来る限り見ないことにあります。思考するための技術とはどんなものでも、ここでは言葉を言葉に一致させ様とします。そこでは二重の努力が大変上手に把握されますが、そのうちの一方は殆ど軽蔑されています。正しく知覚することが強く望まれますが、それが殆ど全てです。極めて適切に評価されているこの禁欲的な訓練は、礼儀正しさが最初に現れる証明のための儀式において、対象との一致から人間と人間との一致へと私たちを立ち戻らせる目的が主要であることを強調して下さい。証明や、取分け数々の要求は、可能な全ての認識を最初の一瞥に私たちを投げ入れる対象を無視して強制されて納得することが全く無く、懐疑へ招くのを目的と見做しています。一点から他の一点へ行く直線は一つしかないこと、一点を通る平行線も一つしかないこと、その他同様のことを要求するのは偉大な術であり、大いに尊重すべき術です。それは自然が大変正しく答える時に、一つの決定を要求することであり、一つの決定を認めることであり、それを観察するのを誓うことです。確かに、自然が少しも躊躇しない方法で図形を描くことは、既に一つの術です。しかし、事物への人間の同意を軽蔑すること、信じているものを信用しない力を人間の中に鳴り響かせることは、術の中の優る術です。この方法によっては決して新しい真理が獲得されません。実際に技術は既に梃子に代わるものとして、証明の中で有用なものを手に入れ

ました。その上、鳥は飛んでいる時に、空気の物理学を何でも把握します。しかしそれこそ動物の餌と同じです。思考する師は、真実の観念と別のものを探します。向こう側や後方を狙って観念の中に、任意的に宣言されたものがあることを第一に認めるためです。第二に、疑う能力を認めるためであり、それがなければ疑問さえも提示されないでしょう。ここで人間は自らを探しますが、自己しか探しません。彼は目を覚ましますが、力強い拒否によって自分自身に目を覚まします。その拒否は主体と対象、次に主体と観念、その他に際限なく分離するのです。どの様な判断力も自由に現れますし、儀式への尊重が結局のところその対象を見出すのです。

ところで、ここで無数の困難を乗り越えるために、如何なる人も強制された一致に満足しないことに私は気付きます。セリメーヌはアルセストを愛すること以外に他のことは出来ない、とアルセストが知っても、彼は決して満足しないでしょう。注意すると、そのことだけでも侮辱的です。ルソーが言った様に、人が実際に最も弱くなる限り、それは最も弱いだろうと断言することになるのです。この様な思想は自滅します。何故なら、私たちはここに行動しか見出さないからです。これは裸の戦闘です。軍隊は前進したり後退したり、目まぐるしく領土を広げたり失ったりします。全てが絶えず真実で正しく、真実で正しいものは最早今では意味がなくなることになります。事実は事実ではなく、正しくもありません。でも、決して偽りではなく、不正でもありません。真実で正しいのは人間が思考することです。だがその上更に、彼の裡での真実と正しいためのこれらの戦いを一つの戦闘として観察するのは、決して人間の立場に立つものではありません。感情も思考もそれ故に天秤の刃の上であって、誰もが今信じるものであったり、愛するものを観察するのでしょうか。それは眠りであり、決して思想ではありません。精神の世界における交換のための貨幣ではありません。それは身体の世界における交換のための貨幣なのです。そして対象にあっては全てが真実であり、誤りが少しも無いことが理解されます。それでユークリッドが私たちに決して要求しないのは、私たちがそのことを考えることにあるからです。対象は何も殆ど無言ですので、要求しているのは寧ろそのことを考えなければならないことです。カントが言ったのは、この認識する別の方法が経験を可能にする限りは拒絶し、理性の最初の目覚めを歴史においても示すことです。それがカントの力強い学説の魂でさえあるのです。

ところで私がここで説明したいのは、次から次へとこの驚くべき、疑うという能力は、世界を明らかにしていることです。何故なら直接的な真理は深い夜の闇の中にあるからです。もしも疑わないとするなら、見るとは何でしょうか。もしも疑わないとするなら、事物が私たちです。視覚や聴覚や触覚や味覚のための私たちの距離である拒絶の領域を、私は最早認識の中に見出しません。もしも私がああ鐘楼を絶対的な存在の様に見えるものと見做したなら、私にとっては最早何ものでもなくなるでしょう。要するに世界は観念無くして現れない、とプラトンと共に言えるのです。しかし又、恐らくプラトンも知っていたことですが、全ての人の奥底にある自由の宗教がなければ何人にとっても観念も知覚も無いに違いない、とストア派の人々やデカルトと共に言えるのです。事物を使っても決して観念を生み出すことのない動物の無関心を理解することが出来るのもこの側面からです。

観念は常に追い越されますから、常に否定されます。観念を作る術を知ったその人は、デカルトを手本として、観念を壊す術も知り得たからこそ作る術を知ったのです。従ってどんな真実の認識も熟考によるものです。もう一度言いますが、世界と全ての人為を現れさせるのは、認識そのものと共にある困難な意識の光です。ストア派の議論や事物を取り除こうとする思想の訓練によって、人間の慎重さを全てその代わりに明るくするための精神は、今でも十分に残っています。その様にして非人間的で一瞬のものと見えるデカルトの懐疑は、全ての幾何学者や物理学者の足取りを照らします。与えられた真実の拒絶及び管理された私たちの思想への不断の注意力、以上のものが証明を立たせた儘にして置いてくれるのです。そして証明の中の証明であるデカルトにおける神の証明は、まさに不可解なものによっています。というのもその証明が言うに帰着するのは、証明の魂は自由の神であって、決して証明されて示された神ではありません。証明している神であるからです。躊躇して細心になることは宗教のものです。善は観念の太陽であると言っているプラトンも又、同じことを言ったのであると私は理解して疑いません。そこから、やれることなら何でも許されている訳ではないと知るために、どんなに小さな社会でも前提としている昔からの観念も又、諸観念の最初であり全てのものの土台でもある、と私は言いたいのです。法則 (loi) という言葉の根深い曖昧さは、モンテスキューが重さや価値を感じていましたし、十分に理解させられることです。しかし、自然法則が社会に戻って来て法則を照らす時、それは実証的政治学の時となって、私たちが自然に与えたものを自然は私たちに返します。もしも法則が舞踊を規定しなかったなら、ピタゴラスは存在しなかったでしょう。そして、私がこの賢人を引用するのは、純粹さから健全な知覚への移行を全て新しく把握しながら、直線や垂線や正方形の様な幾何学者たちの美しい発明が美德を表現したことを、彼は敢えて十分に書いたからです。直線の中に真実のものがあるということは、常にイマージュに送り返されている観念の否定であることを、少なくとも理解しなければなりません。それ故に諸宗教が、それらの道筋に寺院や立像を残したのです。例えば正義とは、法律についてのこの懐疑であり、法律を救済するものでもあるのです。(完)

(1) ヒューム (一七一―七六) は、英国の哲学者で『人性論』 (一七三七) などを著した。

第一章 人間動物

一人の人間の存在は先ずその顔に形と色、そして身振りを私たちに投げかけますし、それらは独自のものです。年齢や職業のしるしもその外見に刷り込まれますが、それを変えることはありません。この様にして彼は学校の腰掛に座って十二歳になり、これからもこの様になるでしょう。髪の毛のうねり一つも変わらないでしょう。座り方、取り方、頭の回し方、身のかがめ方、身の起こし方は、一生を通してその人に見合った姿をしています。それらは変わることはないしるしです。その個人が絶えず投げつけるものであり、他人が観察したり認めたりもするものです。私にどんな説得力があろうと、私が権力者とかお金持ち、おべっか使い、安請け合いをする人であろうと、彼は眼の色を変えないのと同じ様に、広がったり狭かったりする額、顎、両手、背中を変えないことを私は良く知っています。アレクサンドロスやカエサルやルイ十四世やナポレオンも、これらの相違について何も出来ませんでした。従って全ての人の注意はそこに注がれて、大変良く完結され、大変良くその形そのものに基礎づけられて、極めて完全に構成されて、全てが一致して支えているこの形を当てに出来ることが確信されているのです。彼を殺すことが出来ても、変えることは出来ません。その時に全ての私たちの企ても結合も、従ってこの形を最初の抛り所とします。人間が他のしるしの幕、それらに共通した服装とか礼儀とか文章を振り付けても無駄です。全てそうしたものは自然の堅固な輪郭、色彩、不可分の動き、内奥の岩を一瞬でもまさに混同することがありません。ここには変えることも騙すことも出来ない何かの意味されています。でも、何でしょうか。

デカルトは、人々が動物に精神があると仮定することを望みませんでした。同様の見方は人間を明らかにすることにもなります。でも、人間の姿、動作、視線、血色が多くのことを説明し得るものでもありません。私はデカルトが話している処を見なかったことに後悔しています。しかし、本当に後悔しているのでしょうか。そして、もしも私が後悔しているなら、尤もなことでしょうか。実際に人類は動作の無い言辞、眼の無い言辞で生きています。ホメロスは彼の詩篇に背きませんし、デカルトも彼の作品に背きません。シェークスピアとモリエールが、美貌ではっきりと話すどんな俳優よりも自分たちの作品を上手に演じたとは限りません。ギリシア人たちは俳優の顔を面で蔽いました。私が思うに、名優たちは自然のしるしを挫く方法を一つならず沢山持っているのです。声においてさえも、悲劇俳優は平然とした何かを留めています。それは詩がそうさせていることです。喜劇俳優も又、自分の動きや動作や口調にスタイルを探します。同様の単純化は本物の雄弁家に認められます。しかし又、これらの芸術、いや全ての芸術の資力は上手く秘められているのも本当です。表情が言葉を曖昧にすることを知っている人は少ないものです。その上、礼儀正しさは、自然の表情の一般的な結果である軽蔑という長い経験に従って、常にしるしに対して大きな節約を要求します。多分、人間の眼の中に理解すべきものも、猫の目

以上に沢山ある訳ではありません。ベートーヴェンの肖像画が投げかける視線から、ベートーヴェンの作品が聞こえてくるのを私たちは大変良く知っています。しかし肖像画も既に形づくられているのです。もしもベートーヴェンが生きていたなら、恐らく謎になるに違いありません。いずれにせよ、人間の姿から未だ言っていなかった思想や、未だ言っていなかった作品へ行く逆の進み方は、全く危険に満ちています。本当の処、顔によって明白にさせられるのは決して言葉や作品ではなく、その反対に言葉や作品によって顔が一つの意味を理解するのです。そして、この方式そのものが大変上手に説明しているのは、如何にして一人ひとりの人間が動物を教化するか、なのです。何故なら、人間は全てを一緒に明示することから始めますが、これらのしるしのアラビア式模様は、自然の枝葉模様と同様に枝々の均衡とか風の音と同じ様に、読みやすいものではないからです。同様に、犬はしるしを惜しむと決して言っはなりません。その反対で、犬はしるしを乱費するのです。激しく怒っている様に見えましたが、絶えず吠えていても、さも親しげに尾を振っている犬を私は観察しました。それは怒りでしょうか。恐怖でしょうか。あるいは阿諛なのでしょうか。いいえ、それは動揺でしかありません。それは激発でしかありません。蓄積された力がそれらの動きによって解放されます。愛撫するのと噛むのとは大して違いはありません。私たちはそれらの動物たちの動きに人間の英知のしるしとか、人間以上のものとか、あるいは私たちと全く無縁のものを見たいのですが、それでも英知を見たいのです。もしもその人が本能の動きをより一層冷静に観察したなら、寧ろそこに見るのは一種の狂気です。例えば一匹の蟻が、険しい地面を小切れを引っ張っている様なものです。これらの動きは落下であり崩壊です。蟻は仰向けになってもなお走り、偶然にもひっくり返ります。余りに有名な蟻と蟻地獄の闘いも、これと同じ読み方が出来ます。その時に見るのは取り乱して痙攣的な動きです。一度ならず犠牲者は、火口の底にひっくり返った瞬間に、砂粒と一緒に外側に投げ出されます。穴の底にいるこの虫は、火山の様に噴出するのです。私たちは、しるしを解釈する習慣によってこの観念に抵抗します。私たちは馬を人間化します。実際に馬は二本の梶棒の間に入れられて拘束されます。顎で苦しげに繋ぎ止められています。馬は車輪の上の機械を引っ張りますが、車輪は全ての方向に等しく動きません。これらの全ての繋がりや鞭に打たれて、この動物は腕（もが）いて、可能な限りの動きを全て行います。私たちは、馬が速歩で行くとか、駆けるとか、馬には勇気があるとか、反抗するとか、馬小屋へ帰りたがっている、と言います。以上は、人間的な関係から得られた観念の良き例であり、その観念は人が観察するものに意味を与え、ついにはその観念を否定するものにまでも意味を与えます。しかし、デカルトの方法的予断は未だ十分に理解されていないのです。

人神同形説は人間そのものに適用されて、全てのものに意味が求められているのは既により一層自然であり、より一層良く説明のつくものです。巫女の痙攣も言葉であることを人々は望みます。しかしながら人々が、もしも子供の最初のしるしに従ったとしたなら、子供は決して話をしないのは明白です。ご存知の様に、家族の愛情は子供のしるしの採用によって、最初の幼年時代を延長することに貢献します。それ故に学校に代わることが出来るものは何もありません。そ

して学校に特有の厳格さは、自然のしるしを全て押さえつけるものです。もしも良く観察したなら、子供が気分の儘に行ったり来たり、即興で作ったり表したりする空想の学校では、家庭での誤りを広げるのを助けているのであり、それは口ごもりながら言う精神を作っているのが分かります。その反対に、直立して腕を拱いている子供が尊敬するに足るしるしに従う時には、学校での暗誦は美しいものです。私は学校での眩きまでも大目に見ます。それは羞恥心からの美しい結果であるからです。本職の俳優の旋律に似ています。それは時としてミサの時の〈続唱〉の抑揚、つまり古くて荘厳な雄弁をそこに見出します。慎み深いもののこの探求は、不可解な動揺が戻って来るのが分かる所謂意味深長な読書への無駄な努力よりも確かに勝っています。

私たちはここで放蕩やあらゆる種類の陶醉を理解します。宗教の全ての結果が、しるしへの注意と服従によって理解されるのは十分にあり得ます。信仰というものは美しい言葉遣いによってしか存在しないに違いありません。もしもこの美しい言葉遣いに注意して、歌とか単なる規則正しい話し方でも、情熱とは直接的に反対の筋肉やまさに内蔵の体制を仮定すれば、数々の奇跡が期待されるでしょう。ここには全ての芸術が、礼儀作法が作られる様に厳しい秩序の中で示されます。しかし如何なる人間においても、動物性が人間の一線を越えて何の意味も無い沢山のしるしで私たち一人ひとりの生活を一杯にします。声は唸り、顎は食いしばり、足は地面を叩きます。これらは身体における均衡と補償の結果です。やる事が無くて栄養満点のその様な筋肉は解放されます。働いたものは眠ります。そこから生理学的な姿勢と規範の無い物真似は、人間が些か猿に似ることになりますが、猿が人間に似ていると言う様にもなります。実際は、敢えて言えばそれは自分の体を搔くやり方でしかありません。その上、それは素晴らし羞恥心によって抑えられます。酔っ払いたちでさえも、その羞恥心を捨てているとは見えません。いずれにしても、これらの不意の感動を受け入れなければなりません。しかし、崇めなければならないと私は決して言いません。動物への崇拜は人類にとっての一つの大きな契機です。霊が乗り移って失神状態にある巫女への崇拜も、その延長でしかないことに気付くでしょう。私たちは、これらの全てのしるしと搔き混ぜられた言葉を惜しみます。それに戻ります。その鍵を探します。気分の原理とはその様なものであり、一種の信仰でもありますが、迷った信仰です。

どんな人間も、自分自身にとっては巫女なのです。人間は震えとか逆立つことで宗教を生みます。ローマ人たちが聖なる若鶏に食べ物を与えた様に、アルガン（1）は自分自身に食べ物を与えて、あらゆる状況から神託を引き出します。厳かな食事の習慣は、アルガンの注意をそらせるのを狙っている様です。アルガンのことを言うのは、想像力による病は気分の続きであって、気分の償いであることを理解させるためなのです。

しかし思考された気分は、私たちを性格というものに余りに早く近付け過ぎますから、これを少しの間放って置いて、裸の気分のことを語りたと思います。これは際限無く多様ですが、幾らかの動きの体制を見分けられます。そして、それらの結果は良く知られていて、原因もそれ程秘められていません。生きている身体を決して神秘のものにしないことが、実践の規則です。それは又、崇拜するのを望まなくなるや否や、方法の唯一の規則でもあります。生きている身体に

おいては、例えば犬においては全てが警告していて、幸せな半睡状態から出発して発達します。そして怒りとか激昂とか、言いたい様に言って良いのですが、直ぐに節度も無く動きの中に投げ出します。その後で一般に動物は周辺を認識したり見分けたりするのであり、鼻や眼で細かく調べます。それが実を言えば目覚めであり、好奇心なのです。更にその後で遅かれ早かれ、動物は幸せな半睡に戻りますが、不意の目覚めや唸り声が無い訳ではありません。それらは本来、想像力による動きであり、多少なりとも継続し得るものです。生物はどんなものでも四つの体制を経験しますが、生命全体の歴史の中で等しい広がりを持っている訳ではありません。或る人は寧ろ半睡状態であり、或る人は怒りやすく、或る人は事物への好奇心が強く、或る人は夢想的です。夢想家も好奇心が強いのですが、眼を閉じていて好奇心が強いのです。それらの体制の一つか二つが支配することに依じて、それらの混合が一人ひとりの気分を程々に描写するのを許します。しかし、危険を仮定することはありません。そして、これらの四つの体制は殆ど四つの気質に対応しています。それらはまさに有名な発明であって、人間の本質の観察者は誰もがこれらの気質を軽視出来ません。

幸福な半睡は休憩の体制です。栄養と排泄の機能が殆ど単独で働きます。混合と換気が要求する以上に、筋肉の群を目覚めさせることはありません。自然は全てがそこに戻ります。そこできれいにされ、作り直されます。妊娠している間の母親はそれに従い、小さな子供も又成長する必要性によって、蓄積が消費に勝つことを前提にしています。ですから姿を変えるどんな成長も、この体制が他者を牛耳っていることのあるしなのです。太った男は、彼の仕事が消化することであるので、その存在方法として十分なイメージを与えます。その方法は決して活発でもなく激しくもなく、急を要する必要性からも免れていて、知覚による好奇心も同じく余り無く、そして夢見ることすら殆どありません。

子供においては直ぐに逆上が現れます。蓄積された力は、怒りや痙攣や遊戯に使われます。この激怒に固有の法則は、走る馬に現れていますが、その動きそのものは鞭で打つものです。馬は自らを激しく地面の石や小枝などの多くの物にこすりつけます。そして、そのこと全てが言葉の本来の意志において馬を苛立たせます。馬がぶつかり出すと、誰もその激怒から全然逃れられません。そこから驚くべき出来事の暴力沙汰に見られるのは、沢山の人がお互いにぶつかり合っていて、彼ら一人ひとりに起きるもののイメージです。これは如何なる観念でもありません。もしも筋肉の中に力があり、どんな興奮も筋肉を球状にするが、内部の闘いが無い訳ではありません。筋肉の拘縮も無い訳ではないと理解すれば、観念を仮定する必要は決してありません。つまり肺の収縮や心臓の大きな働きが無い訳ではなく、それらは血液が、収縮した筋肉の結果によってより一層大きな力となって追い出される様になります。

好奇心とか探求の体制は全く別のものです。筋肉の遊びは、目覚めている感覚、取分け匂いや音や光に僅かに触れることに敏感な感覚が齎す、激しくない多様な興奮によって絶えず抑制されます。この時の光景は人間を構成します。事物の多様性に従ってあらゆる種類の行動を絶えず素描しますが、如何なる事物にも決して身を投じないことを理解して下さい。不安定はそれ故に、

謂わば体制にとって本来のもので、星が軽く眼に触れることで、幸福な人生を一瞬逸らせます。

もう一つの体制は、全く想像力によるものです。それは一種の苛立ちであり、時々には酷く辛いものになりますが、数々の感覚に働きかける外部の対象からやって来るものではありません。筋肉の活動そのものからやって来るものでもありません。それは感覚を興奮させ生命の活動そのものにならないのですが、それは恐らく分泌の変化や機能低下や閉塞や過労による筋肉でもあるのです。これも又、苛立ちですが、最も低次の水準で襲われるものです。かくして眼の疲れが、多くの方法で感覚的要素を興奮させる一種の微熱を引き寄せます。同様に血液が時々耳をぶんぶん鳴らしたり、指先をちくちくさせます。これらの些細な苦痛は、私たちの夢にも大きく影響します。どんな人も想像力に年貢を納めているのです。しかし自分の想像力を敵のために持つ人々は、スタンダールが言った様に、大変に幸せなことに胆汁質と名付けられます。彼らにおいては分泌も排泄も遅くなり、不安な奥底が設けられて、その上に情熱が刺繍します。従って変わらない人々には胆汁質の人々しかおりません。対象と機会の多様性も、彼らの本来の愛情へ向かわせることが出来ません。彼らは他人のことを気にかけることがなく、自分自身のことで精一杯です。そして、自分の思想を特に養うのは自分自身の人生であるから、彼らは一度感動したそれらの思想を決して忘れません。しかし行動の無いこの不安が仮定するものは、相当の年齢を積んだ進歩の様に見えます。この様にして四つの体制は、ここに列記したとおりの順番で現れるでしょうし、重要性も捉えるでしょう。それ故に私たちの経験のテキストは次の様に、半睡、激怒、認識、憂鬱になるでしょう。しかし半睡と激怒は、認識と思い出に常に多くの場所を委ねながら、年齢を重ねながら小さくなります。結局のところ過去の経験は、影とか霧の如く視線の上を広がって行きます。かくして私たちの全ての情熱は、そして私たちの全ての思想さえも歳を取るのです。(完)

(1) アルガンは、モリエール(一六二二～七三)の喜劇「病は気から」(一六七三)に登場する主人公である。

第二章 性格

人間は偶然の立場を頑なに果たします。或る人はトランプのボストン遊びが好きですが、ブリッジは拒否します。これらの遊戯の一方が気に入っていると、他方が気に入らないとかいう理由からではありません。その反対に一方は、気に入るだろうという意志決定によって気に入るのであり、他方も気に入らないのは同様に意志決定によります。最も馬鹿げていることは、生まれつき一方は好きで素質があり、他方は嫌悪が生じると信じていることに違いありません。けれども人はそのことを良く言いますし、そのことを証明せざるを得ません。非常に面白いトランプを拒否する方法が一つあります。楽しくなりそうだと思う瞬間に、楽しくなんかないだろうと決断したことを思い出すことです。私たちは殆ど全ての快樂を支配します。しかし、このことは容易に信じて貰えないかも知れません。この役割の儘、彼は保持するのを決断したのであり、人間とは殆ど不可解なものです。他の人が言う様に、階段の処からぶつぶつ言うのが聞こえて来ます。ドアが開きます。這入って来るのは俳優です。取り繕った鋭い顔付をしています。髪はカツラの様で、ひげは全てが付けひげです。ネクタイ、服装、決断を、その人は全てのアクセサリと同時に押し出します。更に、無造作な様子もつけ加えます。自然そのものです。おゝ、悲劇俳優よ！

歴史の最も偉大な場面の一つに、法王と皇帝の出会いがあり、偶然が永遠の一瞬に固定しました。司祭は全てを武器にして、自分自身の身を投げ出し、恐らくは最も守りの堅い敵に二度も勝ちました。しかし彼はそのことをすっかり忘れまし、直ぐに忘れて仕舞いました。そして相手も同じでした。これらの事柄は隠れた証人を教えるだけです。隠されているものは決して現れません。礼儀は、脅威や約束には譲歩することを要求します。その様にして歴史は、まるでそれらの言葉が使われなかった如くに、繰り広げられました。一九一七年の二ヴェル將軍(1)の無謀な攻勢を止めることが出来たことは、全て言われていたことです。考えられたことしか人は敢えてつけ加えて言いません。思想には場所と有効さが必要です。ところが部隊と弾薬は現場にありましたし、動いていました。世論が期待することは常に行われます。往復運動の中にある政治は、世論に従わなければならないという考え以外には他に何も無いのに倣って、この奇妙な関係を大きくしたイメージを示します。

この種の強制を、空想的であると呼ばなければなりません。しかし、空想的なものは未だ描き終わっていませんでした。この巨大な主題が汲み尽くされることは決してないでしょう。私は個人の限界に戻り、今はその限界の間に結果も原因も再び閉じ込められています。想像することは決して空想的なものではありません。これは眩暈に見られる如く、極めて現実的な何ものかであり、眩暈において身体が実際に落ち始めるのは明白です。与えられた加速と推進力に従う落下の如く、純粋な思想は自由なものです。そして、あらゆる思想は想像力に対する一貫した操作、そして屢々非常に術策を弄した操作によって、出来る限り自由になります。しかし意見が私たちをはっきりさせます。何故なら意見には想像力があるからです。思考することとは重さを量るこ

とです。創造することとは落ちることです。儀式における想像力の規律は、この連動を防ぐのを目的と見做します。それ故に性格はそこで乗り越えられます。人間はその時、気分によって誓うのではなく、自分の立場や職務から誓います。従って自由は、儀式のコートの内側で生まれ始めます。しかし又、この種の成長は殆どの人々にとってやって来るのが遅過ぎますし、多くの人々にとって逃しています。性格が作られるのは、愛情の秩序によっているのです。性格が定まるのは、家族と友情の範囲内です。それらの判断によってです。自ずと分かります。一目瞭然です。非難の効果、いや目的でさえも私たちの性格を自分に呼び戻し、私たちに期待している善悪の混合を正確に作る様に強く命令することではないかどうかを人々は自問します。あなたの遊戯は嘘をつくことです。そして私がそれをあなたに思い出させるのは、あなたが言っている言葉は一言も私は信じないと告げる時です。しかし他人はまるで嘘を言った様に、本当のことを言うやり方によって、今度は他人の方が私を疑い深くさせます。人は乱暴な者から逃れます。これは打撃を引き寄せて、速やかに生まれる空虚によって何らかの方法で吸い込みます。怠惰と見られた者が人の役に立つために突進するのは殆ど不可能です。何故なら彼には空間が欠けているからです。彼の周囲は全てが閉ざされています。彼に期待する者は誰もおりません。彼には通路も見付かりません。人の役に立ちたいと思っても、彼は人とぶつかり、邪魔者扱いにさせられて仕舞います。「昔の儘だよ。彼には他の人のことはどうでも良いのだ」と彼は言われます。彼はそれを信じ、自ら証明するのは、自分のことをそう言っているのを聞くのが心配であるからです。

言葉と動作が決して全てではありません。無言と不変の顔の表情は、無言と不変の返答を待ちます。その返答が申し分なく形づくられていない限り、顔から顔へ空虚さに似たものが生じます。その様にして眼、鼻、口、顎、頭の恰好などのあらゆるものが、何かにつけて批評したがる連中によって委ねられた場所に応じて従わなければなりません。各人は、人から許されている顔を持つのです。そして、思想が引き下がっても無駄です。思想は未だ若過ぎ、屢々偽善と言われますが、偽善の否定を働かせるのも不十分なのです。思想は愛情と共に引き出されて強いられたこの顔を飾らなければなりません。全ての空虚さが塞がれて、至る所で触れ合いが回復されて、家族的な和やかな均衡が確立されて十分に支えられない限り、窮屈さと期待が生まれます。スタンダールは、或る小国の王のことを言いましたが、王は数々の予想が外れるのを見て、この世で最も苦しんでいる人間であったとのことです。しかし、どんな家庭にも王がいて大臣がおります。そして、ここでは愛情だけが支配していますから、諸判断に対して飲む薬などはありません。有力な種族の長であった或る祖父は、一日に一度は怒っていました。人々はこの怒りを待ち、最初のしるしを待ちわびました。この要求は、国家の最高職務者たちにも同じことを感じていました。ルイ十四世は、或る種のことに関心でいられませんでした。そのことは彼には許されないことでした。中間部において、そして平均的な仕事の間で、注意力は十分に維持されず、愛情も活発でないので、時々には自らの素行を改めることも許されます。

自分たちの家庭でさえも屢々無視される、と人々は言います。実際にはそこだけで無視されるのです。間違っただけで判断しているのではないのですが、けりを付けて仕舞っているのです。動き回

る子供は鞭を当然受けるべきでした。しかし、生涯の悪を神に捧げるのを受けるべきではありませんでした。誰もその様な裁きを受けるべきではありません。誰もがそれに値しない、と殆ど私は言います。気質とはどんなものであっても、善悪を告げるものではなく、寧ろ善悪の或る色合いを告げているのです。活発な動きや恐ろしい目付きは、最も気高い行動も、又最も卑しい行動も同じ様にやり遂げることが出来ます。これらの断固とした拒絶の一つ、しるしの前での逃走の一つ、怒りよりも強い聲と放心の一つは、信

仰心と同様に暴力も良く拒絶することが出来ます。吃ることは、どの様な目的にも役立ち得ます。精神によるものよりも気質によるものの方が、上手く受け入れ易いのです。人は各人の本性を大目に見ますが、意見は大目に見ません。破ることが出来ない外観による説得術が、ここから全ての物事にけりを付けることとなります。気易い気質も気難しい気質も、全て一つで同じです。陽気な人も、難しい人に劣らず強引です。グランデが言う「やがて分かるさ」は、顔にある皺の一つと同じでした。ルイ十四世は言いました、「それは一つの場合だ」。しかし、人は屢々自分が望むものを知る前に打ち破られました。女性の移り気は、大変に夢中になった男性を絶望に陥らせませんが、しるしの中にある精神の空虚さによって驚かせます。しるしは至る所で至上者です。しかし殆どが常に思想を欠いています。子供は、自分が望んでいるものを知る前に出来ることを知っています。最初は何かを正確に知ることがなくても、多くの成果を手に入れる外交官も一人ならずおります。それ故に単に自分を管理する術を知る遙か前より、管理する観念はやって来ます。ここから家庭生活では、思想の全てのしるしが軽蔑されていること、そして気質の全てのしるしが尊敬されていることは驚くべきことです。アルガンは、その意見によって滑稽です。しかし彼の気質は法則を作り出します。気質は受け入れられます。人々は潮流や風と同じ様に折り合います。

この道によって、余りに驚くべき逆説が些か理解されて来ます。それは気質的に我が儘な処が少しも無い者たちには権力も決して無いということです。マルクス・アウレリウスには不機嫌な時が少しも無かったのではないかと私は思います。それ故に妻も子も、彼の崇高な思想を嘲笑したのです。しかしゲートを嘲笑する人は誰もおりません。その凝視しているものに関してハイネが言っていることを読んで下さい。偉大な人物は、確かに色っぽい女の様に演技しました。かくして政治的精神は、武器の使い方を覚える前に、先ず家族の中で武器を鍛えて作ります。そして、もしもしるしの背後を考えるなら、一つの性格に閉じ込めた儘でいるのは大したことではないのです。この保護された熟考は、権力への一つの契機です。それ故に支配された気質は、直ぐに定められた気質の上の方へ出た地位に就きます。ここに自由への道があります。バルザックの小説『ベアトリクス』で、カリストの動きが全く自然な喜びの有頂天の下で策略を隠していることに私は感心します。カリストは這入って来て、歩き回り、ピアノを鳴らし、手紙を握らせませす。フェリシテ自身もそれには騙されます。しかしそれは巧妙であるに過ぎません。所謂才気があるのです。しかし、形や動きのこれらの遊戯において、何度も成功しなければならないのは事を企てる事が出来る前です。というのも私たちは、他人を見る様に自分自身を決して見ないから

です。私たちは自分を漠然と感じます。従って私たちの本質によって引き起こす外観の実際の効果は、私たちにとって始めは不可解です。他人が期待していないものも又、楯の下に移させて守る前に、私たちは他人が期待しているものを学ばなければなりませんでした。愚かさは、愚かな顔付から来るのではなく、愚かさを決して否認しないその種の精神とは正確にどの様なものであるのかを見出さなかったことから来るのです。社会は特に、私たちが存在するものから最良のものを引き出すのを私たちに教えます。その反対に孤独においては一方で、最後には期待するものを要求し獲得する我が儘な判断から逃れますが、他方で、他人が望んでいるものであるのを口実にして自分が望んでいるものになるための術を自分に禁じます。「人は孤独の中で性格を除いて、全てを手に入れることが出来る」とスタンダールは言いました。

気骨があることは、一つの性格を持つのと決して同じものではありません。しかし、この言葉には二重の意味があることを私たちに教えてくれるに違いありません。気骨があることは、自分自身の外観を受入れることであり、一つの武器とすることです。吃ることも、近視であることも、大きな鼻で命令することも同じです。小さな鼻でも良いのです。大声ですと威厳がありますが、小さな声でも鼻声でも同じです。びっこの人も毅然とすることが出来ます。それを人々は期待します。滑稽な人は、これらの余儀ないしりの背後に思想が無いだけです。しかしながら自分が容姿端麗で少しも滑稽でないならば、まだ絶望する必要はありません。ソクラテスはあの獅子鼻を無遠慮に利用しました。美貌のプラトンは、他のやり方を探さなければなりませんでした。雄弁家は自分の欠点を隠しません。それを晒します。私は軽く口笛を吹く弁護士を思い出しますが、全く滑稽です。しかし彼は恐れられていました。敵は彼を嘲笑していましたが、それで又、感嘆していました。愚かな人々の間で先ず道を開く様に力強く自由な人物として殆ど口にしなないのは、生まれつきのこれらの動きを保存したり形づくっていなかった人物です。世界には気配りしかありません。もしも気取りを模倣するのであれば、滑稽です。それとは反対に、自分の本性に従って気取る人は力強く、尊敬され、酷く恐れられます。或る人が言いました、「あなたは単純になるのが自然であるし、単純であることを気取っている。これが大変に力強いのである」。(完)

(1) ニヴェル将軍(一八五六～一九二四)は将軍で、フランス北部・北東部軍総司令官になるが、一九一七年の作戦に失敗して、ペタン将軍に代わった。

第三章 個人

裸の性格は常に裸の気質に降下します。愛情の圏内には、尊厳も礼儀も無いからです。その時は愚痴をこぼして卑しくなりますが、愛する方法としては最低のものです。そして愛は許しを得るのが喜びですから、思いがけない結果に導きます。親身の愛はそれ故に、どんなものでも年齢さえ気にしなければ許さなければならぬことが多くあります。従ってこの愛は顔よりも早く老けます。時間に従うのではなくて、近づくことに従って老けます。それ故に誰もが愛する代わりに逃げます。不在は形づくり、存在は解体します。真の許しは美しいイマージュを作り直すことにありますが、何時も易しいものではありません。感謝 (reconnaissance) という言葉には従って二つの面があり、そして一つであっても二つの素晴らしい意味 (1) があります。所謂、盲目の愛です。しかし常に最良を想定する処から、それは寧ろ先見の明がある愛です。信用の無い人間は決して成長しません。ここでは神秘的な愛が、少なくとも思想の中に逃げ込んで行くどの様な人間も発展させます。ここには試練があり、騎士たちの長い旅があります。しかし、この英雄的なやり方は、自然によって十分に支えられません。換言すると、人類の発条である感嘆の術は家庭では少しも発展しません。その反対に、家庭では多くの原因によって全てが最も低次へ落下します。この時、人は自らをありの儘に、つまり低く捉えます。幸いにも、そして自然の必然性によって人間の秩序は、軽蔑していると思っけていても仕事や職務や義務を課します。これらの出会いによって友情が生まれますが、それは何時も脆いと考えられていて、敬意が要求されます。礼儀正しい友情は、形式が内容を救い出します。愛にとっても貴重な規範になりますが、それは愛がその反対に形式を軽蔑することで悪くなるからです。従って愛は孤独で老いるには多くの苦勞があります。その反対に準備された社会の輝かしい規範は比較的、まさに貧しくても些細なしるしの宗教によって思想まで愛を高めます。愛の法廷 (2) は、これらの指摘を明示しています。そして、どんな儀式も愛の法廷です。恐らく、本当の人間は儀式においてしか見られません。というのも気分は決して本当ではないからです。この様に謂わば自分自身の肖像画の様に、より遠くからより良く判断されると、人間はより一層良く自分に自信を得ます。王は殆ど何時も注目されて見られていますから、この様にして自分自身のために、より良く形づくられます。それ故に王の愛が、悲劇においてのモデルになるのも偶然ではありません。強さにおいてもモデルであるとさえ私は言います。何故なら激しさが感じられるためには、節度と予告が必要であるからです。少なくとも音楽は叫びではありません。単なる暴力は、敵対する者の言葉が無ければ、暴力そのものも欠如している様なものです。愛は障害の中で自らを知ります。

職務は継続した儀式です。仕事も、それ程には見えませんが、やはり同じです。所謂大変に良いことですが、人が職に就くや否や、周りの意見は最早その人自身を絶えず思い起こさせます。最も単純で知能の劣った人物でも、人から何かを期待されると、急いでそれを行います。多くの人々の期待も、取分け分業化されて緊密な組織においては期待された人の前に空虚さを生みます。彼は吸い込まれるが如くです。通りにいるこれらの人々は、皆がそこへ駆けつけます。そ

うです、「もしも私がそこにいなければ、誰がやるのだろうか」というこの善良な観念に鞭打たれるのです。この様にして人は自らを限定し、自己への義務を見出します。宗教への古来からの尊敬に従って、どんな些細なことを行うにも資格のある人でなければなりませんでしたが、それにとって代わるのは、現代社会にとっての圧倒的なものである労働の秩序と時間の価値です。席に着いているオーケストラの楽員たちに見る様に、期待されているとなると事の重大さを与えます。地位が危険になる時に、英雄主義がそこから全てやって来るのではありません。しかし英雄主義が確実に支えられているのは、そんなにも見物人たちの人間の集まりによるのではなくて、全ての地位や全ての役割が分配されている組織によっているのです。あらゆる状況における恐怖は、最早秩序が保てなくなる処からやって来ます。秩序（ordre）という言葉には幾つもの意味があり、大変に豊かです。秩序を受入れなかったり、働きかけている秩序と共にしない者は、自分の出来ることが決して分からないでしょう。私は、危険で殆ど不可能な海難事故の物語を読みましたが、驚くべきやり方で始めたのです。救助船の水兵たちは、飲めや歌えで盛り上がっていた酒場において、英雄主義どころではありませんでした。ドアが開きます。何者かが、船が遭難していることを知らせます。水兵たちは立ち上がり、駆け出します。そして、忽ち彼らは美しい仕事に就いているのです。これには自己への自信があります。外科医とか消防士も同じです。生き生きとしていて素早く、如何なる迷いもありません。愛とか友情に対しても、生き生きとしていて素早く応える者は幸福です。しかし、それは職業の折目や技量によって裏付けられた義務の道がなければ、普通に行われるものではありません。人間が愛することを知るには一般に知性的過ぎます。「私たち人類には、感情を作るのに義務がなければならない」と王妃クロチルド・ド・ヴォ（3）は言いました。

職業に関するこれらの警告においては性格が自分自身に現れますが、それは克服され、高められ、立て直されたものとして現れます。完全な意味としての勇氣は、これらの経験から生まれます。何故なら、それらの外観は人間を再び降下するように強く促すからです。しかし職業は逆に、彼の同じ処を毎日叩きます。試練が彼を聖別します。その様な彼が私と言う時は、何ものかのことを言っているのです。そして、その相関関係が個人と社会の間を明白にしているので、職業とか職務によって高められて形づくられた性格を個人と呼ぶなければなりません。そこから生まれるのは決して類似ではなく、天性と職務の出会いによる相違です。形づくられない相違は、相違ですらないのです。流行の一律性が、様々な相違を上手く活用するのも同じやり方です。

私は従って周囲の社会の刻印を受け取ります。しかし、それはその刻印が私を歪めることを決して意味しません。その反対に、それは私を形づくりします。この圧力から再び出るのがまさに私の本質です。この視線はまさに私のものです。しかし、これが人間的なものを生むことは、人間の秩序が原因である答えを、周囲の人間の秩序の中に探すことです。王は王の眼付きをしています。賢そうな眼付きや微笑は、各人が地位を占めて何事かを主張する多くの証人たちを前にして、同時に説明したり隠したりします。服装によって何時も思い出されもする顔付きや動作へのこの慎重さがなければ、表情など決してありません。ご存知の様に動物

の眼を美しいと言いたくても、もしも裸の生命でしかないなら、それは美しいと言えないのです。同じ様に微笑の中にも時々は無意識ながら一種の興奮が現れますが、それが顔を崩すのです。ダ・ヴィンチが描いた微笑にはこの何らかの跡を、いや恐らく沢山の跡が見られるでしょう。これらは最早意味の無いしるしです。そして、これらには決して答えが見付からず、それどころか注意深い仲間たちには混乱が齎されるので、その様な微笑からは思想が騙されます。表情における繊細さは、自分が理解されているという確信を特に意味します。人が自分自身に対して一つの顔を形づくり、そして自己を示しながら自己に対しての自己になるのは、この巧妙な遊戯によるのです。

未だ完全な自己ではありません。殆ど全ての肖像は完成されていますが、それは希望によるよりも寧ろ、思い出によるのであり、恰もまるで儀式が人間を終わらせたかの如くです。しかし人間は何時も突進します。各人は崇拜する規範に徹底的に従います。人間が人間にとっての神であるというこの美しい思想は、それを押しつけて抱き締めるや否や、信じられない程に遙か遠くへ赴きます。ここには自分及び他者を大きく見る美しい種類の最も力強い発条の一つがあります。感嘆は共通した感情であり、殆ど普遍的なもので、良心のために証言し、それと同時に良心を形づくると言えます。人間嫌いは、これによって十分に説明されます。というのも、取分け家庭生活においては、感嘆される者が姿を現して、最も気持ちの良い感情を撃退するからです。そこから人は容易に軽蔑するまでになります。それに反して政治的な生活の特性は、行動に従って人間を判断することです。行動は混乱した躊躇にとって常に大変に勝っています。人々は平凡ですが、彼らの行動が屢々英雄的になるのです。これは火災現場にポンプと梯子が到着する時に分かる様に、訓練された模倣が共通した行動に素晴らしい正確さと安全と大胆さを与えることになります。私たちの行動はそれ故に、私たち以上に価値があります。そして物語の中では更に、もっと美しく見えます。歴史上の、取分け伝説上の模範者たちに感嘆するのは容易です。それというのも彼らを描いたのは主としてその感嘆であるからです。しかし、政治的関係においては誰もが伝説的であると言わなければなりません。常に自然よりも偉大なのです。それなりに離れて遠くにいれば、直ちにどうしようもない程に美しい詩によって誤りでさえも偉大になります。

考えてみると私は、感嘆することへのこの熱心さに驚かされます。これは精神の自然な動きであり、取分け若者たちの裡ではそうです。これは子供にとっての最初の幸福です。子供に特有の弱さ、小ささ、依存への報復の様なものです。しかし、どんな年齢の時でも私たちは常に余りに近いものによって侮辱されるので、少し遠い処から見ることで慰めを探したくなります。自慢することを勧められた大人も子供も私は余り知りません。完全な意味での謙遜とは、人が言う以上に自然なものです。ジュリアンは軽騎兵たちに感嘆します。英雄たちです。しかし、彼らはそんなことをそんなにも長く考えたりしません。彼らが考えることは、馬を繋ぐことです。この人間の関係は最も美しいものです。それが人類を支えています。私は、自分の父や兄や友人や翻訳が上手な生徒を褒めそやした子供たちを沢山見ました。多くの単純な人々は、仲間や首領の素晴らしさを語ります。もしも彼らが滑稽だとするなら、その点で滑稽なのです。大袈裟な言葉は安易

であるにも拘わらず、自分自身を決して高く評価しないで、僅かなしるしから他人を非常に高く評価することは人間として自然です。ここで繰り返して言わなければならないことは、私たちは一人ひとりが新しいサークルに入ると、議論する余地の無い共感や評価や感嘆の資本を、前金として受け取ります。しかし、これを浪費するのは自分自身です。人々は美しく見過ぎるために敵意を抱きます。かくして一人の若い人の美徳、そして悪徳さえもが誓いを立てた感嘆からやって来ます。それは人間を知るのが極めて困難な年齢です。同様に行動の発条となり、彼が身を置き、先ず思想の中で模倣するのであり、それが好機とその連動の結果を格言に変えるのです。それにより若い人は弱さから、そしてこう言って良ければ果敢さから、そして意志的な情熱から、模倣する生活よりも悪い生活を時々助長します。しかし大抵の場合、彼は大胆な行動に、常にそれらを伴わない思い切った決断を結びつけるために、いやが上にも優れたものになります。その様にして美徳とは、原本が分からない写しなのです。誰もが決してありもしなかった勇気を模倣します。しかし、これは嘘をついているのではありません。私たちは、この英雄的な行為から私たちの最良のものと真実のものを自分自身から引き出します。そして、そこから私たちの処に戻って来る感嘆は、私たちを支えるために少なからず貢献します。私たち自身の外からではありません。というのも私たちの本質は一瞬も私たちを手放さないからです。しかし、その反対に想像上の英雄たちのこの激励や遠く離れた観客たちの拍手喝采も、余りに輝かしい表面を支えて修繕するのを目指して、私たちを自分自身の裡に深く探求させるのです。姿を現したいと思うことは良いことです。それは存在への道であり、恐らくは唯一の道です。（完）

（1）感謝と再認（見分けること）の意味がある。

（2）愛の法廷は、十二～十五世紀の文学で、現実の法廷を真似て恋愛作法に細かい規程を設け、恋愛談義に花を咲かせた架空の集まり。

（3）クロチルド・ド・ヴォ（四七五頃～五四五）は、夫のクロビス一世をカトリックに改宗させた。

第四章 人間

乗り越える力が人間の全てです。思想はそこから思考されるだけですから、その力は最も僅かな思想の中にも現れます。その様に見えるものを、その様に見えるものとして思考する者は、決して全てを思考していないのです。信じるものを絶対と信じている者は、最早信じることさえありません。デカルトは有名な懐疑の中で、思考すること以外に何も生みませんでした。デカルトが魂を肉体から区別したのは、その中であり、その行為そのものの中です。彼は英雄として思考しました。彼は信じたものと、信じたかったものとの間に、より一層長い距離を置きました。彼は普通の人々よりももっと後退しました。この拒絶は、人々が今まで見た中で最も大きな拒絶です。しかし私たちの裡では、最も取るに足りない者も拒絶します。最も単純な思考も拒絶します。例えば、神殿の円柱は小さくなって行く様に見えますが、彼はそれを拒絶します。見ることは単に見ることであり、それは信じることと同時に、信じるのを拒絶することです。意欲のこの弾性は世界を掘り下げます。従って、人間があるが儘に受け取る事物の状態は決して存在しません。そうでなければ眠っているのです。私たちの思想は、この誇張された懐疑によって全てのものを成熟させます。この活動によってしか思考されません。同様に、自己に同意したり、完成したり、署名したりすることへのこの拒絶は、人間を完成することでもあります。老人は幼年時代に戻ることもありますが、それはあるが儘に受け入れるからです。自然の重さによって思想は信仰にくっついては滅びます。信仰は行為にくっついては滅びます。モグラの思想は爪の先にあります。その様にして最も歳を取った老人は、思想を両手の先に探します。その反対に、思考中の動作はものを取ることを拒みます。思索者は背後へ跳び、逃れて、証拠にも恐れることさえあります。

モンテーニュは自分で言っている様に、信じるのを止める術を良く知っています。しかしそれと同時に、全てを信じることにも注意深く、それによって人を欺きます。彼の思想を解明することは殆ど不可能です。しかしながら、それらが思想であることについては決して疑う余地がありません。つまり彼の思想は一つ一つが最後の思想ではないのです。恐らく彼の最後の言葉である「何ものでもない」は、作品の中に深く隠されています。それを探さずしてはなりません。読む術を知るのはあなたです。プラトンは、もっと多くの術と共に確信させますし、もっと良く逃れます。デカルトは、それとは反対に、時々人が間違いと呼びたいものの堅固さによって、人を欺くに違いありません。しかし『哲学原理』第三部の幾つもの副題においてはびっくりする様な光があります。「諸原因からの全ての現象が偽りであると推論出来るのは本当らしくない。——けれども私が提示する諸原因が真実であると主張したくはない。——いや寧ろ、私が偽りと信じる幾つかの原因を私はここに仮定する」。そこに精神があります。

心も別のものではありません。ここでは普通の人々も感嘆しますし、改めて自らを見出します。もしも人々が愛する様に、単に愛することに同意するならば、愛は決してありません。バルザックの小説『ベアトリスク』におけるフェリシテ・デ・トゥーシェは、ある意味で愛のこの拒否に関

する良い見本ですが、それはより良く愛するためでもあります。そしてゲーテの叫びは有名です。「私がお前を愛していても、お前は何になるのか」。更に、ロドリグとポリュクトを引用する理由は、彼らが二人ともまさしく諦めた時に愛することを確認し、彼らが諦める限りでは正しいと言われなければならないからでしょうか。後者のポリュクトはまさに教義によっているのです。彼は自分だけの心の歩みに従って教義を作り上げた人物なのです。これらの英雄たちから戻りましょう。相手を避けて選択される自分自身の一部に保証を見出さない、どんな小さな愛もありません。愛するためのどんな術も、情動から情操へ、情熱から情操へ導く自由な沈思黙考の裡にあり、私たちの思想を生むのもこれと同じ動きによるのです。情動に身を委ねる者は行動の中で迷います。情熱に身を委ねる者は情動の中で迷います。それ故に私はデカルトに倣って敢えて言いますが、動物は我慢する術を知りません。それは結局、最も高い意識を除くと、全てのものに意識が無いということになります。ナポレオンは、初期の頃の監獄や亡命先で伝記作者に、「あなたは何も後悔しない人間に会っているのだ」と言った時に偉大だったのです。しかし私の考えでは、最も小さな脊椎も動物全体では似ているのと同様に、この偉大な人物の思想も感情も行動も、各エピソードはどんなに短くても同じ終わり方をしていて、この後退によって力強かったのです。何故なら投石の名手は石に従わないからです。

今は彼が、拒むために突進する者として見て下さい。ふくれっ面をした子供が些細であると私は思いません。その反対に重大なことです。子供は人物に関してここで自分で評価し、未だ解放されていない人間の誇りによって、直ぐに最も困難なものを選択します。子供はありもしない最悪のものを選んで乗り越えます。各時代を通して再び見出されるこの頑固さは、悪魔たちを生むことでしょう。悪魔たちは人が駆り立てる以上に遠く、そして速く走り回りますが、それは大変見事なものです。以上は、どんな人間にも犯罪と絶望の部分があるのです。しかし、そのこと自体は僅かなことで自分の背後にあると判断するに至るしかないとするなら、彼は決して成長しないでしょう。他の人々は、何も重要なものも興味あるものも無いと判断する青春期の一点から出発して、最初の考えによって余りに早く成長します。そこからは崇高な状態で彼らを待ち伏せている戦争が、時として彼らを急がせます。この時に数時間のうちに彼らは仕事に円熟し、それどころか追いついて、時としては若い儘死ぬ前に老化する時間を待ちます。その様な人々は非常に重要なことと、殆ど重要でないことを素早く知って仕舞ったのです。偶然からそこから抜け出した人々は、観想的な無関心に気付かされますが、余りに早過ぎます。彼らの間に、又は彼ら自身の裡には、死者たちの本当の対話や浄土の光が生まれていると思います。

平和の時にも又、戦争時の行動が人間にするしを付けますが、穏やかになってより一層大切に扱われます。愛は彼を修道院へ遠ざけるかも知れませんが、正しくは我慢させて、労働の道に就かせます。何故なら女性は自分の本性に従って、人が出来ることを知るよりも遙か前に、やるべきことを定めていたからです。しかしそれは子供がいる時だけかも知れませんが、ところが男性は、あらゆる商売に関わって注意することも無く知らず識らずのうちに苦労知ることを学びます。男女のこの対照によって、ロマネスクな人は余り出し抜くことが無く、自律的に生活する方法を

見付けます。行動は仕事の輪郭に従って思想を規制します。従って思想は最早、対象に出会うこと無く円錐体の様に広がる熟考の光に従っては発展しません。その反対に思想は、事物や人間の上に映るのであり、分割したり、思想の埃となって屈折するのでしょうか。しかし愛はそれらの全てを照らし、思い出のしるしを付けます。従って石工によって石が飾られ、大工によって梁が飾られる様に、毎時間が自分自身のために飾られます。思想というものは作品に死にます。戦争で人が死ぬ様に若くして死にます。それによって海が常に脅され、常に落下しながらも船を運ぶ様に、労働の力は社会を運んでいます。以上には短い詩となっている経験があります。それは何時も諦めに過ぎません。しかし諦めることも些細なことではありません。誰もがそこに達しなければなりません、それまで若者は実行しないで軽蔑します。しかし実行して軽蔑することは勇気を備えることになります。そして、見込みが無くても粘り強くやることに満足すると、それと同時に見解も戻って来ます。この見解は驚くべきものです。作品を心の糧にして、そして何時も職人が称賛無しで済ませている瞬間そのものを褒め讃えることに決めています。この様にして自己の地位を低くして生きることを甘受する者は、気付くことも無かった原因から成功がやって来ます。それ故に、虚栄心そのものの中には空想があります。何故なら、それは殆どが何時も見せかけであり、礼儀正しさでもあるからですが、偉大でない訳ではありません。軽蔑の中の軽蔑は十分に報われる価値があります。この人間の世界における全ての労働が、全ての交換、一日一日の普通の生活を保証する柔軟な平衡、これら全ては翼の無い愛の心配りによってしか可能ではありません。ここを良く見るならば、まさに人は翼の無い愛を愛さなければなりません。しかし、それはもう一つ別の年齢のものです。

試練は従って全ての人々にとって同じです。人が、他人たちと彼らの気質を受入れ、時代の性格を受け入れ、又交換と労働が私たちに与える個性のしるしを受入れると同時に、同じ教えによって自己を受入れなくてはなりません。しかし、決して自己に限定することではありません。確かに、人が信じているものを軽蔑しないこと、それと同時にそれを信じないためには、デカルトにならなければなりません。しかし、どんな人でも少しはデカルトなのです。それによってデカルトは偉大です。このお手本に従って深入りするのを拒否することによって、各人は成長しますが、自己を全て救済するのを誓うことによっても成長します。ただ、自己に慣れ、自己を許すためには時間が必要です。この和解は壮年期に固有のものであり、あなたを子供たちの子孫に送り返す審判者の地位によって大変に自然です。その時には、幼年時代の微笑と同じ様なあの美しい隠喩と同様に、観想的なものが言葉に現れます。これらの活動によって幼年時代そのものは顔に戻って来ます。そして充実した生涯が儉約により、そして謂わば荘厳な思想の延期により、各時代を通して確認されますので、結局はまさにそれらが全て再び発見されなければなりません。しかしそれらは欲望を抑えた気質で飾られたものを伴っています。経験は老人たちによって語られるということです。しかし、老人たちが私たちに齎すことの出来る最高の経験は、彼らの救済された青春のものなのです。（完）

第五章 意欲

どんな選択も行われています。ここでは自然が私たちに先行していて、どんな小さな事物においてまでもそうなのです。何故なら私がものを書く時、私は言葉を選ばず、寧ろ自然の動きを注意深く解き放って開始されているものを継続するのであり、これは変えることであるよりも寧ろ救済することです。従って私は、選択することで擦り切れたりしません。これは自己以外の意欲かも知れません。しかし私は誠意によって、どんな選択も正しい様に行います。同様に私は、これかあれかを考えて選択しません。仕事でも書物でも対象でもそれを与えますし、それと同時に気分が小さな世界から大きな世界まで反論します。しかし又、他者の後悔を知らないのは思想でない様に、誠意によって成長しないのも、決して思想ではありません。これらには作家の事例が幾らでもあります。日常の普通の仕事に戻りましょう。誰も愛することを選択しませんし、誰を愛するかも選択しません。自然が選択するのはです。しかし誠意が無くても成長する愛などは決してこの世界にはありません。選択が最良でなかった不吉な観念によって死なない愛なども、決してありません。もっと言います。もしもその選択を支えるために全てを投げ出さなかったなら、その選択が最良であった観念も更に人を欺くかも知れません。もしも行うことなく待つばかりであるなら、この世界に幸福はありません。苦勞せずに楽しむこともなく、長く楽しむこともありません。やりたいことをやるのは、一つの幻でしかありません。望むものになるのも又、幻です。しかし人は行うことを望まなければなりません。選択したことを後悔させない仕事はありません。何故なら、人が選択した時には他のものを見ていたからです。同様に、人間の世界は不平不満に溢れています。良く選択することに意志を用いないで、全ての選択が良くなる様に意志を用いて下さい。

誰も自分自身を選択しません。自分の両親も又、選択しませんでした。共通した知恵は、両親を愛さなければならぬと良く言います。同じ道を通って私は、困難なことであるが美しいことでもある、自分自身を愛さなければならぬと言います。エゴイストと言われる人々には、自分自身に満足していることを私は一度も見ませんでした。彼らは寧ろ、自分自身に満足させてくれと他人にせがんでいるのです。利己的支配の下では、支配するのは常に陰鬱な情熱であることに注意して下さい。ここで退屈する大人のことを考えて下さい。しかしそれとは逆に、自分自身と共に楽しむ人々は何という美德があることでしょうか。彼らは自分たちの周囲の人間の世界を暖め直します。美しい火の様です。独りでも良く燃えますが、人々はそこで暖まります。それはカトリック教が個人の救済という教義によって、力を込めて荒々しくさえも表していることです。そしてコントはここで、エゴイズムを決して認めるべきではありませんでした。誰も自己を救済する以上に、より良いことを他人に出来ることは何もありません。人を教えたいと思うや否や、それは明日になります。自己を学ばなければなりませんし、常にもっと自己を学ばなければなりません。しかし、私たちが考えていたエゴイストの首領である王とか父とか夫とか兄とかから期待したり希望したりすることは、周囲の臣下にとっては屢々無駄です。しかし、そうでないとし

ても彼自身にとっては幸福なのでしょうか。神学的な隠喩を借りて私は言います、「彼らのために祈りたいのなら、彼の様に祈らないことである」。ここに修道院があります。私は、瞑想する独りの人間の歩みだけが英知を教えることが出来るのを知りました。

私たちはこうして各人が自らを愛することに立ち戻ります。これは最も美しく、最も稀有で、最も困難なことです。「真っ直ぐであるな、しかし立ち直れ」。ストア派たちのこの格言は人を驚かせます。多くの人々は彼らの裡に高く啓発されたものを抱きますが、何も生みません。分離された魂です。コントが見た様に、私たちの最も優れた素質も、もしも下位で身近な何らかの機能から血を受入れなかったなら、所謂血の気に欠ける様です。例えば弁護士の熱心さは、血の力を何でも受入れます。全ての地上を正義が支配するのを見たいという欲望は、自然に的を外れて貧血に罹ります。正義への愛はその様に殆ど全ての人々の裡にありますが、他人を裁くために使われて、利害と情熱の前で常に屈します。この正義は取り込まれません。ところで、私はここでびっくりすることを言いたいと思います。最初は観念としてあり、謂わば自然の外にあるその様な正義は、全く取り込むことが出来ないと思います。観念は降下する術を知りません。自然を高めることしか出来ませんし、自然の力を高める限りは有効です。もっと適切に言うなら、これなくしては観念ではありません。各人は絶えず自己を立て直しますが、本当の英知はその時、その人間全体を高めながら、そんなにも早く立て直さない様に見えます。先ずは子供であることの必然性が私たちを十分に捉えます。しかし同様に、もう一度日々の眠りが私たちを最初の幼年時代に沈めます。そして休息も絶えず同じです。そこから私たちが理解すべきことは、全ての観念は幼年時代から出発して、そこに再び降下し、老人の思想はそれが少なくとも未だ一つの思想であったなら、現れる前に全ての年齢を通過するという事です。もしも最初に知らなかったなら、結局のところ知っても役に立ちません。そして無知であることは何らかのものでなくてはなりません。もしも私たちの正しい観念が間違った観念を立て直したものでなかったなら、全てがそれに近いものでなかったなら、正しい観念も、帽子や着物よりも私とは最早繋がらない観念の着物と同じであると私は言います。それ故に非常に貶された推論から上位から下位へ行く思考までの名前は其儘にして、判断力は常に下位から上位へ行き、絶えず幼稚さから成熟へ行くものであると言いましょ。

美の探求を仕事にしない者のことを好事家と呼ばれますが、この言葉は決して好意的に理解されていません。同様に、あなたもご存知の様に好事家は選択します。彼の趣味は常に観念から行動へ降下して行きます。しかし、外来の観念によって本質が容易に導かれる様なことは決してありません。そこから自己を越えて身につけた趣味の規則によって齎されるのは、自分の本質を趣味に適合させることは決して出来ないことです。以上のことから気分がものを言う時、驚くべき間違いが良く起こります。芸術家は高所を狙わずに、自分が行うことだけを狙います。趣味がここでその規則を自然に与えようとする処か、全く逆に自然が規則を与えるのであり、それも作品によって規則を与えるのです。好事家は判断から行為に降下しようとしませんが、この道は年齢の経過に逆行します。正義の好事家も同様に必ずいますが、彼は自分だけの事情で理屈に合わない

ことを言います。そして、好戦的な情熱に対して人間性は何が出来るのでしょうか。確かに人間性は廃れはしませんが、弱いものです。私たちの存在の高所は弱く、大地からは余りに遠いです。モラリストよりも恐らく裁判官の裡に多くの正義があります。その正義は純粹ではありませんが、もっと有効であることは本当です。ところで医者的人性は最早、ほんの僅かな苦痛にも敏感な至れり尽くせりのあの優しさはありません。しかし仕事が医者に力と要求を与えます。というのも医者が無理にでも食事や睡眠を摂る様にさせるのは、決して同情からではありません。寧ろそれは手腕です。結局のところ誠意には欠けていません。しかし欠けているのは能力です。根を張った意志であるとも理解して下さい。一本の植物の美德は植物の裡にあります。借りものではない如くであり、人間の美德も同様です。

プラトンが力を込めて言った様に、魂は肉体から分離しなければならないのも本当です。判断力には自由が残り、職務とか仕事に捉えられてはならないと理解して下さい。結局のところ真の人格は解き放されていなければならず、道具としての下位のものを捉えていなければなりません。私と言われるものは、何も私ではありません。この拒絶が思想です。しかし又、拒絶されるものは対象であり、対象がなければ思想も決してありません。存在とは拒絶されているものであり、これが全てを支えています。もしも天文学者があなたや私の様に、二百歩の処に太陽を見なかったなら、彼は天文学者になるでしょうか。従って私たちの富は誤りが取り除かれたものです。それ故に私たちが自分自身に近づけば近づく程、私たちは絶えず投げ出す半可な真実の殻で覆います。又、仕事の壁に当たってはね返され、集中された私たちの真の能力を発展させるのです。それは結局のところ人が行うことしか欲し得ず、要するに欲する術とは何かを継続することにあります。バルザックの小説の登場するデルヴィルの様な代訴人においては、一步ずつに自由な判断と四方に広がる崇高さがあります。これらの小さな反動も、信じられない位に人間の秩序を変えます。実力があるのが明らかに眼に見えて分かる人物にあっても、結果が逃げて行くのを私たちは良く発見します。それ故に決して自己の外へ突進してはいけません。マルクス・アウレリウスは譲位しませんでした。つまり彼は軽蔑する術を知っていました。教育という言葉には普通の意味では豊かな充実した意味を持っていますが、教育の不足は社会的関係と社会的威厳からの早まった軽蔑によって分からせてくれます。この不足はルソーにおいても現れていて、ヴェニスでの短い時期でなければ、低い地位であっても十分にそれに近い社会的な地位にはおりませんでした。従って彼は何時も気分により降下するのが分かります。気分は余りに彼らしくないのです。礼儀正しさは気分を服を着せて、王の精神に見せなければなりません。ルソーが高名になったことは他の人々には有益でしたが、ルソーには有益ではありませんでした。そして、この高尚な彼の魂が、惨めな彼の身体に十分に戻ることは決して出来ませんでした。ところで、彼がヴェニスで送った生活の後には職務が気分を規制する術を覚えたに違いないと私は思います。この時この賢者が、自分により一層即して働きながら、当時は有益ですが今では忘れられている何か非常に学識が高く慎重な忠告者になったのは本当です。止まりながら変わる人こそ幸せです。

謙遜について私が今言うべきことは僅かな言葉で済みますし、それで良いのです。何故なら、

それは主として筋肉の状態と同じであるからです。そうです、楽になって解放された状態であり、自分と共に親しみがあるものです。フェンシングの先生が弟子たちに教える時は、弟子たちは信じませんが、素早く突くための正しいやり方は、緊張しないで楽にすることと同じです。ヴァイオリンの先生が弟子たちに教える時も、弟子たちは信じませんが、音を伸ばして大きく弾きたいなら、弓を握りしめてはならないのもそれと同じことです。その様にして私が弟子に教えたいのは、どの様な知識であっても構いませんが、注意と欲望のしるしによって身体を硬くしたり息を詰まらせてはならないことです。弟子は私を信じないでしょうし、先生も又私を信じないでしょう。先生は、一つの観念を形にしたいと思うと直ぐに喉を締め付けて、大声を出し、間もなく叫び出します。つまり欲する術を知ることは些細な知識でも容易な知識でもなくなり、殆ど全ての人々は歯を食いしばることから始めます。その反対に私が実行するに違いないのは、プラトンが望んだ様な体操と音楽によるものです。

この息の詰まる注意とは反対の出来の良い小学生に認められる単純で自由で力強い謙遜を、私は解放された注意と呼びたいと思います。従って私の忠告は決して「注意しろ、私を見よ、拳を握って唇を食い縛れ」ではなくて、その反対に「主張するな、熟させた儘にせよ、私たちに時間はある。微笑しよう。走るのは止めよう。観念は逃げる。観念は戻って来るし、私たちはその時に会おうだろう」なのです。もしも私が歌の先生であったなら、こんな話はしないでしよう。歌を聴けば十分です。何故なら人に好かれたいという欲望は、どんなに小さくても音にかすり傷を負わずからです。そこからプラトンが何故音楽を、より一層微妙で力強い体操の様に理解していたのか私には分かりました。美しい生活は従って美しい歌の様なものに違いありません。四季と年齢を横切り、事物の秩序について、人間の秩序について、自分の小さな世界について、自分以外の状態を選択することは決して無く、謙遜が多くを希望し、全てを希望します。その様にして避難した自分の生活の中で、この世の風や仕事や祭や不幸に対して自分の自由な形を貸しながら、謙遜は嘗て言われていた恐らく最も偉大な観念を予感します。それはコントによるものですが、可能な変化は秩序との関係によって何時も極めて少ないものですし、それで十分です。それ故にあなたの欠点から、いや悪徳でさえからも、それに似ている美德を創り出して下さい。

(完)

第六章 自由人

若い人を最も驚かせることは、同一人物の中に確固とした信念とまさに信じることに満足するのと共に、一面では証明について極めて正確な判断力を持っていても、更に他の面ではそれらの全ての証明を元に戻して、恰も最初の新しい状態であったかの如くに、どんな問題にも再び向かう術を知っているのを見出すことです。この対照は生活と思想の間の静謐さと力強さの均衡と同時に、プラトンにもモンテーニュにもデカルトにも認められます。しかしながら、その人間のこの平安は各人が同じ方法で手に入れたのではありません。彼らが習慣や、政治的必然性や、ついには自分自身の情熱や、他人の情熱に同意するものは、時代と状況と職務と気質に依存します。そして、この混合は彼らの思想に安心と堅実さを与えますが、それは思想と対象の一致が最も高い博識を約束出来るものよりも遙かに多いものです。思想の生理学は、思想を支える条件と準備の正しい評価に倣って幸運の解決を説明すべきです。年齢は、知る前に信じなければならないことを告げています。身体の構造は、全ての年齢が一緒に生きなければならないこと、そして最後には私たちの誤りが救済されるべきことを告げています。魂と肉体の結合は従って人格にとっての操作です。それは各人が真実の裁判官であることを意味しています。証拠に基づく真理には一つの秩序がありますが、それは非人間的なものです。年齢と自然に基づく真理にも一つの秩序があります。証拠は、その場所が証拠を聞く者に申し分なく行われるか否かを知ることが出来ません。そこから私たちに予知しているのは感情です。従って思考する術は二つあります。

要するに、思考する人は単に二つの条件に注意するのではなくて、条件は三つあります。何故ならば、第一に彼は対象にしたいと思うからです。証明の一部は常にそこを目指します。しかし、対象は私たちをそんなにもせき立てる、と言ってはなりません。全てを知るのは不可能であるのを別にしても、又知らない儘でも一向に構わないです。最後には、他意の無い好奇心が人の言う程にそんなにも短気でない真理がこの世には沢山あるのを別にしても、誰もが知る前に行動する態度を取ることはやはり本当です。その様にして人は延期することが出来ます。そして、急を要すると感じる度毎に延期するのは賢明なことでさえあります。他方では又、決して求めもせず愛してもいないで、あるいは何かの食べ物を拒む様にはねつけることにも真理があります。そして、この感情は何かを意味します。結局のところ思考する人は誰もが他人と一致したいと思ひ、この状態が最も重要と思われれます。一致することを拒否するなら、決して学ぶことがありません。優れた証人たちを出頭させずに、人は決して独りで思考しません。実際に思想家たちを読む以外に思考する方法は決して無いのです。ところで、思想家たちは一見した処お互いに一致しないので、飢えた人の様に決して意見に飛びつかないことが既に一つの理由になっているのです。しかし、その比較は決して十分ではありません。賢者は思想を受入れる方法を沢山知っています。彼はそれを調べて、自分の思想を生む決心をする前に、そこへ這入り込むことさえ出来ます。この慎重さが無ければ、錯乱や絶えられない不安が生じるでしょう。そこから私たちを守ることが出来るのは、その豊かな教養だけです。自分が何時も考えていたこととか、人が何時も

考えていたことに対する用心によって人がしっかりと持つのは、恐らく性急さや直ぐに罰する節度の無い愚かさへの恐れからです。ここでもう一度言わなければならないことは、意見や党派を簡単に変える人々の多くは一般には評価されないことです。この感情は正しいものです。

以上は予防の意味もあります。勿論、魂にとっては表皮に過ぎません。内側において予防があると私は思いませんし、寧ろ自己に即して思考することへの断固とした決意があると思います。勇気とは怒りに似たものであり、決して切り離せませんので、怒りは又恐怖に似たものでもあります。怒りは、恐怖の色合いを残していますが、そう言うのでは不十分で、恐怖の全てを残しています。同様に、実際の真理は誤りを立て直されたものであり、保存されたものを意味します。もっと適切に言うと、再び発見されたものと言えるでしょう。私が幽霊を蘇らせる術を知らない限り、恐らく私は悪魔祓いをすることは全くありませんでした。これは信仰を確認することでもあります。この動きはまさに秘められています。恐らく、このことが明瞭に見えるのは種族の中だけです。それは単に占星術から天文学への恩知らずの移行によるものではありません。コントの信仰心である熟考への回帰によるもので、神話の中に思想を再発見します。恐らく、全ての時代を最も強く結び直したのはヘーゲルです。彼は人類の青春の全てを、いや幼年時代の全てさえも円熟へ導きました。何故なら、結局のところ泥と血の神々である巨人タイタン(1)たちが、政治的なオリンポスの山に競争を招いたのは本当であるからです。又、打ち破られたこれらの神々が、その後に裁かれた力として煙を出すエトナ山以外の何ものでもなくなったことも本当であるからです。同様に、政治的なオリンポスの山が力による他の罰も見せて、他の審判者を呼び、結局競技者の体型は克服されるべきものであるのも本当です。以上によって神話を理解したいならば、何も神話を変えるべきでないことが分かりますし、そのことは既にプラトンが私たちに教えていることです。しかし、神話中の神話であり、最後には規制されるのではなくて規制している想像力になっている洞窟の神話を、その形に従ってもう一度搾り出さなければならないでしょう。私たちは皆、その洞窟の中にいるのです。それらの影しか見ませんし、これからも見ないでしょう。賢者は先ず、数学的な回り道によって信じることから逃れます。しかしいずれは人間としての場所に戻ります。刻一刻とそこに戻ります。眼は一瞬他の処を見ても、彼はそこに戻り、決して離れないと理解して下さい。プラトンがここで囚人に勧めているのは精神の旅です。身体の絆を断ち、他の秩序に従って思考する訓練をするのは少なくとも注意力です。注意力が数学的な図形となって切り落とされた影を最初に構成しながら突進するのは、洞窟そのものの中です。そして、そこから正しく思考するためのモデルである諸観念に高め、最後には正しく思考するための規則、つまり善の規則にまで高めます。その時から小さな壁の背後に回って映像の見世物師の秘密に驚いた者に似て、賢者は肉体の眼を大きく見開いて、最初の外観に戻る術を知ります。そこから賢者が示すのは本当の姿です。影は、それ自身の裡に誤りはありません。法則そのものを決して十分に認識しない者たちの裡の誤りによって本当の姿を賢者に見せているのであり、全ての人々にも見せているのです。影は、それらが現れる時には全てが真実です。一人の人間の全ての影は、その人間の形を説明したり、それと同時に洞窟、火、鎖に繋がれたその人間の場所その

ものを説明しています。丸い影と、ぎざぎざのあるもう一つの影が、同一のものにしてであったと私は少しも信じませんでした。私はそれを信じる事が出来ませんでした。けれども信じるべきであったのです。その様にして肯定と否定が一緒に許されます。巨人のタイタンたちの反乱と政治的な神の厳格さも、一緒に許されます。情熱と盲目の理性も、一緒に許されます。更にそれらを裁く無謀なその他の理性も許されます。しかるべき場所にいれば全てが真実です。そして、この拒否の拒否によって、世界は純粹に、忠実に、そして全く真実に存在します。それ故に私は、如何にして影が不可解なまでにこの世の事物の間で地位を占めて、それらを確認するのかを語りたいと思います。

それは或る優れた行政官で、非常に遠慮深く、古風に礼儀正しく、博識で、細心綿密な人でした。そして見た限りでは、全ての人を尊重していました。彼はミサも注意して聞いていました。何事にも保守的な彼は、政治についての考えを一種の短気以外の情熱ではないと指摘しますし、その考えは不必要であり危険でさえもあると判断していました。彼の全ての行為は謙遜を示していました。しかしながら、彼はまさに有名な幾つかの小論文の中で明らかになっている稀有な思想と結び付いていましたが、その実行力の力強さが何処から来るのか何も分かりません。彼は妙だと思わせることとは無縁に生きていましたけれども、そして彼には何事にも妙な術策ができた上司たちがいましたけれども、それにも拘わらず彼は職務において誰も気にせず公平さと毅然さを見せていましたし、彼の意志は王の命令にも匹敵するものでした。私は、明白な証拠も無いこの力強さを一度しか見ませんでした。しかし、その影の輪郭は書き終えなければなりません。彼は長い人生の終わりに、精神科学アカデミーに入るために、書き物の入った小さな鞆を持って、幾段かの階段を登りました。私が思うにそれは決して野心からではなく、寧ろこれらの人々に軽蔑を決して表明しないためでした。慎み深くて口の堅い人は、認識する前に話し始める大胆な人の前では直ぐに後退して受入れません。私は、這入ったことのない良く管理されたこの王国の周りで、一度ならず待ち伏せました。或る日、私はついにこの内側の警察の何ものかを発見することが出来ました。そして私が知っていることを全てお話したいと思います。

二、三人の社会学者は道徳について語りましたが、彼らは社会が真の神であったこと、そして正しい良心はどんなものでも力強い直接的な感情によって、議論の余地の無い秩序を政治的な秩序から受入れたことを言っています。彼らはこの様に指摘したのですが、既に理論化していたのは、戦争が殆ど全ての人々に明らかにした少し遅過ぎたその服従心です。私は決まり文句の繰返しを知っていましたが、私の哲学者に関しての意見を待ちました。何故なら私はその日、何ものかを告げていた注意と共に聴いている彼を見たからです。彼は遂に話しましたが、凡そ次の様です。彼は言いました、「私は正直に言いますが、宗教や道徳に関する事柄をあなた方がお書きになっている様に理解する訳に行きません。というのも私は、意見、風習、制度の外的な拘束を知っていますし、経験しているからです。私は、ありの儘の秩序に価値があり、又伝統には言葉で言えない知恵を含んでいるという強い感情を持っているので、普段では、そして全て疑わしい場合には、それらの拘束に応じます。しかしながらいずれにせよ、私はやはりこの外的な規則

に従うとは言えません。寧ろ私の裡の何ものかが服従し屈服することを絶対的に拒否して、逆に全てを裁く義務と全てを拒否する権利を認めている様に思われます。結局のところ、私が変われない価値に関するもう一つの秩序があります。私は何時も精神の最も奥深い秘められた処に頼ります。最後には疑う力が、この社会秩序を真の場所へ委ねますが、その場所は決して最初の場所ではありません。要するにその場所は、私が精神の唯一の権威に止めている最後の尊敬を少しも得るものではありません。道徳は両者の間に位置していて、既に外部の命令を他のものに従属させているのかも知れません。しかし、私が宗教と呼ぶものについては、私はそこに権威としての如何なる種類の考慮も見出しません。その権威がどんな資格を示していても見出しません。その反対に祈りには権威を遠ざける内部の働きがあります。それは真の力に訴えるものであり、精神の最も秘められた処でしか分かりませんし、感じられることもありません。それ故にこの孤独は、神殿の中と同じであり、宗教の瞬間です」。「お分かりでしょうが、私たちはお互いに直ぐに理解し合うことはありませんね」と彼は微笑してつけ加えて言いました。他の人々は、売れない商人の顔付きをしていました。しかし見物人でしかなかった私は、この話が決して忘れられませんでした。私の精神の中で沢山の方法でひっくり返すにつれて、そして私の気質や思想にとってさえも非常に奇妙なこの人物の本質の服を改めて着るにつれて次第に私は、服従の中央に隠されていたこの自由をもっと良く理解しました。それは下位の秩序を乱す処か、これを管理しているのです。そしてこの方法によってデカルトも同意したのですが、人間の群をより一層良く動かしながら、そして反乱の精神を生むことよりも恐らくもっと高く高めながらも、プラトンが心配した様に、秩序に反対する情熱をかき立てる危険を常に負っているのです。（完）

(1) タイタンはギリシア神話で、天の神と土地の神の間に生まれた十二人の巨人の一人。

第七章 ゲーテ

共通遺産において一観念の価値は、そのことを命じている証拠にあります。多くの人々がこの調整に精を出します。この様にして人類は学びますが、又必然的に要約もします。要約の宇宙が考えられますが、恐ろしいものです。しかしながら、どんな子供も裸で生まれますし、野蛮人です。石器時代は、驚くべき機械を押し進める様に、そして別の機械である要約により考える様に強く命じます。注目すべきことに動物の皮は今でも最良の着物であり、最も求められているものです。舞踊、音楽、詩歌は、動物の皮を着て日の出の時に輪舞します。そして洞窟の形をしたポーチの下で、人間は観念を忘れて思考し始めます。昔の諺が韻を踏む様に、人間は今でも韻を踏みます。今でも手を叩いて称えます。ベートーヴェンの喜びの歌は、口で言えない位に大昔の歓呼に似ています。泉は詩人に歌います。風に吹かれる柏の木は、常に神託になります。人間は要約を拒絶します。要約に投じる組み合わせばかり必要な人々は、自分の音楽を決して再発見しません。しかし彼らはコンサートの時には、食事の時の様に歯を剥き出しにしているのを私は再発見します。それ故に観念は空に上がって再び降りて来ません。この動きはスピノザの才能によって、少なくとも一度は完成されました。しかし又、『エチカ』はデカルトの墓であるとも言えます。体系は老人たちのものです。しかし私たちは決して老人に生まれません。それ故に非常に褒め称えられた進歩は疲労以外に傾聴するものではなく、過度の不幸も同じであると言いましょ。しかしながら強者の知恵は、それでも同じものになり変わりありません。それは少なくとも広がります。少しも珍しくありません。その知恵は、骨と筋肉の機械の方をより一層考慮するであろう自他に教える術によって働きかけるでしょう。カントは、その厳しい探求においても経験に一番近くにいましたし、人間の身体にも一番近くにいました。しかし、どんなに用心しても範疇は、それらの特殊な軽さと純粋さによって、やはり観念の空へ昇っていました。そして、これらを降ろすために彼はあらゆる努力をしたにも拘わらず、範疇を適用可能としなければならなかった図式主義は、人間の本質の奥底に深く隠された儘でした。つまり、年齢の法則に従うなら、他者の知識から無知そのものへ戻るための道は恐らく少しも無いのです。人間の本質は観念を受入れることが出来ませんが、恐怖と熱狂、舞踊、歌と祈りから、観念を創り出さなければなりません。最小の観念でもそうなのです。ですから、改めて斧、楔、釘、投石器、弓を発明しなければなりません。又、同じ動きから勇気、節制、正義、知恵を発明しなければなりませんし、私たちに釣り合っていて私たちの形に応じて行かなければなりません。貰い受けた武器は使用しないことです。力を与えるのが各人に固有の思想である時、意地悪は従属させられます。弓を発明する人は、少しは復讐を忘れます。その代わりにピストルは恐らく最初の狂人に、学者千人分の力を与えます。いいえ、そうではなく、先ず狂人は拍手をして歌い踊ります。このために私は、現実的観念の裡で、この不完全な起源を書きました。しかし人間的な尺度に従って、この下書きを終えなければなりません。詩人の中で恐らく最も博識のある人で、精神に従って間違えることの最良を知る人々の中の一人が、何かに役立ち得るのです。

ゲートに特有の威厳は、物質的力とは如何なる関係も無く、そのことによって殆ど超人的でさえありますが、孤独で自由な判断力に由来していて、稀有で崇拜され恐れられているのです。或る人がこの王の様な力を行使する時、彼は苦勞すること無く低次で満足し、その力を低次の地位で保つことに気を遣いますが、恐らく変えることには気を遣いません。そこへ降りることは決してありません。その時、プリズムの実験に執拗に反対するとか、宮廷の人になるとか、眼鏡をかけている人々が我慢ならない様に、些細なことが眼に見えて来ますが、しかるべき処にいるのです。これらの事柄は堅固な建物の中の様に考察されます。そして、最も高い処には灯台の様に光があります。しかし動き回って敏感な人間の建築物における安定さと建設は、更に何と難しいことでしょう。貴重な品質のこのモデルに、あるが儘の低次の秩序で満足するこの現世の知恵を見分けなければなりません。このことは最初に彼を崇拜することから思い止まらせます。自分を高めさえすれば、それでまですます。生きる術の中には、短所を受入れる術が含まれています。このさりげなさによって短所は大きくならずに小さな儘ですが、その反対に虚栄心は何時も外部のモデルに従って短所を形づくりします。些細な決まり事によって、低次のものが余りに形づくられて作り直されている状態と同じです。その時のこの状態は不安定です。同様に、些細な原因のためにくず鉄の山を生んでいるのはこの抽象的な力学です。要するに、一本の足がもう一本の足より短ければ、跛を引く術を知ることが偉大な判断のしるしになります。この観点から、等しい二本の足は既に一種の跛を引くことを生み出しているのです。何故なら、ここに十分なものが何も無いとするなら、全てが十分でなくてはならなくなるからです。

この種の思想は従って常に自らを高めて、決して降下しません。数々の思想を自然に基づかせる低次から高次へのこの動きを、恐らく詩と呼ばなければなりません。そして、この様にしてどんな偶然も最初に美を生み、最後には真理を生むのです。平凡な美德からゲートを救ったものは、確かに全く自然に近いこの自由であり、それは全てのものの基礎になっています。それ故に自分自身を大変良く保持しているゲートはその儘にして、良く見る術を知れば、既に卑小な人々であり自らを変えることよりも背伸びをすることに忙しいあの小人たちのことを最後に考察しなければなりません。詩と優雅さは誰の裡にもあります。しかし、他の処の様にここでは軽々しく訂正の線を引いて消さないで下さい。あなたが消す場所には書くことは何も無いのです。そのことを良く考えて下さい。それ故に、持っているものと共に創り出さなければならない、あらゆる芸術家に親しいこの観念に基づいて鍛えて下さい。これらの小人の誰もが、自分の持っているものでしか創ることが出来ません。壊すのではなく、高めることです。登山家が一つ一つの石に文句を言わないで階段を作り登攀する様に自然の線の一本一本が、十分に確認されて認められさえして、そして人間の野心の歩みにして下さい。自然のもので借り物でさえなければ、全てのものは役立てることが出来ます。書かれたものが示している様に、それは大変良く抵抗します。そしてモデルと共に自然を構成しています。それ故に、嘘による羞恥の如く、出会いによる隠喩の如く、暴力による勇気の如く、怠惰による謙遜の如く、あなたはなぐり書きによる書き物を創るのです。その様にして詩人は韻により思想を創ります。従って自然のこれらの相違を含みながら

、外見上は全くの悪ですが、実際は全くの豊かさであるのが、これらの美しい多様性なのです。不平を言わずに、自己を認識し、確立することです。というのも低次のものは、どんなものでも材料になるからです。そして、山ほどのものを彫刻する田舎風の天才たちの如く、材料そのものの中に見出さなければならないのが形なのです。それ故に子供は解放されて大人になって欲しいし、悪徳は発展して美德になって欲しいのです。誤りであるものだけしか訂正しないで下さい。そして、外部の無縁のものしか誤りと呼ばないで下さい。他人のものでも自分のものでも、どんな作品においても多くのもを見抜かなければなりません。そして、最も抵抗しているものは最悪ではないのです。ゲーテ自身がこの章、そしてこの本を読んでくれるでしょう。彼は言いました、「抹消に精通するには、その仕事の中で老人にならなければならない」。(了)

フランスの哲学者アランALAIN（1868—1951）が、一九二七年九月二〇日にN.R.F.（フランス新評論社）から全二巻本として刊行した『思想と年齢』LES IDÉES ET LES AGESの全訳である。その後、一九四八年に内容はその儘で、ガリマール書店から新版が全一巻で刊行されている。

翻訳するに当たり、テキストとしては、Alain, Les Passions et la Sagesse (Bibliothèque de la Pléiade), Gallimard, 1960 に所収されているものを使用している。本書は『幸福論』『芸術論集』と並んでアラン作品を代表するものの一つであると言える。何故なら、生涯に亘って思想の体系化を企図しなかったアラン哲学の核心を、最も明解に表した作品の様に思えるからである。

この電子書籍の翻訳本は、全三巻として登録した。上巻は序及び一部～三部（全二十一章）、中巻は四部～六部（全二十一章）、下巻は七部～九部（全二十一章）を登録している。なお、翻訳するに当たり、アラン著『思想と年齢』原亨吉訳（角川文庫、1955年）を参照し、幾多の点で有意義な指摘をご教示頂いた。そして、改めてアランの思想を出来るだけ理解し易い様に翻訳しようと心掛けたつもりであるが、テキストそのものが数式の様に理解することは不可能であるから、成功したかどうか甚だ心許ない。

例えば、「AはBであり、AはBでない」という表現に遭遇したりするのである。数式の様には決して翻訳出来ないのがアランの文体である。しかし、言葉には意味があり、しかもその意味は他の一つだけの単語では不十分なものが殆どである。一つの言葉は多くの意味に溢れている。ここに幾つもの翻訳の困難な点があるが、又、翻訳が或る種の創作にも繋がる面白い点でもある。

文法についても同じである。例えば、動詞の時制について言えば、「私は明日、学校へ行きます」は、フランス語の場合「行きます」は現在形の「行く」（vais）ではなく、未来形の「行くだろう」（irai）になるが、日本語では現在形の方が自然な場合が多い。単純に「行くだろう」「行くだろう」と、画一的に未来形ばかりに翻訳していると却って不自然になる。日本語教師なら直ぐにお分かりになると思うが、日本語の現在形には未来形も含まれているのである。但し、学校での授業でフランス語の試験を受ける場合は「行くだろう」と和訳すれば、間違いなく正解が貰えるだろう。しかしながら、大人に成長して社会に出た時には、自然な日本語に翻訳することが重要である。「成熟に達した人間の精神は、少しも子供っぽく振舞う必要は無いのです」（『人間さまざま』『間違った観念』）とアランも言っている。

因みに、「AはBであり、AはBでない」も、「人間は動物であり、又人間は動物でない」とでも和訳すれば、理解出来るのではないだろうか。いずれにせよ、アランを読む者は思考する者にならざるを得ないのである。又、その様な努力も必要である。つまりその様な努力をして読む裡に、自発的自主的に見たり考えたり言ったりして、延いては自ら生きる術を自然に獲得出来る様になるのではないかと思われる。この様な精神は、もしかすると真の幸福を手に入れるために最も必要なものかも知れないのである。このことが間違いでなければ、本書がアランの代表作品

の一つであるばかりでなく、現代の我が国において一人ひとりの真の幸福に繋がる最も必要な書物のうちの一冊であると感じて戴ければ、訳者としては望外の喜びである。

二〇一七年三月三〇日

東京西郊たまプラーザの寓居にて訳者記す

アラン
思想と年齢（下）

<http://p.booklog.jp/book/113861>

著者：アラン（翻訳：高村 昌憲）

翻訳者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/113861>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト